福岡市博多区大字下月隈

宝満尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1974

福岡市教育委員会

福岡市博多区大字下月隈

宝満尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集

1974

福岡市教育委員会

7206

内行花文明光鏡（4 号土壙墓出土）

（1）鏡出土状況

（2）宝満尾遺跡出土玉類
①15号土壙墓出土②石蓋土壙墓出土③古墳出土

序　　文

最近の国土開発という名の土地開発の急激な進展は、埋蔵文化財保護に関して多くの問題を生じています。福岡市とて例外ではなく住宅地、その他による開発はとまるところを知らないのが現状です。当教育委員会では、やむをえずして保存できない文化財については、事前の発掘調査をもって記録保存につとめています。

今度、福岡市博多区大字下月隈字宝満尾に当教育委員会施設部用地課によって席田中学校の建設を予定し、事前に当教育委員会文化課が主体となり発掘記録調査を実施いたしました。

調査に際しては、調査指導員の先生方、地元の方々、および関係諸方面の多大なる御協力を得て、弥生時代墳墓、生活の究明に対して多くの成果を得ることができました。これも関係者各位の深い御理解によるものであって深甚の敬意を表するものであります。

本報告書が福岡市のため市民の方々に御活用いただければ幸いです。併せて年々失われゆく埋蔵文化財についてなお一層の御理解と御協力を願ってやみません。

昭和49年3月

福岡市教育委員会

教育長　正木利輔

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会施設部用地課の席田中学校建設に伴い、福岡市教育委員会社会教育部文化課の昭和47年度の事業として、昭和47年７月10日～昭和47年11月21日にわたって事前発掘調査を実施した福岡市博多区宝満尾遺跡の調査報告書である。

2．本文の執筆には山崎があたった。

3．掲載の実測図は主に山崎が担当し、一部、下條信行、後藤直、沢皇臣、横山邦継、小池史哲、牧野吉秀、荒木誠、松本博明、長谷川豊の諸氏の協力を得た。製図は山崎が主に担当した。

4．写真の撮影、遺物写真は山崎が担当した。一部、小平忠生、小池史哲氏の協力を得た。

5．本遺跡出土の鏡の銅分析、ガラスについて分析を諸先生方に依頼中であったが、本書に収録することができなかった。おって公表する予定である。

6．本書の編集は、三島格の助言のもとに主に山崎がこれにあたった。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経過 …… 1

2　調査組織の構成 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 3

1　遺跡の立地 …… 3

2　周辺の歴史的環境 …… 3

3　宝満尾遺跡周辺の遺跡と遺物 …… 6

第Ⅲ章　発掘調査の概要 …… 8

第Ⅳ章　A地点の調査 …… 11

1　A地点の調査経過と概要 …… 11

2　宝満尾古墳 …… 11

(1) 墳　　丘 …… 11

(2) 内部構造 …… 13

(3) 遺物出土状態 …… 13

(4) 遺物各説 …… 15

(5) 小　　結 …… 17

3　石蓋土壙墓 …… 20

(1) 土壙墓 …… 20

(2) 遺物出土状態 …… 20

(3) 遺物各説 …… 21

4　袋状竪穴 …… 22

(1) 袋状竪穴の分布 …… 22

(2) 遺構各説 …… 23

(3) 遺物各説 …… 30

第Ⅴ章　B地点の調査 …… 31

1　B地点の調査経過と概要 …… 31

2　B地点の層序 …… 31

3　遺構の分布 …… 32

4　遺構各説 …… 34

(1) 甕棺墓 …… 34

(2) 土壙墓 …… 39

(3) 石組遺構……50
(4) 溝状遺構……51
5 遺物各説……53
第Ⅵ章 まとめ……67
(1) 配石について……67
(2) 鏡について……68
(3) ガラス小玉……69
(4) 土器出土状態……69
(5) 土壙墓群の年代……70

挿 図 目 次

第1図 遺跡の立地と周辺遺跡……4
第2図 周辺遺跡の遺物実測図……7
第3図 宝満尾遺跡周辺地形図……9
第4図 宝満尾古墳墳丘実測図……12
第5図 墳丘断面実測図……折り込み
第6図 宝満尾古墳石室実測図……14
第7図 宝満尾古墳玉類出土状態実測図……15
第8図 土師器、須恵器実測図……16
第9図 宝満尾古墳出土玉類実測図……17
第10図 宝満尾古墳出土鉄器実測図……18
第11図 A地点石蓋土壙墓実測図……20
第12図 石蓋土壙墓玉類出土状態……21
第13図 玉類実測図……21
第14図 袋状竪穴分布図……23
第15図 1～3号、7号袋状竪穴実測図……24
第16図 4、11号袋状竪穴実測図……25
第17図 5、9号袋状竪穴実測図……26
第18図 6号袋状竪穴実測図……27
第19図 8号袋状竪穴実測図……28
第20図 10号袋状竪穴実測図……29

第21図　B地点土層断面実測図……32
第22図　B地点遺構分布図……33
第23図　1～3号甕棺墓実測図……34
第24図　4、5号甕棺墓実測図……35
第25図　6号甕棺墓実測図……36
第26図　甕棺実測図Ⅰ……38
第27図　甕棺実測図Ⅱ……39
第28図　1、2号土壙墓実測図……40
第29図　3号土壙墓実測図……41
第30図　4号土壙墓実測図……42
第31図　5号土壙墓実測図……43
第32図　6号土壙墓実測図……44
第33図　7号土壙墓実測図……45
第34図　8、9号土壙墓実測図……46
第35図　10、11号土壙墓実測図……47
第36図　12号土壙墓実測図……48
第37図　1号石棺、13号土壙墓実測図……49
第38図　14、15号土壙墓実測図……50
第39図　石組遺構実測図……51
第40図　4号土壙墓出土鏡拓影……52
第41図　鉄器実測図……53
第42図　15号土壙墓出土玉実測図……54
第43図　B地点出土弥生式土器実測図Ⅰ……62
第44図　B地点出土弥生式土器実測図Ⅱ……63
第45図　石器実測図……65

図　版　目　次

図版1　4号土壙墓出土の鏡

図版2　(1) 鏡出土状況

(2) 宝満尾遺跡出土玉類

図版3　(1) 遺跡遠景（南西方向より）

(2) 遺跡遠景（東より）

図版4　(1) 墳丘断面（Aトレンチ北側）

(2) 墳丘断面（Bトレンチ東側）

図版5　(1) 墳丘下出土鉄製鋤先

(2) 墳丘出土土師器

図版6　(1) 石室全景

(2) 玉類出土状況

図版7　(1) 墳丘下発見の石蓋土壙墓

(2) 石蓋土壙墓全景

図版8　(1) 石蓋土壙墓発掘後（西より）

(2) 石蓋土壙墓玉類出土状況

図版9　A地点全景

図版10　(1) 1号袋状竪穴

(2) 2号袋状竪穴

図版11　(1) 2号袋状竪穴断面

(2) 3号袋状竪穴

図版12　(1) 4号袋状竪穴

(2) 5号袋状竪穴

図版13　(1) 6号袋状竪穴

(2) 6号袋状竪穴

図版14　(1) 7号袋状竪穴

(2) 10号袋状竪穴

図版15　(1) 11号袋状竪穴

(2) 1～3号甕棺墓

図版16　(1) 3～6号甕棺墓

(2) 1号甕棺墓

図版17　(1) 2号甕棺墓

(2) 3号甕棺墓
図版18 (1) 4号甕棺墓
(2) 5号甕棺墓
図版19 (1) 6号甕棺墓
(2) 6号甕棺墓
図版20 B地点土壙墓全景
図版21 (1) 1号（石蓋）土壙墓（西より）
(2) 1号（石蓋）土壙墓（北より）
図版22 (1) 2号土壙墓
(2) 3号土壙墓
図版23 (1) 4号土壙墓（北より）
(2) 4号土壙墓（東より）
図版24 (1) 4号土壙墓（西より）
(2) 4号土壙墓二段目掘り込みと鏡出土状況
図版25 (1) 4号土壙墓鏡出土状況
(2) 5号土壙墓（西より）
図版26 (1) 5号土壙墓（南より）
(2) 7号土壙墓（北より）
図版27 (1) 7号土壙墓（東より）
(2) 7号土壙墓（西より）
図版28 (1) 10号土壙墓配石
(2) 10号土壙墓
図版29 (1) 11号土壙墓
(2) 12号土壙墓（東より）
図版30 (1) 12号土壙墓（南より）
(2) 13号（石蓋）土壙墓（南より）
図版31 (1) 13号（石蓋）土壙墓（東より）
(2) 1号石棺墓（南より）
図版32 (1) 1号石棺墓（東より）
(2) 1号石棺墓、13号（石蓋）土壙墓
図版33 (1) 14号土壙墓
(2) 15号土壙墓
図版34 (1) B地点土壙墓と土層

(2)　B地点土壙墓群
図版35　(1)　B地点土壙墓群
(2)　10、11号土壙墓
図版36　(1)　4、5号土壙墓
(2)　石組遺構
図版37　宝満尾古墳出土遺物
図版38　土壙墓出土遺物
図版39　弥生式土器（B地点）
図版40　石器

付　表　目　次

第1表　古墳出土小玉計測表……19
第2表　石蓋土壙墓出土管玉計測表……22
第3表　袋状竪穴一覧表……30
第4表　15号土壙墓出土ガラス小玉計測表……55
第5表　B地点墳墓一覧表……71

第1章　序　説

1　調査に至る経過

福岡市における都市開発は著しく、特に都心部をはずれた周辺地域の宅地造成の急増は人口の増加をもたらす結果となった。人口の増加は、そのまま学校の新設につながり、開発の増加はとどまるところを知らないのが現状である。開発行為の多くは、埋蔵文化財の破壊を前提にしていることはいうまでもあるまい。月隈丘陵における席田地区中学校建設も例外ではなかった。同地域は久しく米軍の接収地として、また、丘陵下の広範な水田地帯は現在も福岡空港として使用されているために、その考古学的調査は全くの白紙状態であった。しかし、周辺部においては、国指定史跡の金隈遺跡①や、板付遺跡②等の重要な弥生時代遺跡の分布が知られており、同地域内にも重要な遺跡の存在が考えられた。学校建設用地の決定と共に、昭和47年5月市教育委員会文化課埋蔵文化財係より、三島格、村岡和雄、松村道博の三名が現地踏査を実施し、露出した甕棺墓一基と、丘陵頂部において径10mのマウンドを確認し、用地内に遺跡の存在を知った。しかし、建設工事、開校の問題は急を要し、文化課埋蔵文化財係では、次の如く組織を確立し、昭和47年度事業として造成工事に先だって記録調査を実施する運びとなった。

註　① 福岡市教育委員会「金隈遺跡・第一次、二次調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第7．17集　1971年、
② 下條信行他「板付遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集　1970年

2　調査組織の構成

調査地点　福岡市博多区大字下月隈字宝満尾 250他

調査期間　昭和47年7月10日～11月21日

調査委託者　福岡市教育委員会施設部用地課
石蔵宏見　久我公一郎　小西鉄太郎　中島正博　榊良夫

調査主体　福岡市教育委員会（文化課）
正木利輔　山崎義治　結城一義　青木崇　清水義彦　石橋博　三宅安吉
岩下拓二　福田征一　三島格　柳田純孝　飛高憲雄　後藤直　塩屋勝利　折尾学
島津義昭　力武卓治　沢皇臣　柳沢一男　横山邦継　山口譲治　山崎純男

調査担当係　福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係

調査指導員　考古学　鏡山猛（九州歴史資料館）
森貞次郎（九州産業大学）
岡崎敬　（九州大学）

人類学　永井昌文（九州大学）

建築学　磯田充義（九州大学）

治金学　坂田武彦（九州大学）

地質学　古川博恭（沖縄開発庁）

調査担当者　三島　格（文化課）

山崎純男（　〃　）

福田征一（　〃　事務担当）

調査補助員　小池史哲（別府大学）

牧野吉秀（別府大学）

松本博明（慶応大学）

荒木　誠（立正大学）

長谷川豊（同志社大学）

調査協力者　下條信行　高倉洋彰　橋口達也　白木原和美

光安利輔　首藤卓茂　中原志外顯　金武正紀

整理期間　昭和48年11月1日～昭和49年2月10日

整理員　古賀博美　渡辺富子　香月芳子　渡辺啓子　青木みどり　太田順子

第II章　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地

福岡市の平野部は東、西、南の三方を三郡山地とそれより派生する山塊、背振山地の背振山塊とその派生山塊によって囲まれ、北は博多湾に面する。背振山地に属する油山山塊はその山麓に多くの丘陵を発達させ、最高位標高 100ｍの鴻ノ巣山を中心とする平尾丘陵を形成し、福岡市の平野部を西の早良平野、東の福岡平野とに二分する。

東の福岡平野は、東を前述三郡山地とそれより派生し山塊である四王寺山（標高 410ｍ）とその山麓に形成された月隈丘陵（標高 100～ 150ｍ）によって限られ、西は前述平尾丘陵に、南は背振山地とその派生山塊によって限られるが、一部低丘陵を介して筑後平野とつらなる。平野の東側山麓部に蛇行しながら御笠川が、西に那珂川がそれぞれ南北に貫流し、下流域においてかなりの広さの沖積平野の形成がみられる。

宝満尾遺跡は福岡平野の東を限る月隈丘陵西側斜面、福岡市博多区大字下月隈字宝満尾250に位置する。米軍接収地内に存在し、過去において炭坑があり所々に竪坑がみられたが、接収後は荒れるにまかせ雑木林となっていた。遺跡の南北には、あまり広くないが谷水田の存在がみられ、月隈丘陵における他遺跡とは立地的共通性をもち、月隈丘陵における弥生時代遺跡が、谷水田をその主たる生産地としていたことは容易に想定できよう。

弥生時代前期を代表する板付遺跡は御笠川を挟んで南西２kmに、甕棺遺跡として有名な金隈遺跡は南東 2.5kmの地点に所在する。

本遺跡の立地する丘陵上からは福岡平野における弥生時代遺跡は一望のもとにおさめられる。前述板付遺跡、銅剣、ゴホウラ製貝輪を出土した諸岡の甕棺墓遺跡は眼下に、奴国の中心とされる須玖岡本遺跡とその周辺遺跡をのせる春日丘陵とは対時した関係にある。

2　周辺の歴史的環境

先土器、縄文時代

先土器、縄文時代の遺跡は顕著な発見はない。最近の調査において若干の資料の増加がみられる。先土器時代の遺物として諸岡[1]、板付においてナイフ形石器等の発見がある。縄文時代の遺物としては、晩期終末期の夜臼式土器の分布を除き全く不明であり、わずかに板付水田遺跡[2]より押型文土器の出土が知られているにすぎない。

弥生時代

奴国の中心とされる須玖岡本遺跡をはじめ多数の遺跡の存在が認められる。各種多数の青銅器の出土は周辺部を圧するが、急激な開発によりその大部分は破壊され、奴国における社会研究の進展はあまりみられない。奴国における主たる生産活動は平野部微高地に位置する板付、比恵遺跡にみられる農業生産が認められるが、一部、青銅器生産、ガラス勾玉生産の存在は注

第1図　遺跡の立地と周辺遺跡　1　宝満尾遺跡

目されよう。

このような奴国の環境下にあって月隈丘陵の今後の考古学研究の進展には期待されるものがある。月隈丘陵の利用が開始されるのは比較的遅く、弥生時代前期初頭にさかのぼる遺跡はいまだ明確でなく、大規模な集落の存在を考えることは困難である。ただ、今回発掘調査した袋状竪穴は時期を決定する遺物の出土はなかったが、その形態から前期前半にさかのぼる可能性をもっている。月隈丘陵に活発に弥生人の足跡をみいだすのは、弥生時代の前期終末にいたってからであり、金隈の共同墓地の開始もこの頃から始まる。北部九州における弥生時代遺跡の拡張期とも一致する。中期になると質、量共に、前代より圧倒的な生長をみる。判明している甕棺墓の多くはこの時期の形成であり、後期にその継承発展がみられ、宝満尾B地点の土壙墓群の形成や、かって月隈より鏡、銅鉾、銅鉾鋳型の出土があったとされるような状況が生まれてくるものと考えられる。③

古墳時代以降

福岡平野の古墳時代も、前代の継承発展として把握されよう。春日丘陵およびそれよりのびる低丘陵上には数多くの有力な前方後円墳を含む古墳の形成が認められる。

古墳時代にいたっては、月隈丘陵においても多くの古墳が形成され、中でも 100基を越える持田ヶ浦古墳群は有力である。しかし、御笠川以東～月隈丘陵にかけて前方後円墳の分布は認められず、福岡平野西側とは若干の差異が指摘できる。

古墳の多くは後期～終末にかけての群集墳であるが、市域をややはずれる韓人池古墳においては過去三角縁神獣鏡一面の出土があり、持田浦2号墳は小形竪穴式石室をそなえた古墳で、若干の古式古墳の存在も指摘できる。④また、今里不動古墳は巨大な石室を有し、月隈丘陵における古墳形成には注目されるところが多い。今だ、正式な調査は実施されていないが、今後に期待される古墳群である。月隈丘陵周辺における歴史時代の遺跡はきわめて少く、金隈字石釜と持田ヶ浦において布目瓦の出土がみられるくらいであるが、その性格等については不明である。

註　① 中原志外顕氏によって発見されたもので、昭和48年度、市教育委員会文化課によって発掘調査を実施した。
横山邦継　沢皇臣　後藤直　山口譲治『板付周辺遺跡調査報告書Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集　1974年

② 福岡市教育委員会文化課調査中

③ 高橋建自『銅鉾、銅剣の研究』1925年

④ 別府大学考古学研究室編『持田ヶ浦古墳群1、2号調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集　1971年

3　宝満尾遺跡周辺の遺跡と遺物(第1図)

月隈丘陵における遺跡と遺物は種々の理由によりその実体は明らかでない。周辺調査あるいは過去調査された遺跡についてその概略を記しておきたい。なお、番号は第1図の遺跡番号と一致させた。

②下臼井甕棺墓遺跡

月隈丘陵の先端に位置する。土取り作業において甕棺の出土が確認された。現在約6基の甕棺が露出する。時期は中期に比定される。

③青木甕棺墓遺跡

土取り作業において確認された甕棺を主体とする墳墓地である。発見時において福岡市教育委員会より柳田純孝、橋口達也が現地におもむき観察と遺物の採集を行った。時期は中期中葉から後半にかけてのものである。

④上ノ浦池遺跡

宝満尾のすぐ北に位置する。上ノ浦池周辺において過去、石庖丁、弥生式土器が採集されている。池にむかってのびる丘陵上において、席田中学校通学道路の建設予定があり、試掘した結果では、方形住居址の一角と考えられる遺構と弥生式土器を確認した。土器は保存状態が悪く時期を比定するには困難である。今後、発掘調査が実施される予定である。

⑤宝満尾東遺跡

旧米軍基地内に存在し、現在は石油タンクの埋設がおこなわれている。接収後の米軍の工事により、大石の下より多くの甕棺が出土したという。現在は完全に消滅する。時期その他については不明、聞書きによれば支石墓の可能性もある。

6 下月隈遺跡①

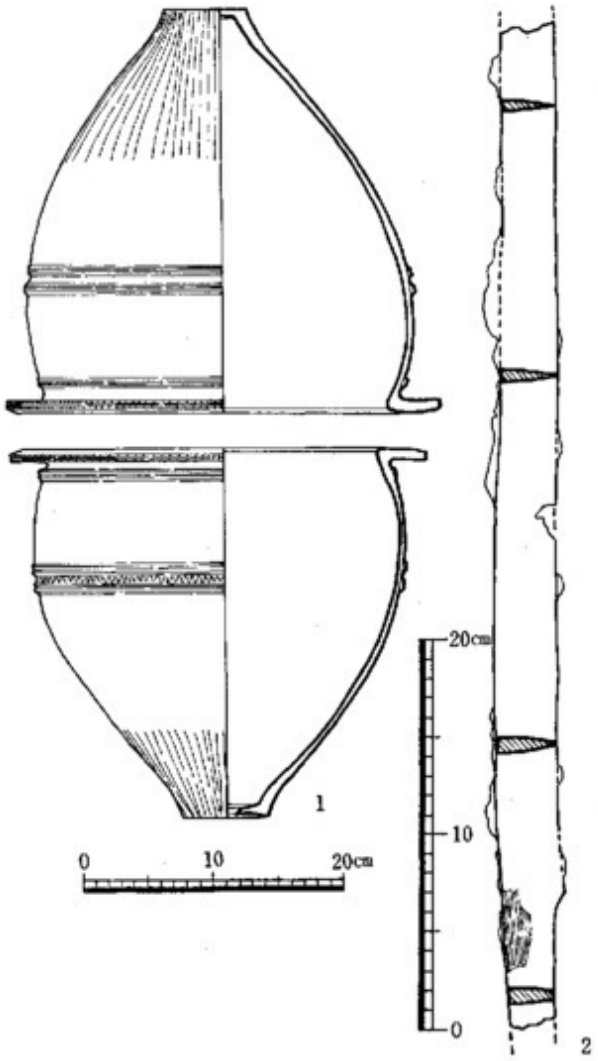
甕棺墓地で、そのほとんどを消滅する。一部調査され、巨石を蓋とする袋状竪穴（土壙墓？）より石剣一本の出土がある。

7 上月隈遺跡

その大部分は宅地とされ消滅する。崖面に約10基の甕棺を確認した。過去、小学生により細形銅剣が採集されたというが確証は得られなかった。崖崩れにより成人用甕棺、小児用甕棺の転落があり採集した。なお、甕棺破片に混じって一本の鉄刀を採集したのでここに紹介しておく。（第2図）1は合口の小児用甕棺で、上下共に丹塗り研磨された同形同大の土器である。下甕底部に二次穿孔が認められる。口縁部は逆く字形をなし口唇部に向ってやや傾斜する。口唇部に刻目を施す。口縁部直下に一条、胴部に二条の断面M字形の突帯をめぐらす。胴部下半から底部にかけてたて方向のヘラ研磨が行なわれる。下甕には、胴部の突帯間に丹塗り後に刷毛状のもので波状の暗文様の文様が認められる。上甕は口径33.5cm、器高31.5cm、下甕は口径

32.2cm、器高28.8cmを計る。

2は鉄刀の破片で現存長52cmを計る。茎の一部と切先を欠失する。刃部と茎部の境は段をもち関の存在がある。茎部に若干木質の付着がある。やや内ぞりの傾向があるが、切先部において反転する。茎部幅 2.4cm、刃部幅 3.2cmを有する。全体にさびが著しい。同遺跡には現在の墳墓が重なりあう以外には他時代の遺跡の存在はないが、崩落土内の出土であり、その時期比定は困難である。



第2図　周辺遺跡の遺物実測図

8 上園遺跡

9 谷頭遺跡

共に弥生式土器の出土があるが、その実体については明らかでない。今後の調査に期待したい。

10金隈遺跡[①②]

昭和45年、46年と二次にわたる発掘調査が実施されている。完掘ではないが、現在までに甕棺墓146基、土壙墓25基、石棺墓2基、巨石蓋土壙墓1基の調査が行われ、甕棺墓遺跡としてはその重要性から史跡として保存されている。103号甕棺よりゴホウラ製貝輪2、磨製石鏃1、97号甕棺より石剣鋒部2、30号甕棺より丸玉1、146号甕棺よりゴホウラ製貝輪1の出土がある。

⑪～⑮板付および周辺遺跡

著名な遺跡で過去数度の調査がある。現在も調査が続行中で、おって詳細な報告がなされるはずである。

註　① 折尾学、柳田純孝、永井昌文『金隈遺跡・第一次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集　1970年
折尾学、永井昌文『金隈遺跡・第二次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集　1971年
② 橋口達也、折尾学「小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪－福岡市金隈出土 146号甕棺の調査－」『九州考古学』47　1973年

第Ⅲ章　発掘調査の概要

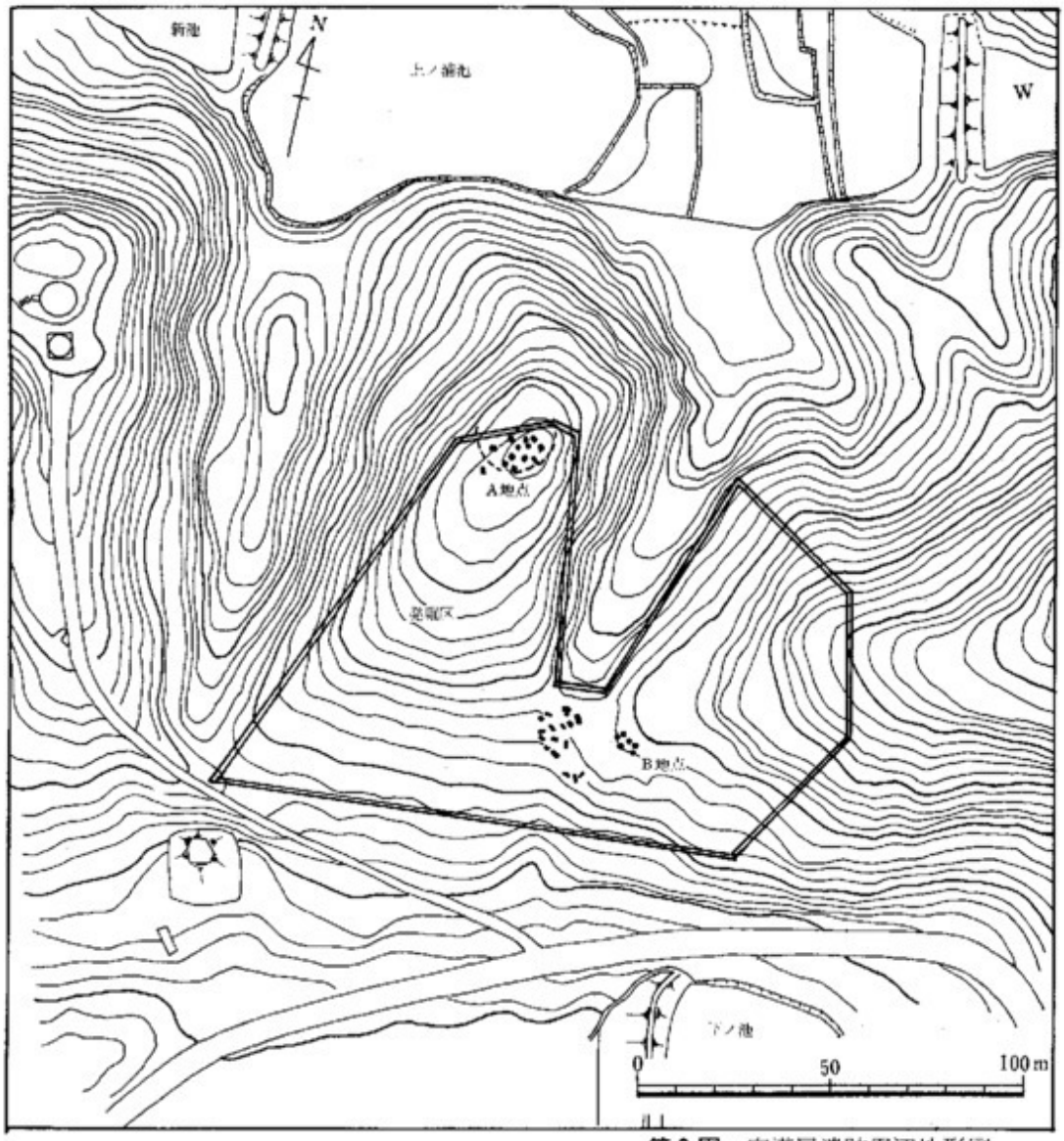
調査地点　福岡市博多区大字下月隈字宝満尾 250外

調査期日　昭和47年７月10日より11月21日までの134日間にわたって調査した。調査は工程、その他の関係により７月10日から９月７日までの59日間をＡ地点の調査。９月８日から11月21日までをＢ地点の調査と二分して実施した。途中、再三にわたる降雨、人員不足によって調査に困難をきわめたが、調査関係者の深い御理解と、調査員、作業員の一致した団結と協力によって無事に調査を終了することができた。

遺跡の区分、遺跡は事前における踏査によって、甕棺墓を中心とする墓地、古墳一基よりなると予想されたが、かって炭坑の存在があり、発掘対象区内において盛土等の地形変化が著しかった。席田中学校の開校時期が迫まり、造成工事の工程上の都合により、対象地内の遺跡の広がり状態を把握するために、発掘調査に先立ち、中学校建設予定地内の表土層の除去をブルトーザーによって行った、その結果では、古墳状のマウンドを有する丘陵頂上部と甕棺墓周辺地域の踏査段階における確認場所以外に遺構その他の広がりは見受けられず、発掘地点を前記二ヶ所を中心として行うこととし、古墳状のマウンド周辺をＡ地点、甕棺墓の周辺地域をＢ地点とした。ブルトーザーにおける表土層除去範囲（遺構の有無の確認範囲）を含めて発掘面積は 1.5万㎡に達する。

調査の目的　従来、月隈丘陵における考古学的調査は同丘陵が戦後米軍の接収地として民間人の立入りが困難で、さらに丘陵下の沖積地帯は飛行場に利用され、その実体は全く不明であった。過去において月隈より鏡、銅鉾銅戈と共に銅鉾（？）４口が発掘されたという和田千吉氏の聞書きがあり月隈丘陵における考古学的調査が期待されていた。昭和44年５月、昭和45年８月の二次[①]にわたる金隈遺跡の調査は、月隈丘陵における発掘調査の発端をなした。同遺跡は弥生時代前期末から後期にかけての墳墓地で、甕棺墓 145基、土壙墓、木棺墓25基、石棺墓２基、巨石盖土壙１基の内容が明らかにされた。Ｋ 103号の金海式甕棺にゴホウラ製貝輪２個、磨製石鏃1点、Ｋ97号甕棺に磨製石剣の鋒部２点、Ｋ30号甕棺に石製丸玉１点の副葬がみられる。[②]金隈遺跡は弥生時代墳墓研究に多くの重要な資料を提供し、月隈丘陵における弥生時代遺跡の認識を新たにした。

本遺跡においては踏査段階ですでに一基の甕棺墓の出土があり、月隈丘陵における弥生時代遺跡の在り方と共に墳墓の問題に期待をかけた。造成地は、ほぼ１つの丘陵を含むという好条件にあり、調査目的の第一を集落址、墓地、生産地という生活パターンの解明におき関連調査として、月隈丘陵における遺跡分布調査、地質学的調査を実施することとした。なお、発掘調査に伴い提起される諸問題についても、充分にその問題点を掘りさげるべく前記の調査指導員の先生方を依頼し、指導、助言を仰ぐようにした。



第3図　宝満尾遺跡周辺地形図

調査経過　造成予定地は約3万㎡におよび、発掘調査前のブルトーザによる表土の除去作業段階において、丘陵斜面（急激な角度をもつ斜面、狭い谷間の遺跡発見の可能性の薄い部分を除く）全域にわたってその遺構の分布状態を確認した。それによれば、遺構の分布は前述した如く、大きく頂上部のA地点と裾廻周辺のB地点にわけることができる。

A地点は、当初、径10m、高さ1mの小円墳状を呈していたが、発掘の進展に伴い、径20m前後の円墳の残丘で元来の高程度を残しているものとわかった。故に石室は現存する墳丘の北西端にかろうじて残っている状態を確認した。石室は腰石の一部と床面の一部残すのみであった。床面には花崗岩、珪化木、砂岩の角礫を敷きつめ、奥壁（現存しない）と平行に一部石材を立て屍床を形成する。石室は赤色顔料の付着がみられ、石室内部は赤く塗られていたものと考えられる。屍床頭位と考えられる部分は、特に朱があざやかであった。この古墳はそのほとん

どを破壊されているにもかかわらず、床面はプライマリィーな状態を示し、副葬品の配置に興味ある事実を提供してくれた。

墳丘断面観察のトレンチによって、墳丘下において袋状竪穴の存在を確認した。袋状竪穴は、その大部分が墳丘下に位置し、一基のみが、墳丘付近に位置している。袋状竪穴は計11基を確認した。平面プランは2基の円形プランを除いて他はすべて方形プランを呈する。袋状竪穴に柱穴を2本、4本もつものがあり上部構造の存在を予想させるものがあり、2例であるが、出入口に使用されたと考えることのできる踏み台状の遺構の存在を検出した。また、これら竪穴と面を同じくして、石蓋土壙墓一基の出土があり、内部より勾玉、管玉の副葬品の出土があった。A地点の調査は当初の予想より、時期、規模の拡大がみられ、弥生時代から古墳時代にかけて一定地域内の遺跡の重複関係を確認した。

B地点は、甕棺墓より調査を始めたが、その数は少く、計6基を数えるのみでその時期は中期後半に位置づけられるものである。甕棺地区は限定されていたが、発掘の進展に伴い甕棺墓をとりまく如く、配石を伴う土壙墓の発見があった。土壙墓群は計16基で、土壙墓、石蓋土壙墓、石棺より構成される。配石は円形、コ字形、L字形、一の字形にみられ、円形に石をおいたものもみられる。4号土壙墓より前漢鏡1面、13号土壙墓の棺外より素環頭刀子一振、15号土壙墓よりガラス小玉 540個、6号土壙墓付近より鉄斧の副葬を認め、後期前半と考えられる墓制に貴重な資料を提供してくれた。その分布は、後述するごとく2群に大別される。

また、土壙墓付近からは中期後半から後期前半にかけての土器の分布が認められ、祭祀行為の存在を疑わしむるものがある。

A、B地点の調査は共に、調査の目的にそって充分成果を得ることができた。以下、各章において詳述する。

なお、宝満尾遺跡は、古墳、袋状竪穴、土壙墓群、甕棺墓等の各時代各種の遺構をふくめた遺跡群の総称である。

註　① 高橋建自『銅鉾銅剣の研究』1925年

② 折尾学、柳田純孝、永井昌文『金隈遺跡・第一次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集　1970年
折尾学、永井昌文『金隈遺跡・第二次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集　1971年

第Ⅳ章　A地点の調査

1　A地点の調査経過と概要

A地点では発掘に先立って実施した表土層の除去後の観察においても、特別の遺構の存在は確認できず、踏査段階において確認されていた小マウンドの調査を中心として開始した。小マウンドは径10m、高さ1mを有し、小円墳状を呈する。土層観察のためにマウンドを十字形にたちわるトレンチを設定し発掘した。発掘結果では黒色土と赤色粘土層を交互に積んだ墳丘であることを確認した。トレンチにおいて内部主体の検出はできなかったが墳丘北西部端に石材が一部露出する部分があり発掘した結果は腰石、床面の一部を残す石室であることを確認した。墳丘は一部を残しているにすぎないことを知った。石室はそのほとんどを破壊されていたにもかかわらず、床面は攪乱されず、副葬遺物の出土状況に興味ある知見を得た。古墳は元来、横穴式石室を内部主体とする直径20mの円墳であったと思われる。また、墳丘調査のために入れたトレンチにおいて、墳丘下に袋状竪穴の存在を確認した。墳丘を除去し、その調査にあたった。袋状竪穴は計11基が存在し、2基を除いて他はすべてが方形プランを有するものであった。6号、10号竪穴には出入口と思われる踏み台状の遺構、4号、6号、10号に柱穴を確認し、袋状竪穴の単位、構造において注目する知見を得た。墳丘下からは、さらに石蓋土壙墓一基を確認し、玉類の副葬を確認した。

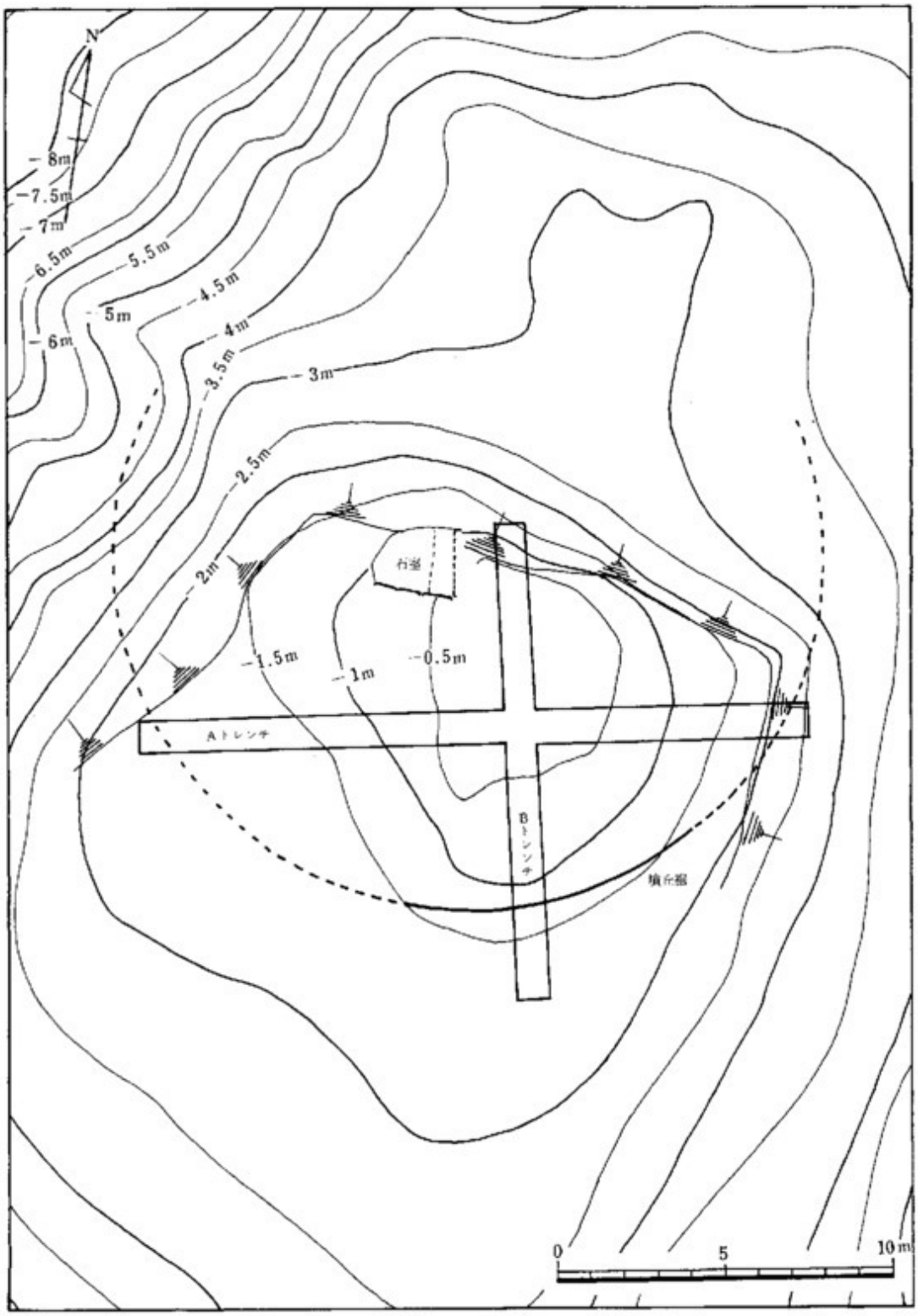
A地点の調査は、古墳下の調査を伴ったために困難をきわめた。調査は昭和47年7月10日から9月7日までの59日間をあてた。

2　宝満尾古墳

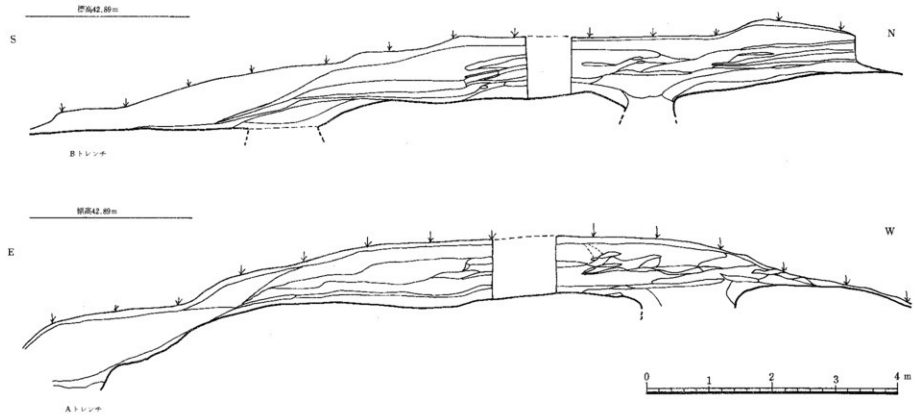
(1)　**墳丘**（第4・5図、図版4）

墳丘は現状では径10m、高さ1mの小円墳状を呈し、北側は崖面となっていた。盛土の状態をみる為に墳丘のほぼ中央部にAトレンチ(20m×1m)、それに直交しBトレンチ(14.5m×1m)を設定した。発掘の結果は、石室、奥壁中央部を中心とする直径20mの墳丘の約$\frac{1}{3}$を残す墳丘残存であった。

現存の盛土高は、築造以前の地表から約100cmを測る。盛土は5～6層からなり、縞状を呈している。黄褐色粘質土層を主体とし、間に、赤褐色粘質土、黒色土層をまじえて築造する。中央部では、ほぼ水平に積まれるが、裾部近くは裾部に向かって傾斜する。盛土に使用される土は、古墳周辺部のものと大差なく、周辺におけるものを使用したものと考えられる。なお、盛土を行う以前において、地山が整形され、その段階において、後述する石蓋土壙墓を一部破壊する。盛



第4図　宝満尾古墳墳丘実測図



第5図 堤丘断面実測図

土の高さはもともとかなりの高さを有していたものと思え、裾部には盛土の流失したものが再堆積している、立地条件が、丘陵の頂上部先端であるため、下から仰ぎみた場合は大墳丘をもつ古墳としてうつったと思われる。なお、Bトレンチ、南裾部墳丘内において埋置された土師器碗2個を確認した。（第8図）

(2) **内部構造**（第6図　図版6—(1)）

内部構造は西にわかって開口する横穴式石室と考えることができる。石室は約½を現存する墳丘の北西端において確認した。石室のほとんどが破壊され、石室の石材はあますところなく抜き取られ、わずかに南側壁の腰石の一部と床面を残すのみである。石室の構築にあたっては、盛土がある程度なされた段階において墓壙を地山面まで掘り込んだものと考えられ、盛土に墓壙の掘り込みを確認した。床面は地山に直接角礫を敷いたもので、ほぼ水平を保つ。南側壁より割り出した主軸方向はN－82度－Eに位置する。

現状では南側壁は3個（うち1個は2つに割れる。）の腰石を残す。腰石は最大で95cm×17cm×50cmを計り、さほど大きい石材は使用されていない。奥壁は完全に抜き去られるが、屍床と墓壙の掘りかたの間に根固め石の存在が認められる。床面は全面に角礫が敷かれる。角礫の石材は花崗岩、砂岩、珪化木等多種多様のものが使用されるが、多くは周辺部において容易に採取できるものである。敷石は玄室前面のものがやや小さく（10cm×10cm）。屍床を形成する立石の前は大き目の（20cm×20cm）石材を敷いている。

屍床は20cm×10cm×30cm程度の扁平礫11個を立てて構成される。屍床の全長は現存部で長さ21.5cm、幅70cmを計る。屍床内側の立石、敷石、腰石等は赤く色どられ、特に頭位付近には赤色顔料の付着が多かった。

床面敷石の範囲、残存する南側壁よりこの石室の玄室の規模を想定すれば、最も小さい場合において、2.5m×2.3mのほぼ方形プランをなすと考えられる。墳丘の裾は、石室奥壁の中央部を中心として描かれた可能性があり本来は、現状より大きい石室プランをなしていたことも想像にかたくない。

(3) **遺物出土状態**（第7図　図版5　6—(2)）

石室内部

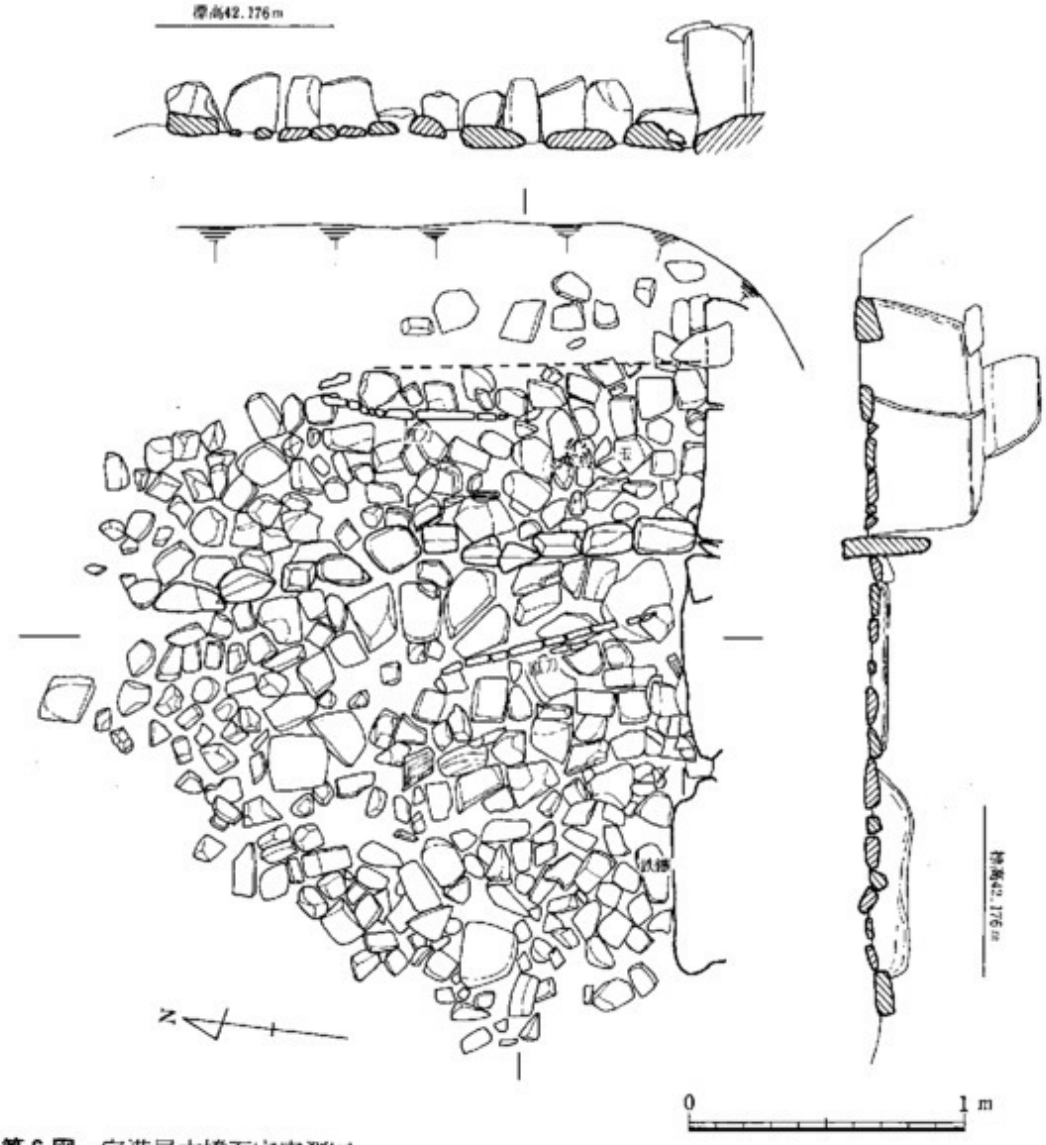
石室は前述の如く大半が抜き取られ、床面、南側壁の腰石を残すのみである。遺物は盗掘をまぬがれ、埋葬時における状態を比較的よく残している。

副葬品のあり方は屍床部分とそれ以外に二分される。

屍床内の遺物は、玉類、直刀、不明鉄器から構成される。後述する如く、遺物の配置からして頭位を南に置いていたことが推測できる。

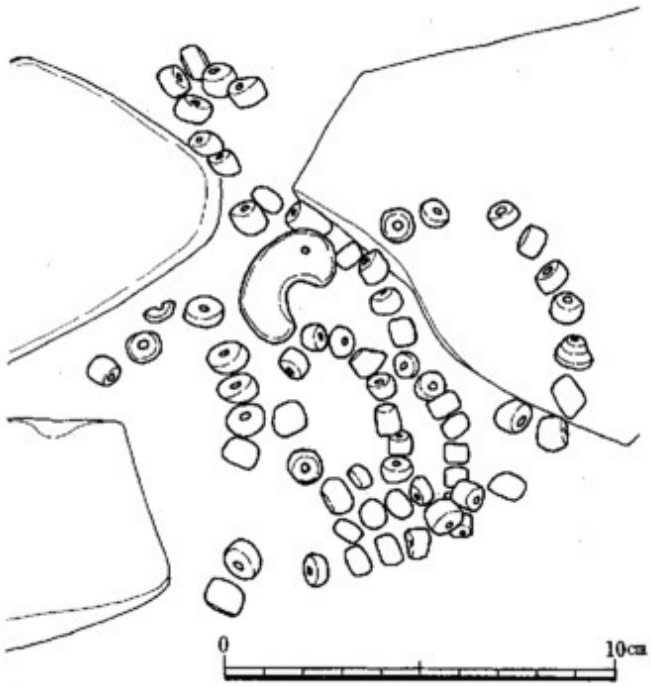
南側壁より40cm離れた屍床中央部に翡翠製勾玉1、メノウ製小玉2、ガラス製小玉41よりなる玉の一群が認められる。その出土状態は整然とならんでいて紐に通した順序を知ることができる。

勾玉を中心として小玉が通されるが、あざやかな赤色を呈するメノウ製小玉は勾玉との間に1個のガラス製小玉を介在させて2個連続し勾玉を中心とし、対象関係はみられない。他のガラス製小玉も玉の大小、形には無関係に連らなり入手順に紐に通していったのではないかと考えられる。出土位置は埋葬者の首か胸にあたる部分と考えられ、本来埋葬者の首にかけたままの状態ではなく、ひとまとめにして埋葬者の前述した位置に供したと考えられる状態を示している。直刀一振は埋葬者の右側に、切先を頭位（南）に向け、刃部は内側方向（埋葬者側）におかれる。左手付近と思われる部分、屍床を形成する仕切石に接して不明鉄器1点の出土があった。以上の屍床内の遺物のあり方は、本古墳の埋葬者が一名であったことを物語っているといえよう。



第6図　宝満尾古墳石室実測図

屍床外には直刀一振、鉄鏃数本の出土がある。直刀は屍床の仕切り石より約30㎝離れほぼ平行に、切先部を南側壁より10㎝ほど離し刃部を屍床の方に向けておかれる。鉄鏃は直刀より30～40㎝離れた南側壁腰石に接し、一群として確認したが、その方向等はばらばらであった。



第7図　宝満尾古墳玉類出土状態実測図

墳丘

墳丘より出土した遺物には鉄製鋤先と土師器がみられる。鉄製鋤先は本古墳の築造にあたっての地山整形以後、墳丘形成以前に旧地表面に置かれたものと考えられる。9号袋状竪穴の上面にあたる部分よりの出土である。土師器は墳丘南端に近い盛土内より2個置かれた状態で出土した。鉄製鋤先、土師器の墳丘下ないしは墳丘中の出土遺物はいずれも古墳築造にまつわる祭祀行為の結果と解されよう。墳丘より遺物が出土することは最近の調査においてかなりの例を知りうる。

(4)　遺物各説

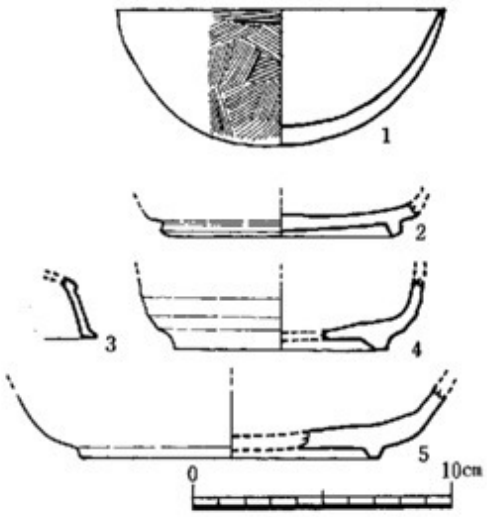
土器（第8図）

墳丘中より土師器、A地点台地上の表土層から須恵器数点を採集したが、須恵器は古墳とは直接関係はない。

1は墳丘中発見の土師器で、完形品である。碗形土器で、口径12㎝、器高 5.3㎝を計る小形のものである。表面には刷毛目調整痕が全面にみられる。一部黒斑がみられる。胎土は良いが、焼成はやや不良である。同様のものが他に一個存在するが、保存状態が悪く復原不可能であった。

2～5は表採の須恵器で、2、4、5は高台付の坏底部破片である。いずれも古墳とは直接関係なく、古墳よりかなり離れた地点よりの採集である。3は坏蓋の小破片であるが、かなり古い要素を備えている。古墳墳丘近くよりの表採品である。

玉類（第9図）図版2－(2)



第8図　土師器　須恵器実測図

勾玉（1）　C字形をなし形態的には古式の勾玉である。石材は翡翠を利用する。白色が主で部分的に翡翠色を呈する。孔は片側よりの穿孔である。長さ32㎜、胴部幅12.5㎜、孔径 3.5㎜、及び 2.7㎜を計る。

小玉（2～8）　総数43個が出土したが完形で取りあげたものは33個で他は風化が著しく取りあげ不可能であった。形状、材質より次の4類に分類が可能である。

I類（4）　メノウ製の小玉で、赤色を呈する。孔の一端が丸く凹められる特徴がある。全体に整形が悪く凹凸がみられる。

II類（2、7）断面形がやや薄い楕円形をなすもので、孔端がきれいに研磨されるもの。

III類（3、8）やや細長く、断面形が長方形に近いもの。

IV類（5、6）孔の両端に突帯がみられ、研磨がていねいに行なわれていないもの。

なお、小玉の計測表は第1表にあげた。

鉄器（第10図）

直刀（1、2）1は屍床外より出土したもので茎部と切先を欠損する。現存長80㎝（茎部16.8㎝、刃部63.2㎝）を計る。全体に木質の付着が著しい。関部において鍔状の痕跡が残る。平造りで、刃部幅 3.6㎝。

2は屍床内より出土したもので茎部を欠損する。現存長72.8㎝（茎部長 9.2㎝）を計る。刃部に一部木質の付着が認められる。平造りで刃部幅 3.4㎝を計る。切先はフクラつく。

鉄鏃（3～11）すべてが有茎の細長のもので石室南側壁にそって1ヶ所より出土した。片刃をなすもので完形を保つものはない。茎部には木質の付着がみとめられ、7には帯状に柄部との装着を示すものもある。

不明鉄器（12）屍床内の埋葬者の左手ないしは腰にあたる部分より出土したもので、L字形をなす鉄器である。先端部と思われる部分の一端を欠損する。現存長15㎝、幅 1.1㎝を計る。断面は長方形をなし、先端部にしたがい薄くなる。全体にさびが著しいが、基部のさびおとしの際、布が付着していてさび化したものであることを知った。

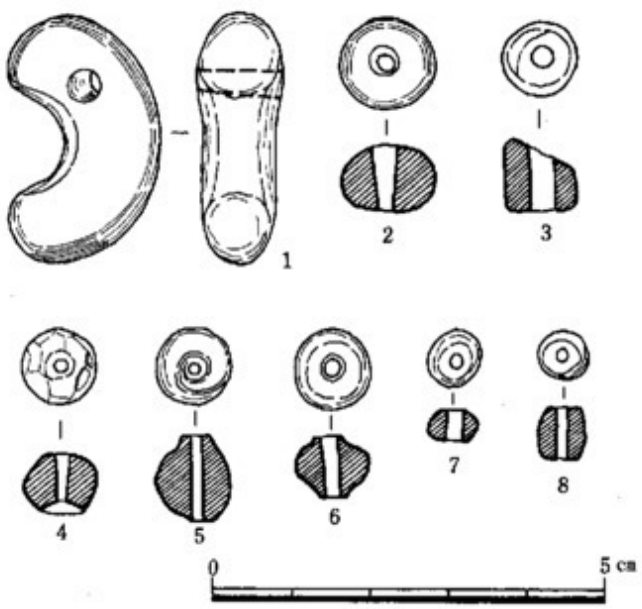
鋤先（13）墳丘下の旧地表面より出土したもので、発掘時において耳部を欠損した。がほぼ完形を保つ。U字形を呈する。刃部はやや斜刃となり、対象形をなさない。刃部幅12㎝、耳部長12㎝を計る。内側は二股に分かれ鋤木質部を挿入したもので、一部木質の存在が認められる。

(5) 小　結

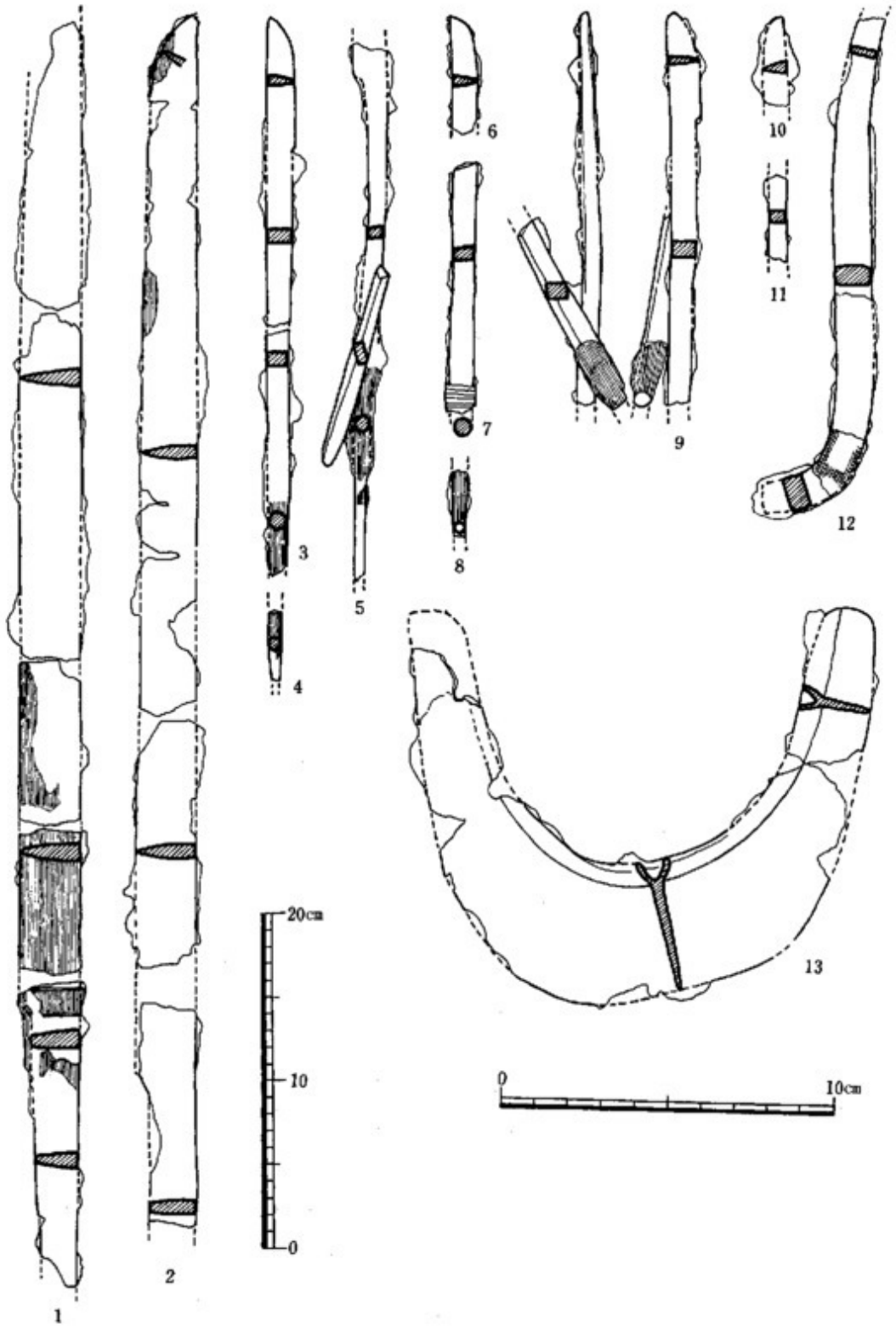
以上、古墳について詳述してきたが、ここで古墳築造年代を考え小結とする。

本古墳は、現状においては小墳丘をもつにとどまるが元来は、その立地、墳丘（推定20m）より、下から仰ぎみた場合は巨大な墳墓としてのイメージを与えたものと考えられる。石室構造も屍床の存在等、福岡地方にはめずらしい例である。石室内が赤く塗られていることも一つの特徴である。

時期を決定する遺物としては墳丘より出土した土師器の存在があるが、九州における土師器編年が不充分でありその時期比定は困難である。福岡市周辺部における群集墳の立地は山腹にその多くが認められ、数基をもって一グループを形成し、そのほとんどに追葬が認められる。しかし、本墳は、丘陵頂上に単独で位置し、石室の破壊は著しかったが、屍床に存在した遺物の出土状況等から一人埋葬の可能性が強く、群集墳の形成より先行する古墳としてとらえることができると考える。上限は、墳丘下に存在する石蓋土壙墓が、本墳築造時において一部破壊されていることによっておさえることができる。石蓋土壙墓は後述する如く、ガラス製勾玉1、滑石製勾玉1、管玉17よりなる玉類の副葬が認められ、滑石製勾玉等の特徴から4世紀末から5世紀前半に位置づけが可能と考えられ、少くくとも古墳の形成はそれ以後に求められよう。石蓋土壙墓には墳丘の存在はないが、墓としての位置がわすれさられるためにはかなりの長い期間のブランクを要し、少なくとも本古墳の築造年代は6世紀前半から中葉にかけての時期が求められるものと思われる。



第9図　宝満尾古墳出土玉類実測図



第10図　宝満尾古墳出土鉄器実測図

第1表　古墳出土小玉計測表

No.	径	長	孔径	材質	色彩	形態	備考
1	9.90	7.60	2.5	ガラス	ブルー	II	
2	9.45	7.65	1.8	メノウ	赤	I	
3	9.10	7.40	1.3	〃	〃	I	
4	8.40	7.30	1.8	ガラス	コバルトブルー	III	
5	7.00	4.45	1.9	〃	〃	II	
6	6.99	5.45	2.3	〃	〃	III	
7	7.20	5.20	1.9	〃	〃	III	
8	6.99	5.70	1.4	〃	〃	II	
9	6.35	6.10	1.9	〃	〃	III	
10	6.40	6.90	1.0	〃	〃	III	
11	5.45	6.20	1.9	〃	〃	III	
12	6.80	5.25	1.4	〃	〃	III	
13	6.80	5.70	1.6	〃	〃	III	
14	7.65	5.25	1.4	〃	〃	II	
15	7.60	6.35	1.9	〃	〃	III	
16	7.50	6.00	1.8	〃	〃	III	
17	7.30	7.70	1.5	〃	〃	III	
18	7.25	7.30	1.0	〃	〃	III	
19	7.60	5.40	1.9	〃	〃	III	
20	9.10	9.30	2.3	〃	〃	IV	
21	7.15	4.90	1.4	〃	〃	II	
22	10.05	8.35	3.7	〃	〃	IV	
23	9.60	8.25	2.8	〃	〃	IV	
24	10.15	8.99	3.6	〃	〃	IV	
25	11.80	8.60	3.9	〃	〃	II	
26	10.40	10.20	1.6	〃	〃	IV	
27	9.55	6.95	3.7	〃	〃	IV	
28	9.25	8.15	2.8	〃	〃	IV	
29	9.50	8.95	2.5	〃	〃	IV	
30	9.00	9.20	2.7	〃	〃	IV	
31	10.00	11.85	1.8	〃	〃	IV	
32	9.95	7.95	2.8	〃	〃	IV	
33	9.55	10.45	1.8	〃	〃	III	
平均	8.39	7.28	2.1				

単位mm

3　石蓋土壙墓

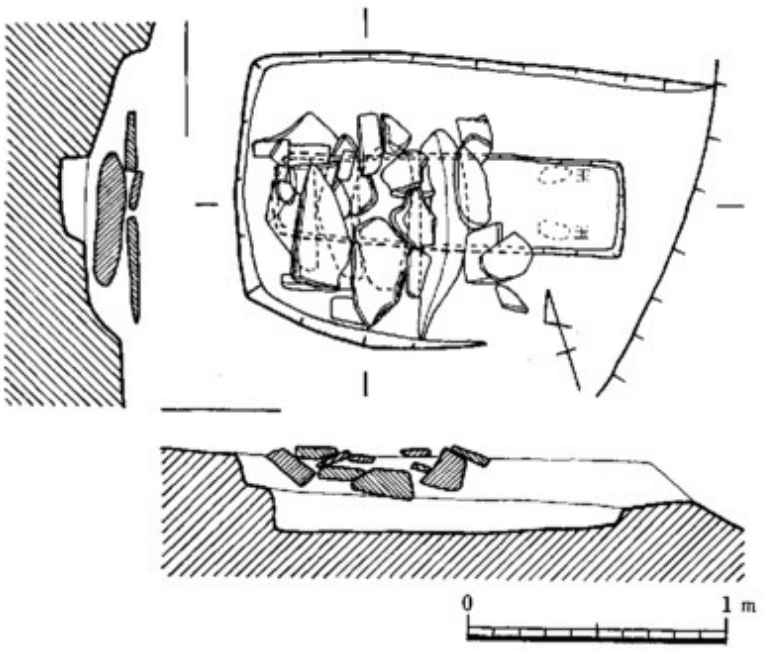
(1)土壙墓（第11図　図版7　8－(1)）

古墳墳丘下（古墳築造時における地表面より下層）において確認した石蓋土壙墓である。古墳築造に際する地山整形段階において掘り込みの一部と蓋石の一部が破壊されている。（蓋石に使用されたのではないかと思われる石材が一部古墳墳丘中に認められる。）土壙は二段に掘り込まれ、主軸方向をS－70°－Wにとる。東にかたより二群の玉類の副葬が認められ、頭位を東においたことが推察される。

土壙の最初の掘り込みは現存長177cm、幅125cm、深さ18cmのほぼ長方形プランを有する。二段目の掘り込みは、長さ136cm、幅は頭位で38cm、足位で30cmを計り、頭部幅が若干広く、足部に向かってやや狭くなる。深さ15cmと比較的浅い。床面は頭位部分がやや高く、足位部との差は5cmを計る。蓋石は一段目と二段目の掘り込みの段を肩として、長さ50cm、幅20cm大の板石を接して並べたもので、現存するのは4枚で、壙の約半分をおおっている。蓋石の上部には、さらに扁平礫片を積んでいる。蓋石、扁平礫片の石材は、滑石、砂岩、安山岩、花崗岩が使用される。蓋石間の接合部には粘土等の使用はない。土壙の大きさからして成人用の埋葬には難点があり、小児用の土壙墓と推定される。

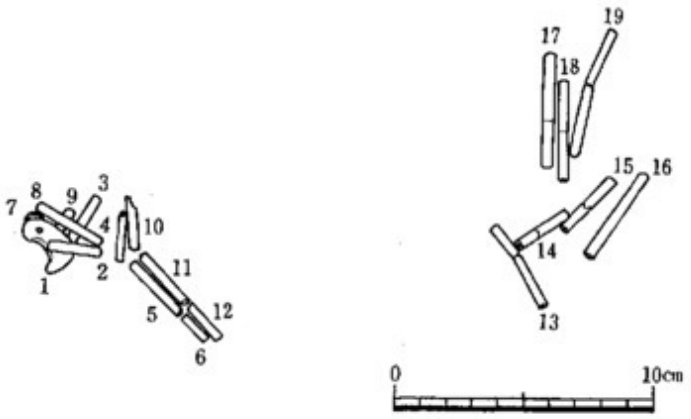
(2)遺物出土状態（第12図）

土壙墓の東部分にかたよって、両側壁二群に分かれた勾玉、管玉の副葬品が存在した。土壙の東側を頭位置とした場合は埋葬者の首周辺にあたる。図に示す如く、北側壁にそって出土した一群は、ガラス製勾玉1個、滑石製勾玉1個、滑石製管玉10個、をもって構成され、その状態は、二列に並び、紐に通されたものと思われ



第11図　A地点石蓋土壙墓実測図

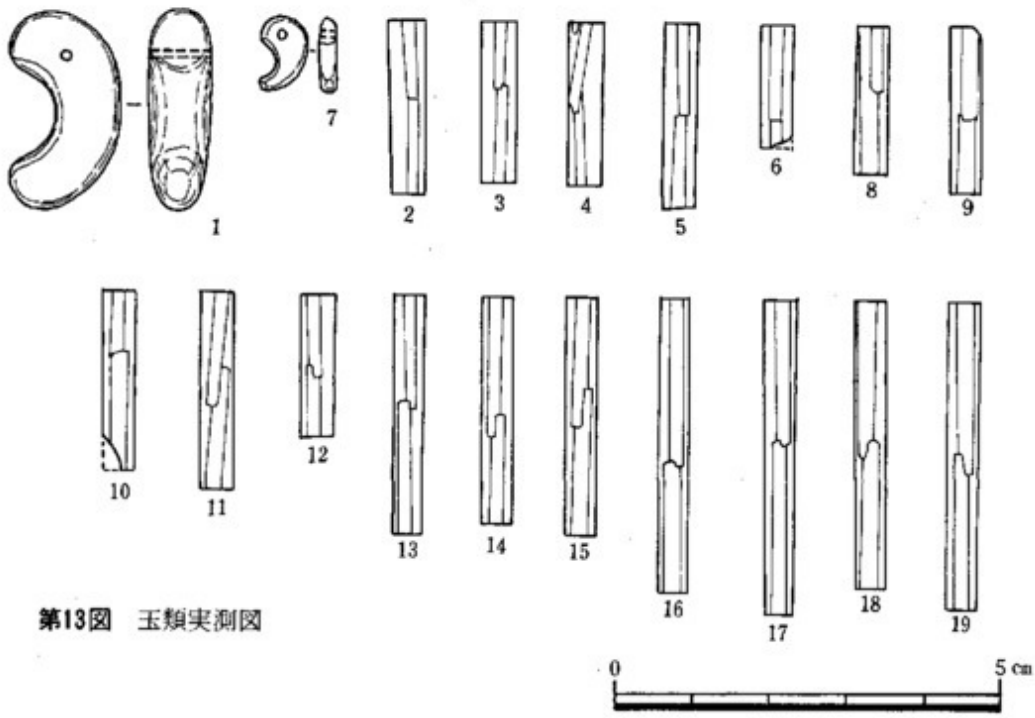
る。南側壁の一群は碧玉製管玉7個をもって構成される。北側壁の一群と比較した場合は整然とした状態を示さないが、三本を一組として、紐に結び一本が横におかれた状態を示している。南北両側壁の一群の間約10cmには全然遺物がなく、両群がもともと結ばれた一群のものであったかは明らかでない。玉出土位置の蓋石が欠失しているために、攪乱されたとも考えることができるが、南北側壁の両群の出土状態は攪乱された痕跡をとどめていないし、また両群における玉の相違等からして、もともと首にかけて副葬されたものでなく、埋葬者の両側に埋置されたと考えるのが妥当であろう。



第12図　石蓋土壙墓玉類出土状態

(3)遺物各説（第13図　図版2）

勾玉、北側壁の一群に2個存在した。1はC字形をなすガラス製勾玉で紫色を呈する。長さ2.55cm、胴部幅0.85cm、孔径 0.1cmを計る。7は扁平な小形の勾玉である。滑石を材質としたもので、淡緑色を呈する。長さ1cm、胴幅 0.4cm、厚さ0.25cm、を計る。管玉は材質・大きさから、北



第13図　玉類実測図

側壁出土の一群と南側壁出土の一群に分けられる。北側壁出土の管玉（2－12）は滑石を利用したもので灰緑色を呈する。大きさは最大で長さ26.0cm、径 4.4cm、最小で長さ16.0cm、径 4.3cmを有し、平均値で、長さ21.5cm、径 4.3cmを計る。4のように、孔のやりなおしや側面に孔がずれたものも存在する。南側壁出土の一群は碧玉を利用したもので淡緑色を呈する。長さにおいて北側壁出土の管玉をしのぐ、最大で長さ41.1cm、径 4.4cm、最小で長さ29.4cm、径 4.0cm、を有し、平均値で長さ35.7cm、径 4.1cm、を計る。なおこの群で完形を保つものは1点のみで他は孔の接点で半折している。

第2表　石蓋土坑墓出土管玉計測表

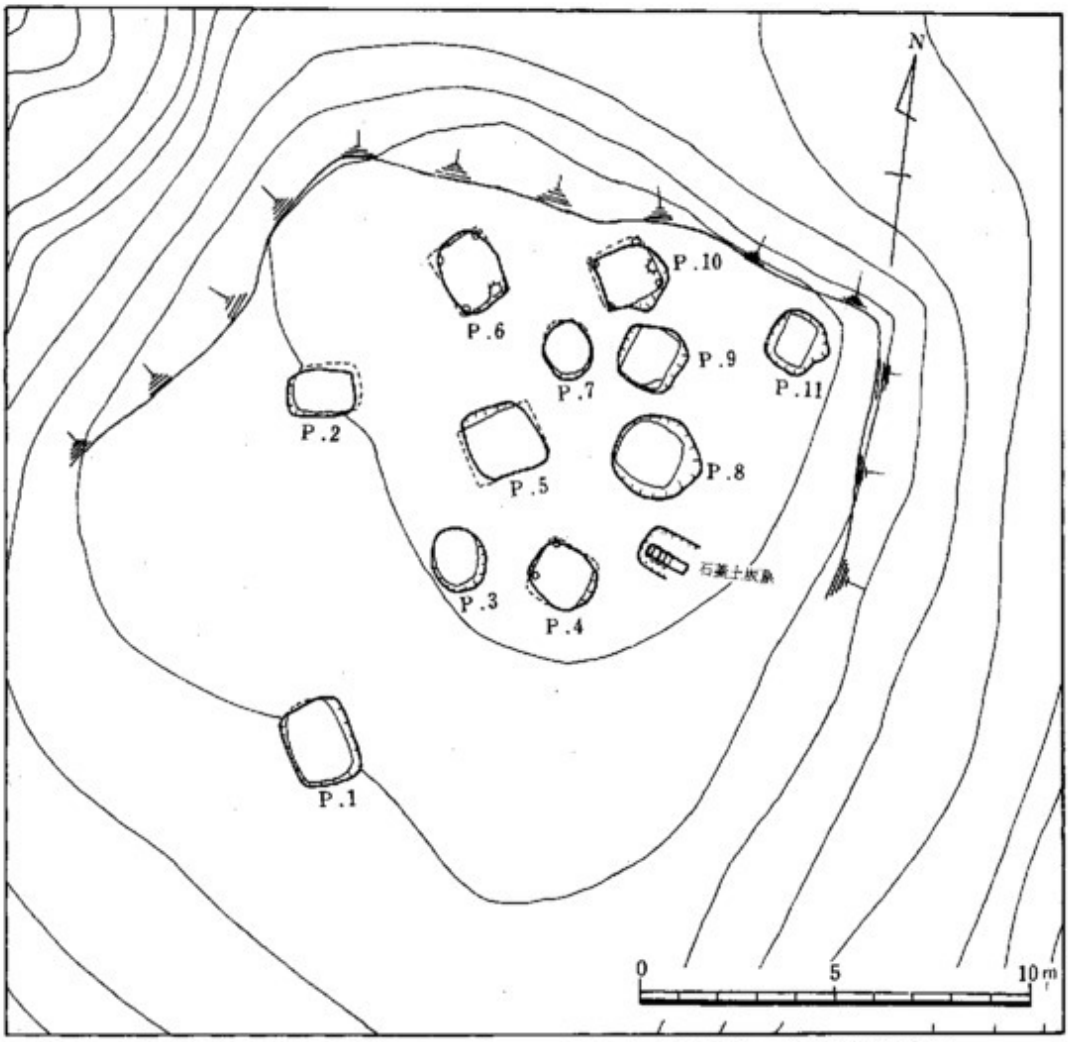
No.	径	長	孔径	材質	色彩	備考
2	4.9	22.8	1.3	滑石	灰緑色	
3	4.8	21.3	1.2	〃	〃	
4	4.7	21.4	1.5	〃	〃	
5	4.4	23.8	1.6	〃	〃	
6	4.3	16.0	1.4	〃	〃	
8	4.4	26.0	1.3	〃	〃	
9	4.7	18.8	1.2	〃	〃	
10	4.6	23.4	1.4	〃	〃	
11	4.4	22.0	2.0	〃	〃	
12	4.3	19.3	1.4	〃	〃	
平均	4.6	21.5	1.4			
13	4.0	31.4	1.5	碧玉	淡緑色	半折
14	4.0	29.4	1.4	〃	〃	〃
15	3.9	31.3	1.5	〃	〃	〃
16	4.1	38.8	1.6	〃	〃	
17	4.4	41.1	1.7	〃	〃	半折
18	4.0	37.7	1.6	〃	〃	〃
19	4.2	40.2	1.8	〃	〃	〃
平均	4.1	35.7	1.6			

管玉の個別の計側値は第2表に示した。なお、管玉のナンバーは出土位置のナンバーと同一である。

4　袋状竪穴

(1) 袋状竪穴の分布（第14図　図版9）

袋状竪穴も石蓋土坑墓同様に墳丘下（墳丘築造当時の地表面より下層）において確認した。墳丘下に存在しないものはわずかに1号竪穴のみである。A地点の丘陵頂上部に密集し、調査確認したのは計11基である。丘陵頂上部は後世による著しい地形の変化があり墳丘も約半を欠失している状態である。袋状竪穴の分布状態からすれば、他に消失した袋状竪穴の存在がうかがえるが、その数は多くないものと思われる。現存の11基を含めて総数20基前後の存在が考えられ、袋状竪穴の一単位としてのまとまりが把握される．袋状竪穴の大部分は平面プラン方形をなし、円形プランを有するものは、わずかに2基を数えるのみである。切り合い関係を示すものは皆無であり、その存続期間が長くないことを物語っている。第4号竪穴のごとく、深さ1.83mに達するものや、第4、6、10号竪穴のごとく、竪穴内に柱穴あるいは、踏み台状の出入口の存在を示すもの等から考えて、袋状竪穴形式当時の状態を比較的よく残しているものと



第14図　袋状竪穴分布図

いえよう。後述するごとく、竪穴よりの出土遺物は希少で、廃棄後、生活の営みは中断されたものと考える。以下、各袋状竪穴について詳述する。

(2)　遺構各説

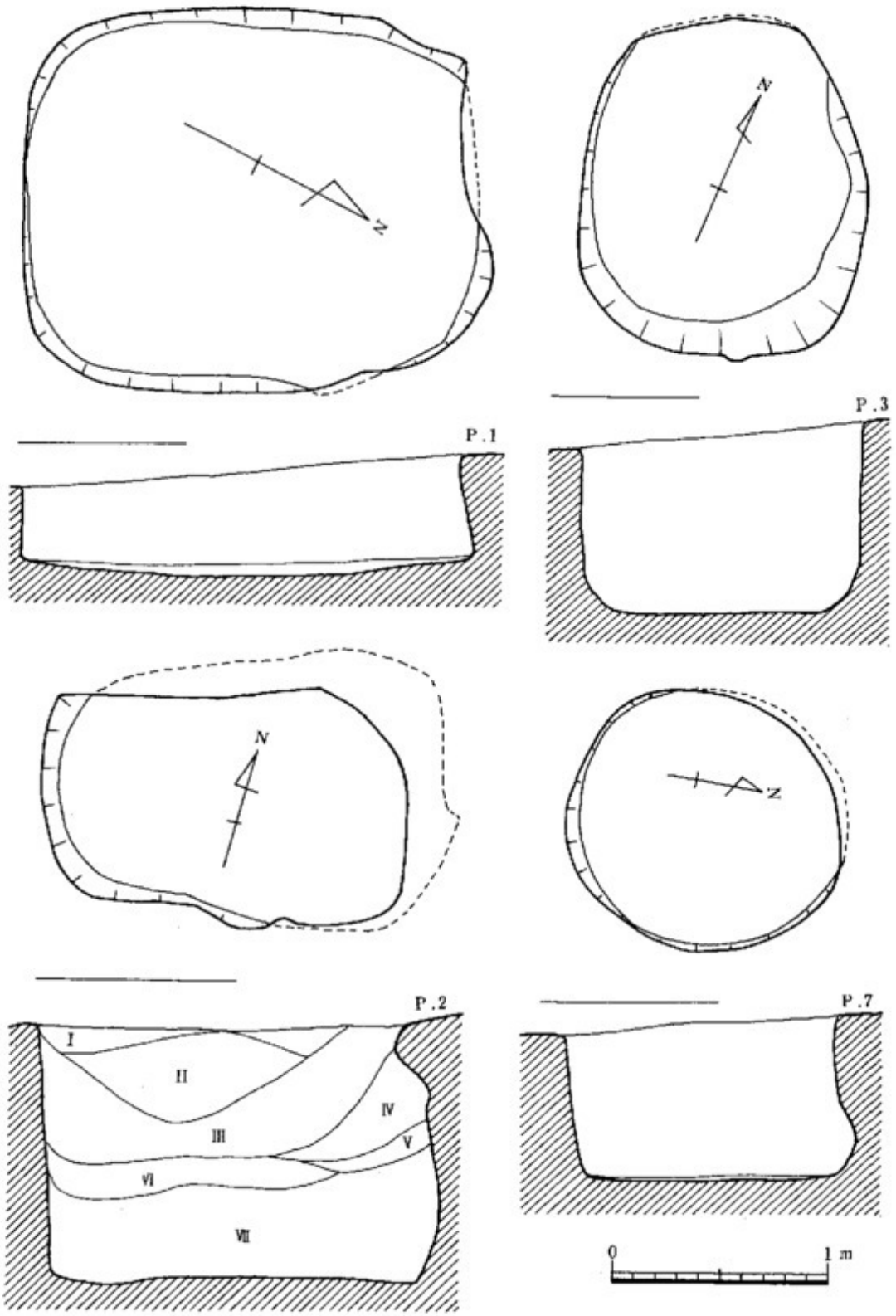
1号袋状竪穴（第15図　P 1　図版10－(1)）

他の袋状竪穴よりやや離れて位置する。墳丘下に存在しないただ一つの例である。頁岩質の岩盤に掘り込まれる。比較的浅い竪穴である。埋土は赤褐色の有機質土層で遺物の発見はない。長辺 218m、短辺 180cmをはかる。平面形は隅丸長方形プランを呈する。深さ50cm、一部袋状になる。

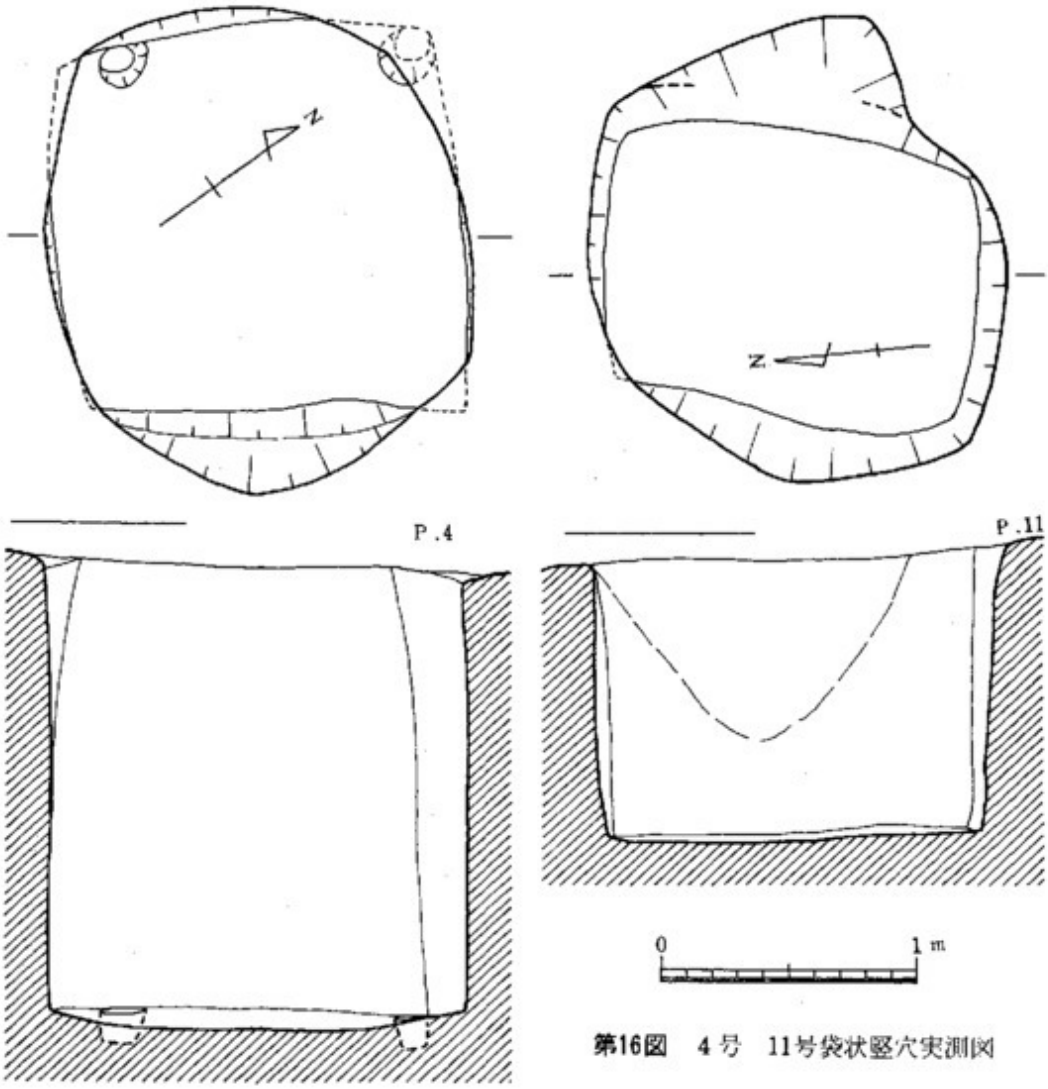
2号袋状竪穴（第15図P 2　図版10－(2)　11－(1)）

墳丘下に位置し、墳丘断面観察のAトレンチによって検出した。頁岩質の軟弱な岩盤に掘り込まれる。埋土は6層に分かれ、自然堆積の状態を示す。

第Ⅰ層は褐色土層、第Ⅱ層は淡黄褐色土層、第Ⅲ層は灰を混じえた花崗岩風化土層、第Ⅳ層は



第15図　1～3号　7号袋状竪穴実測図



第16図　4号　11号袋状竪穴実測図

黄褐色粘質土層、第Ⅴ層は赤色粘質土層、第Ⅵ層は黄褐色粘質土層、第Ⅶ層は黄褐色砂質土層となる。

埋土中には遺物はないが、床面に付着して、土器口縁部の小片1点の出土があった。口縁部はわずかに肥厚し細い刻み目を入れたものであるが、あまりに小片で時期比定は困難である。

上面は長辺 170cm、短辺 110cmをはかる隅丸長方形プランを有する。底は長辺 178cm、短辺 130cmをはかる隅丸長方形プランをなし、深さ 120cmで袋状を呈する比較的保存状態のよい竪穴である。

3号袋状竪穴（第15図P3　図版11－(2)）

4号袋状竪穴の西方、5号竪穴の南1mに位置する。平面形は長楕円形プランを呈する。口辺部で長径 160cm、短径 132cm、底辺部で長径 143cm、短径 121cm、深さ90cmをはかる。竪穴内は赤褐色粘質土によって埋まる。竪穴内より遺物の出土はなかった。

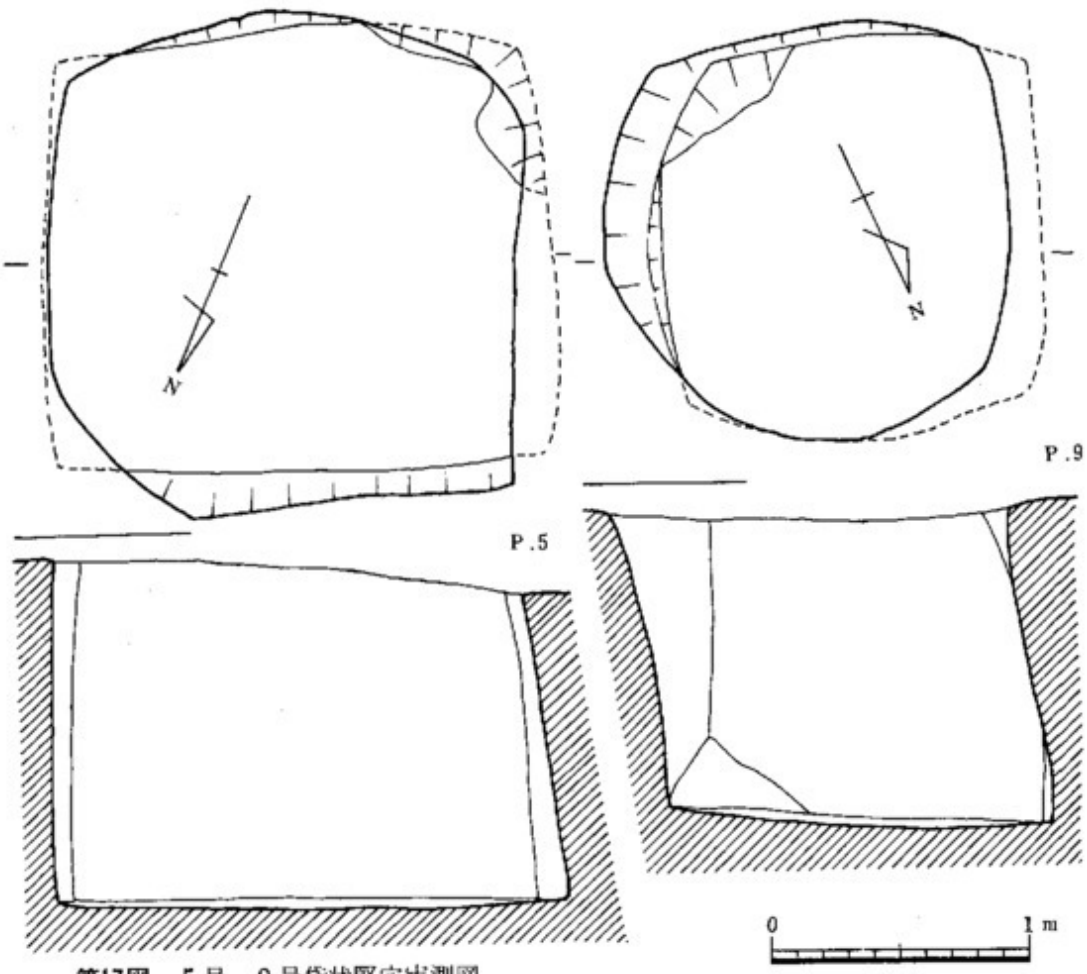
4号袋状竪穴（第16図P 4　図版12－(1)）

墳丘断面観察のために設定したBトレンチ南端において検出した竪穴で、石蓋土壙墓と3号袋状竪穴との中間に位置する。

A地点の袋状竪穴では最も深いものである。竪穴内部は口辺部より暗褐色粘質土層（わずかの礫、灰を含む。）、暗褐色粘質土層、灰を多く含む黒色粘質土層、明褐色粘質土層、褐色粘質土層、淡褐色粘質土層、灰褐色粘質土層、暗灰褐色粘質土層、赤褐色土層、黄褐色土層の順に埋まる。口辺部付近は壁の崩落がみられるが、底近くは完全な状態で残る。底部には北、西の角に柱穴が掘り込まれる。それぞれ、径22㎝、深さ20㎝、径18㎝、深さ12㎝、66度の傾きをもって掘り込まれる。

口辺部は長径 190㎝、短径 167㎝をはかる長楕円形プランと呈する。底部は一辺 150㎝の胴張りの方形を呈する。深さ 183㎝を計る。壁はほぼ垂直に立つ。

埋土中より、スクレイパー、フレイク各1点を出土した。



第17図　5号　9号袋状竪穴実測図

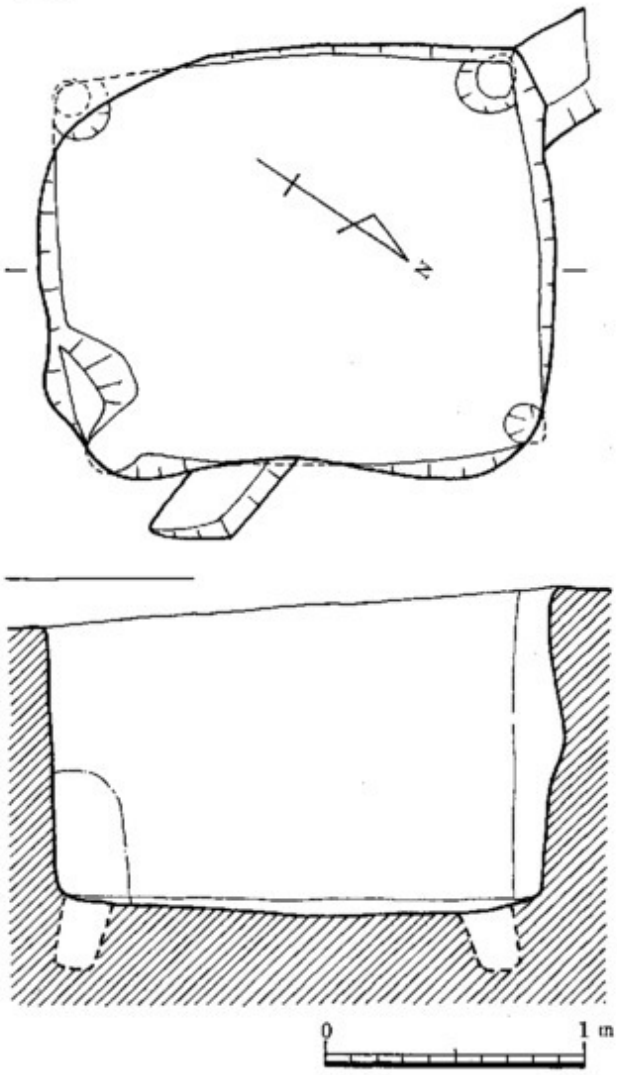
5号袋状竪穴（第17図P 1　図版12－(2)）

墳丘断面観察のために入れたAトレンチのほぼ中央部において検出した袋状竪穴である。完全な袋状を呈する竪穴で保存状態も極めて良好であるが、口辺部において一部壁の崩落がみられる。

口辺部は長辺 190cm、短辺 180cmをはかる不整方形プランを呈する。

底部は長辺 200cm、短辺 172cmの長方形プランを有するが、南側角の一部が掘り残されている。これは第6号袋状竪穴や第10号袋状竪穴にみられるような出入口と考えられる踏み台のものが崩壊したとみることもできるが確証はない。深さ 132cmをはかる。

竪穴内部よりの遺物の出土は皆無であった。



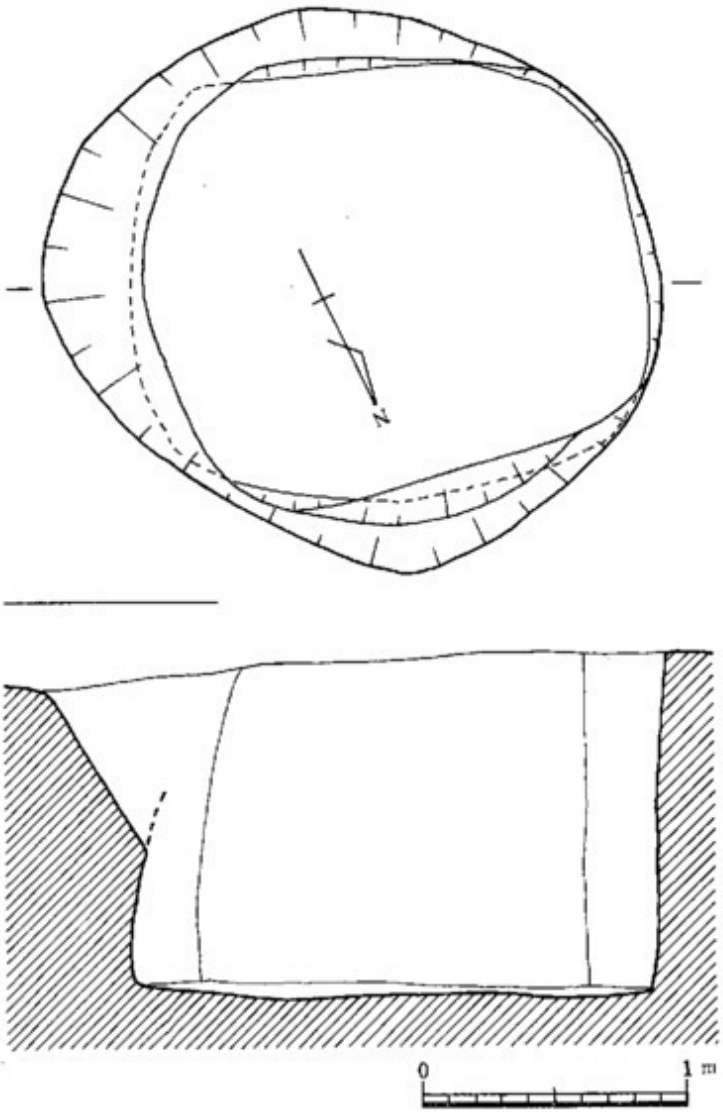
第18図　6号袋状竪穴実測図

6号袋状竪穴（第18図　図版13）

古墳石室下に位置する袋状竪穴である。口辺部が、古墳石室の腰石掘り込みによって破壊される。

壁はほぼ垂直に立ちあがり、一部袋状を呈する部分がある。口辺部は長辺 199cm、短辺 175cmをはかる隅丸長方形プランをなす。底部は長辺 185cm、短辺 160cmの長方形プランを呈する。深さ 125cmを計る。

本竪穴は10号袋状竪穴と共に竪穴の構造をよく残している点は注目される。底部における柱穴と踏み台状の出入口の存在がそれである。柱穴は、北、南、西の三コーナーに認められる。北の柱穴は径15cm、深さ8 cm、南の柱穴は径22cm、深さ27cm、西の柱穴は径22cm、深さ22cmをはかり、北の柱穴は他よりやや浅い。東コーナーにおいて柱穴の存在は認められないが、後述する踏み台状の施設と壁に掘り込みが認められ、柱が建てられたことがわかる。柱穴は竪穴の中心部に向き76度の角度に掘り込まれる。出入口と考えることのできる踏み台状の遺構は東コーナー付近にかたよって、地山（軟弱な頁岩）を40cm×28cm、高さ50cmに削り出したものである。こ



第19図　8号袋状竪穴実測図

の部分に足をおいての出入は容易である。竪穴内よりの遺物の出土はない。

7号袋状竪穴

（第15図P 7　図版14－(1)）

墳丘に入れたBトレンチ北側に検出した袋状竪穴で、本遺跡中最小のものである。

口辺部は 127cm× 122をはかる円形プランを呈する。底は 125cm× 120cmをはかる円形プランで、一部袋状を呈する。深さ78cm、埋土中より土器小片３、石鏃1点の出土があったが、土器は保存状態が悪く時期を判別することはできない。

8号袋状竪穴（第19図）

墳丘に入れたAトレンチ、Bトレンチのコーナー付近において確認した袋状竪穴で、石蓋土壙墓の北に近接して位置する。

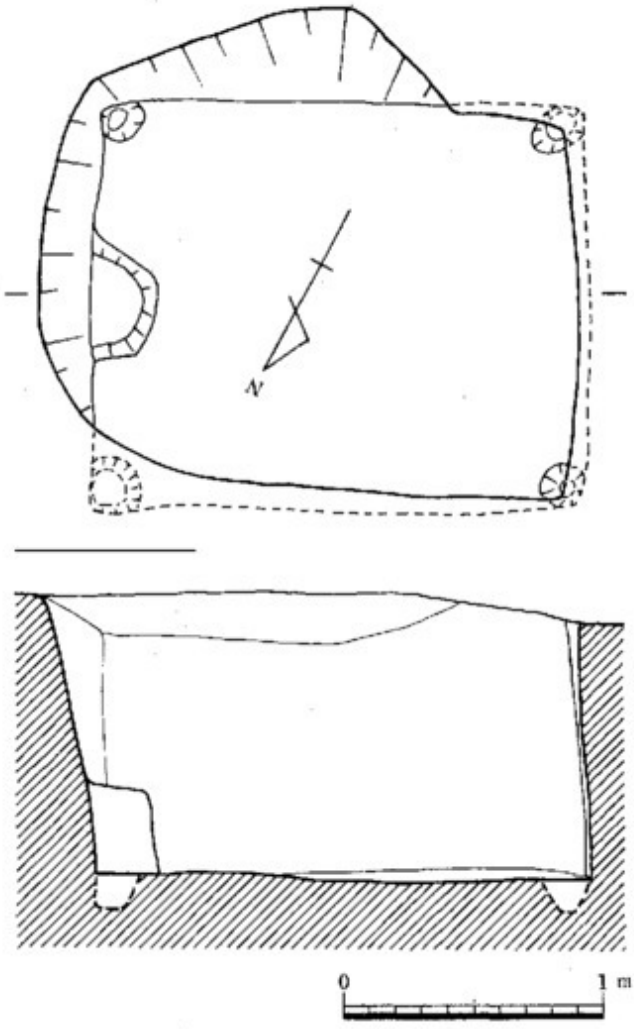
口辺部は壁の崩落によって、東、北、南は大きく変形され、長径 235cm、短径 215cmの不整円形プランをなす。底辺部は比較的旧状を保ち、長辺 195cm、短辺 175cmをはかるやや胴張りの隅丸長方形プランを呈する。深さ 130cm。遺物は土器小片１点、チップ１点を検出したのみである。

9号袋状竪穴（第17図P 9）

Bトレンチに竪穴の一部を確認したもので10号にきわめて接近する。東側壁が一部崩壊するが残存状態はきわめて良好である。

口辺部は 158cm× 160cmの不整方形プランをなす。底部は 155cm× 148cmをはかるやや胴張りの方形を呈する。深さ 122cm。

底辺部南コーナーに一部掘り残し部分が認められ、第６号袋状竪穴、第10号袋状竪穴に認め



第20図　10号袋状竪穴実測図

られる踏み台状の施設が崩壊したものと考えるが確証はない。

遺物はフレイク1点の出土があったのみである。

10号袋状竪穴

（第20図　図版14－(2)）

Bトレンチ北端において確認した袋状竪穴である。構造において6号袋状竪穴と同一で注目される。口辺部は東、南の一部の壁が崩落し変形するが、残存状態はよく袋状を呈している。

底辺部のコーナーにそれぞれ柱穴を掘り込む。北コーナーの柱穴は径20cm、深さ13cm、東コーナーの柱穴は径16cm、深さ18cm、南コーナーの柱穴は径20cm、深さ17cm、西コーナーの柱穴は径15cm、深さ13cmをはかり、それぞれの柱穴は竪穴中心部に向う角度をもって掘り込まれる。東側壁中央部には6号袋状竪穴と同様に地山を削り出した踏み台状の施設が認められる。同施設は上面において35cm×20cm、下底部において50cm×25cmの半円状を呈し高さ33cmをはかる。出入口として同施設を利用すれば竪穴への出入は容易にできる。

竪穴は口辺部で長辺 208cm、短辺 188cmをはかる不整長方形をなし、底辺部では長辺 192cm 短辺 162cmをはかる長方形プランを有する。深さは 118cmをはかる。遺物の検出はなかった。

11号袋状竪穴（第16図P11　図版15－(1)）

他の袋状竪穴よりやや離れて東端に位置する袋状竪穴である。口辺部は東西壁が一部崩落し変形する。 164cm× 180cmをはかる不整形をなす。底辺部は長辺 145cm、短辺 115cmをはかる長方形プランを呈する。深さ 122cmで、竪穴内よりの遺物は皆無である。

以上、各袋状竪穴について詳述してきたが、年代を決定できるような遺物の出土はみられな

第3表　袋状竪穴一覧表

No.	形　状	口辺径(cm)	底辺形(cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
1	隅丸長方形	218×180	208×165	50		
2	隅丸長方形	170×110	178×130	120	土器小片1	
3	長楕円形	160×132	143×121	90		
4	方　形	190×167	150×150	183	フレイク1	柱穴2
5	長方形	190×180	200×172	132	スクレイパー1	
6	長方形	199×175	185×160	125		踏み台状施設 柱穴3
7	円　形	127×122	125×120	78	土器片3 石鏃1	
8	隅丸長方形	235×215	195×175	130		
9	方　形	158×160	155×148	122		
10	長方形	208×188	192×162	118		柱穴4 踏み台状施設
11	長方形	164×180	145×115	122		

かった。計11基のうち9基までが、長方形、方形プランを呈することは注目されよう。

平面方形の袋状竪穴は夜臼、板付Ⅰ式期に繁栄し、その後は円形の袋状竪穴に移行すると考えられており①、それより判断すれば、本遺跡の竪穴は前期前半に比定される可能性が大きい。

註　① 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性－九州」『日本の考古学Ⅲ』 1966年

(3) 遺物各説

袋状竪穴に伴う遺物は非常に少く、第2号竪穴床面より土器小片1点、第4号竪穴埋土中よりスクレイパー、フレイク各1点、第7号竪穴埋土中より石鏃1点、土器小片3点、第8号竪穴埋土中より黒耀石チップ1点、土器小片1点、第9号竪穴埋土中より、黒耀石フレイク1点の出土があったのみである。いずれも時期を決定するには困難である。

スクレイパー（第45図5）第4号竪穴の埋土中より出土したものである。サヌサイトの剝片を利用したもので、一面に自然を残す。一面より細部加工を施し、刃部を形成する。長さ 5.6cmを計る。

石鏃（第45図7）　サヌカイトを素材として両面より細部加工を施した無茎石鏃である。わたぐりが深い。長さ 1.5cmを計る。

第Ⅴ章　B地点の調査

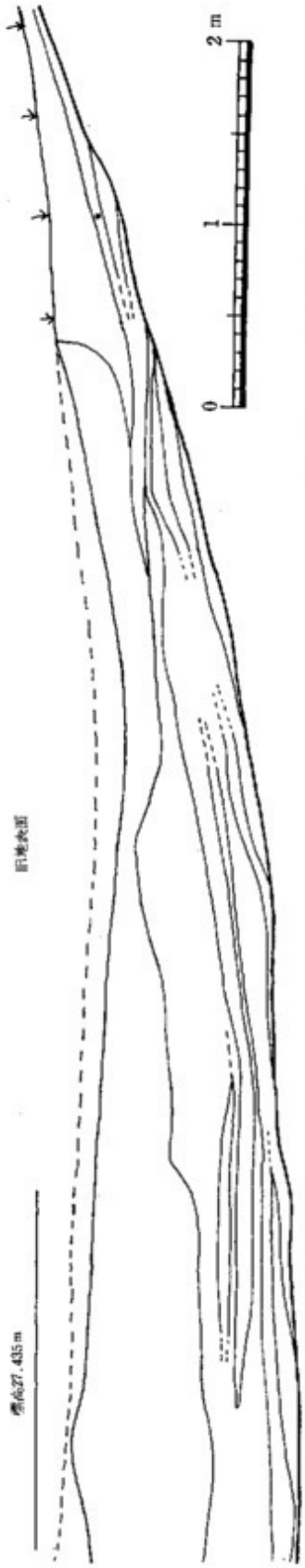
1　B地点の調査経過と概要

B地点は発掘前の踏査段階より、甕棺墓一基が露出していて、墓地としての広がりを示すものと考えていた。A地点の調査終了後の昭和47年9月8日から11月21日までの75日間、B地点の調査にあたった。甕棺の分布は当初考えたよりもその範囲を広げず、計6基の一群を検出したにすぎなかった。甕棺分布地域は、雨水等の流れにより表土層の流失が著しく、岩盤を露出している部分が多く、また炭坑により若干の地形変化をみせていて甕棺墓の破壊があったことは、丘陵下における甕棺破片の検出によって知ることができる。しかし、今回調査分の6基を含めて総数10数基を越えない甕棺墓地ではないかと考える。

甕棺墓地は丘陵尾根が、一旦フラットになった部分に形成されたものであるが、それより下の斜面において、数ケ所の配石遺構の存在を確認した。その性格については、土層の色別が困難なせいもあって当初は把握することができなかったが、溝状遺構の発掘中において、配石遺構の下に土壙墓が存在することを確認した。この配石を伴う土壙墓は丘陵斜面を半円状にとりかこむ分布を示し、上の甕棺を意識した上での形成を考えた。計11基を確認したが、その内訳は石棺墓1基、石蓋土壙墓2基、土壙墓13基である。4号土壙墓より前漢鏡一面、13号土壙墓より棺外に置かれた素環頭刀子一振、15号土壙墓よりガラス小玉540個、6号土壙墓付近より鉄斧1点の副葬品を得、予期以上の成果をあげることができた。土壙墓の上に堆積する土層は明茶褐色粘質土と暗褐色粘質土が交互に認められ、丘陵上よりの流れ込みの状態を示す。その中には、弥生時代中期後半から後期前半の土器が認められ、土壙墓の副葬品と考え合わせて土壙墓の年代が後期前半におかれるものと考えた。B地点の調査は、鏡、素環頭刀子、鉄斧、ガラス小玉等の副葬品もさることながら、弥生時代後期前半における墓地の形成について成果をあげることができた。

2　B地点の層序（第21図）

B地点の南斜面は雨水等によって表土層等の流失が著しく岩盤が露出するが、A地点丘陵とその東側の丘陵の形成する谷あい、1号石棺を中心とする部分には厚い有機質土層の堆積がみられる。一部土層判別の不可能な部分があるがその状態は丘陵上からの流れ込みを示している。最も上層判別のつく部位においては、地山の上に暗褐色粘質土、その上に明茶褐色粘質土とそれぞれ交互に8枚認められる。各層の厚さは5～10cmを計る。この互層の上はブルトーザーによって表土の除去を行ったために、ブルトーザーによる攪乱と、客土が存在する。旧地表面から土壙墓までの層の堆積は最も深いところで1.5mを計り、丘陵上よりの土砂の流入はかなり激しいものであったとうかがえる。



第21図　B地点土層断面実測図

3　遺構の分布（第22図）

A地点丘陵の東に存在する丘陵尾根が西に尾根をのばしてくる尾根上の一平坦面に甕棺墓群が、その尾根がA地点丘陵と合致して形成する南斜面に土壙墓群の存在が認められる。

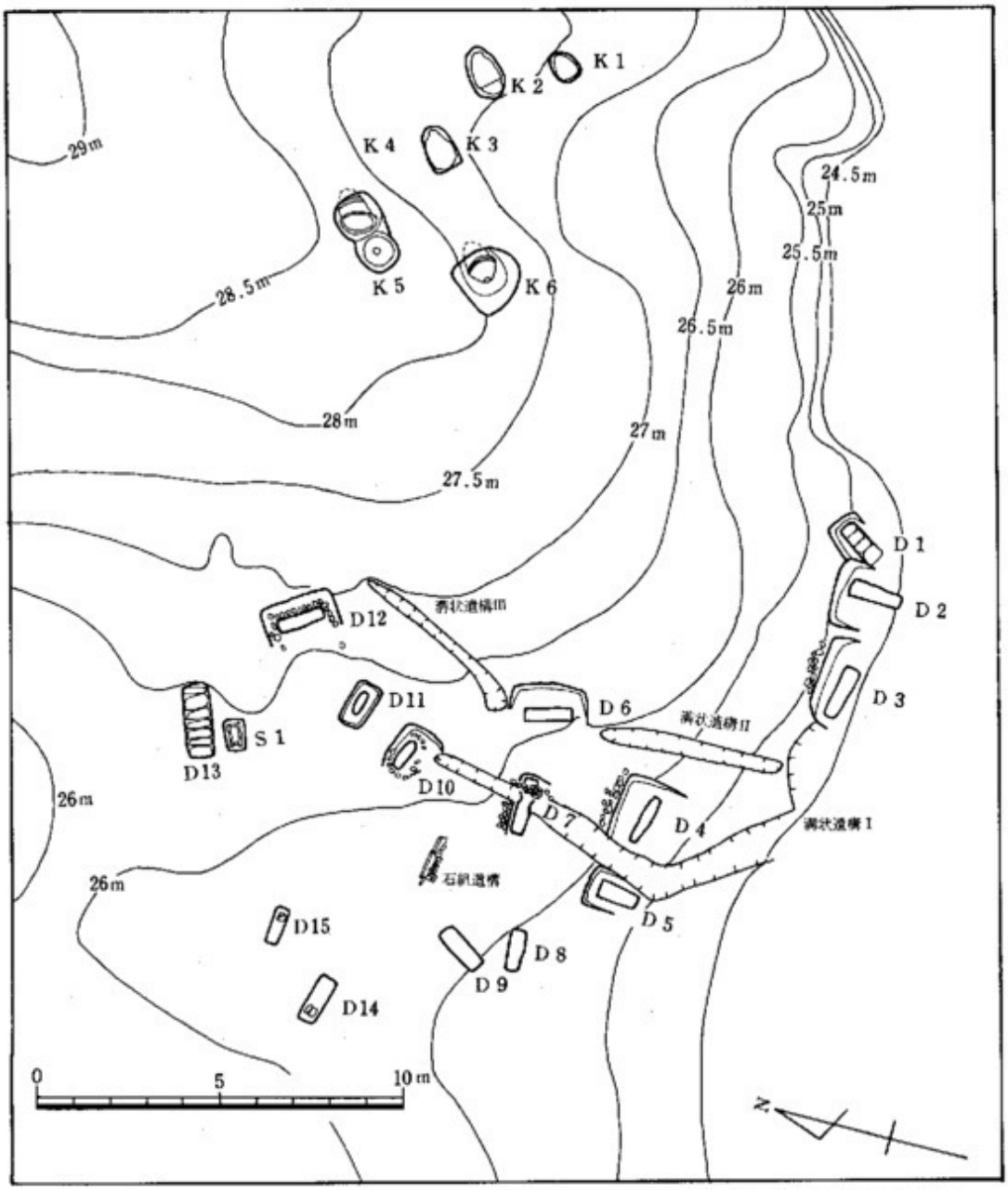
遺構は後世の溝をのぞいてすべてが墳墓で、東西30m、南北20mの範囲に形成される。甕棺墓は計6基で一定のまとまりをみせる。すべてが成人用の大形甕棺墓で小児用の甕棺墓を含まない。5号甕棺墓のみが単棺で他は合口の甕棺である。1～3号、5号甕棺墓は削平され半壊される。4号甕棺墓と5号甕に切り合い関係が認められる。1、2号甕棺墓と6号甕棺墓の間は流水のために削られ甕棺の消失がみられ、丘陵下において甕棺破片が認められる。本来的には十数基前後の甕棺墓地であったと考える。

甕棺墓地と地域を異にして土壙墓群の形成がある。その分布は甕棺墓群をとりかこむように半円状に丘陵斜面に占地し、甕棺墓群を意識したものと考えうる。

土壙墓群は1～3号土壙墓からなるI群と4～15号土壙墓、1号石棺墓よりなるII群に別けることが可能である。II群は石組遺構を中心として計13基の石棺墓、石蓋土壙墓、土壙墓より構成される。小児用の土壙墓、石棺墓3基は一地域にまとまり石組遺構に近く、成人用の土壙墓がとり囲む分布を示している。

土壙墓は互に切り合うことなく一定の空地の存在が認められる。墓標的存在と考える配石、置石は計六基に認められる。4号、6号、13号、15号の各土壙墓には、鏡、素環頭刀子、鉄斧、ガラス小玉を副葬するが、これらの土壙墓は他の土壙墓と比較した場合、特別の差はない。また土壙墓の方向、頭位には画一性は認めることはできない。

I群は甕棺墓と同様に土砂の流失等により地形の変化が認められ、現存するのは半壊された3基の土壙墓のみ



第22図　B地点遺構分布図

である。元来、II群とほぼ同数の墳墓が構成されていたものと考えられる。1号土壙墓と2号土壙墓は切り合う。3号土壙墓には配石が認められる。以下、各遺構について詳述する。

4　遺構各説

(1) 甕棺墓

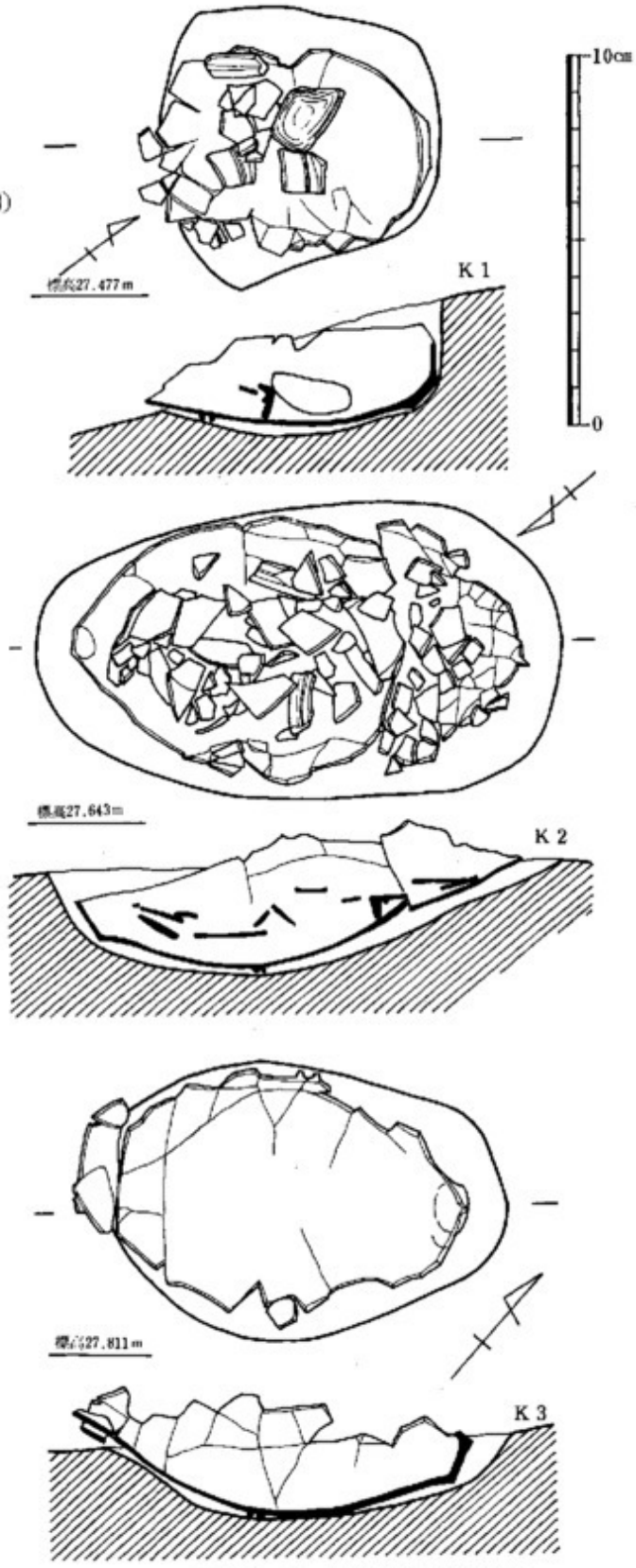
1号甕棺墓

（第23図K１　第26図K１図版16－(2)）

土砂の流失によって半壊された甕棺墓である。大形の甕を下甕とし、鉢形土器で蓋をした接合式の成人棺である。棺は主軸方向がN－35度－Eに位置し、棺口は南西を向く。41度の角度をもって埋置される。棺内には甕棺破片と共に20cm×15cm×10cmの花崗岩礫１個を交じえる。

下甕は推定高 103cm、口径79.6cmを計る大形の甕で、口縁部は逆L字形の平坦口縁を有し、口縁下に一条の断面三角形の突帯を、胴腹部に二条のコの字形突帯をめぐらしている。胴部はやや張るが、ほぼ口径と同じである。器壁は大形品にもかかわらず、きわめて薄く、特に口縁下部、底部の上部は１cmに満たない程（ 0.8cm）である。胎土中には若干の石英砂を含む。焼成は良好である。器壁外面下半には荒い刷毛目調整痕が施され、内壁面の一部にも刷毛目調整痕を認める。色調は外面が赤褐色、内面は一部灰褐色を呈する。

上甕は口縁部の一部破片である。復原口径はほぼ下甕と同様である。口縁部はやや立ちあがる逆L字形をなすが、口脣部を欠失する。口



第23図　１～３号甕棺墓実測図

縁部下に断面三角形の突帯一条をめぐらす。胎土、焼成は下甕とほぼ同様である。

2号甕棺墓（第22図K 2　図版17－(1)）

半壊された甕棺墓である。大形甕2個を用いた挿入式の成人棺である。棺は主軸方向をN－39度－Eにとり、棺口は南西に向く。31度30分の傾斜をもって埋置される。

下甕は口縁部を打ち欠いたもので、胴腹部に二条のコの字形突帯をめぐらしている。胴部はやや張る。現存高83cm、径78.6cmを計る。器壁は1cm前後を有する。胎土中に石英砂を含む。焼成不良で褐色を呈する。器壁外面の底部近くに刷毛目調整痕を有する。

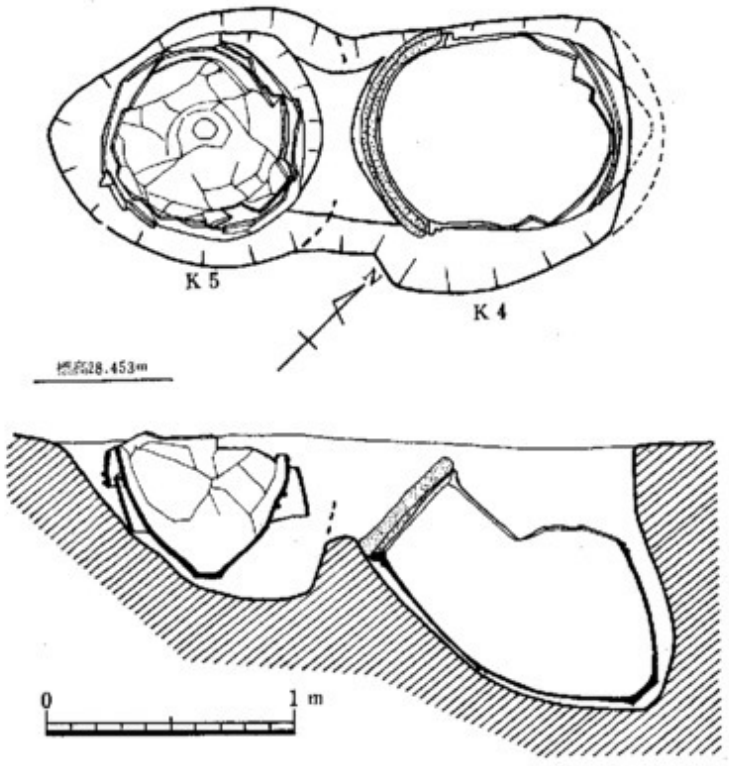
上甕は口縁部が逆L字形をなし、口縁下に断面三角形の突帯一条をめぐらす。口縁より下方を欠失するが胴はかなり張るものと思われる。口径70cmを計る。胎土焼成は下甕同様で、黄褐色を呈する。

3号甕棺墓（第23図K 3　第26図K 3　図版17－(2)）

半壊された成人用甕棺墓で、大形甕2個を挿入式に合せたものである。上甕は極一部を残すのみである。棺底より崩落した甕棺破片と共に丹塗りの小形甕形土器口縁部破片（第43図13）が混入していた。棺は主軸方向をN－49.5度－Eに棺口を南西に向け、25度の傾斜をもって埋置される。

下甕は2号甕棺とほぼ同様の器形を呈する。

現存高84.8cm、径76cmを計る。胴腹部に二条の断面コ字形の突帯一条をめぐらす。器壁は1cm前後の厚さを有する。胎土中に石英砂を含む。焼成は良好である。色調は外壁面が黄褐色、内壁面が



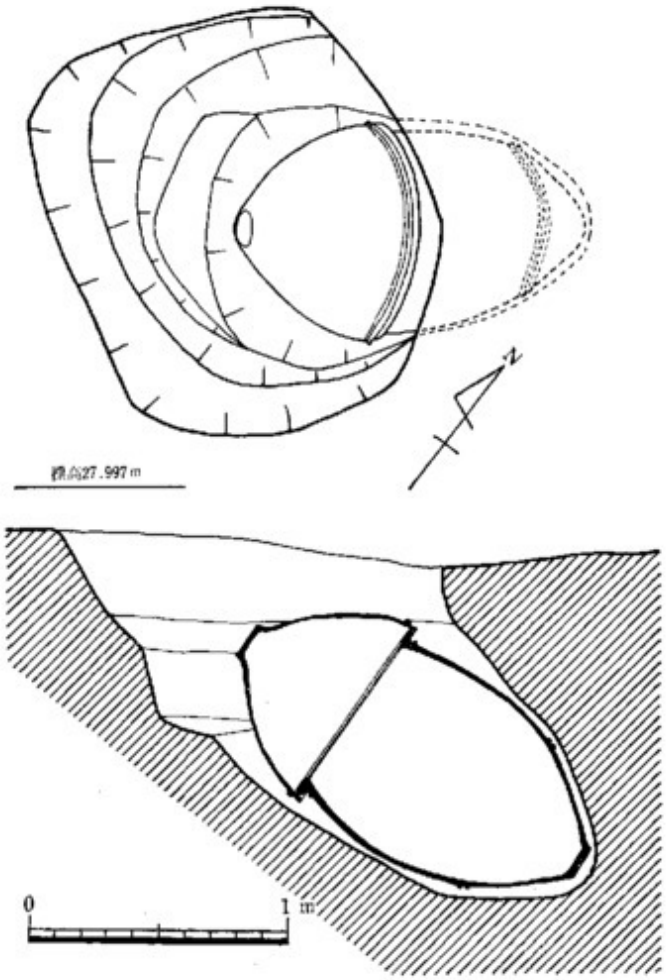
第24図　4号　5号甕棺墓実測図

灰褐色を呈する。

4号甕棺墓

（第24図第27図K４　図版18－(1)）

５号甕棺墓によって墓壙の一部を切られ、時間的に５号甕棺墓より先行する。墓壙は一辺 1.2cmの隅丸方形プランをなし、深さ約40cmの竪穴の底から北東部に、棺を挿し入れる為に、46度の傾きをもつ奥行きの浅い横穴が掘られる。本遺跡で同様の様穴が掘られる。る墓壙は第６号甕棺墓との２例である。棺は大形の甕を使用した単式の成人用甕棺で主軸方向をＮ－55度－Ｅにおき、南西に棺口を向け、60度の傾斜をもって埋置される。棺には元来、木蓋の使用があったものと思われ、甕の口縁部に幅10cm、厚さ８cmの粘土帯がめぐる。甕棺は器高 118cm、口縁部はる。口縁部は逆Ｌ字形をなし、口縁部下に断面三角形の突帯一条を、胴腹部下方に二条の断面コ字形の突帯をめぐらす。胴は口縁下より順次張り、器高のほぼ半分で最大（径86cm）となる。胎土に若干の石英砂をまじえ、焼成はよくない。器壁は口縁下より順次薄くなり、底部付近では１cmにみたず器壁厚の差は著しいものがある。本甕棺においては粘土接合面が判然としていて甕棺製作法について観察できる。[1] 平均約10cm巾の粘土帯の上端に凸面を、下端に凹を作り、それらを組み合せて作りあげるという製作法をとらえられるが、胴腹部において、粘土帯の凹、凸面が逆になり、甕棺製作にあたって、口縁部上半を底部下半に二分して製作し、突帯周辺において上下を接合する方法のあったことを知ることができた。なお、底部内面には指によるつまみあげのあとが螺旋状にめぐっている。



第25図　６号甕棺墓実測図

5号甕棺墓（第24図第26図K 5　図版18－(2)）

4号甕棺墓より時間的におくれて営まれた甕棺墓である。墓壙は長軸約 1.2m、短軸約1 mの楕円形プランを有する。棺は大形の甕2個を挿入式にした成人用の甕棺で、ほぼ垂直（85度）に埋置される。下甕の一部と上甕の半分以上が削平される。

下甕は胴部より下半部を残すのみで、現存高56cm、径80cmを計る。胴腹部に二条の断面コ字形の突帯をめぐらす。器壁内外面に刷毛目調整痕を認める。胎土に石英砂を含み、焼成は良好、赤褐色を呈する。

上甕は胴部上半を打ち欠き　蓋としたもので、推定高68cm、径93cmを計る。胴腹部に二条の断面コ字形の突帯をめぐらす。底部内面に刷毛目調整痕を認める。胎土には石英砂を含み焼成は良好、赤褐色を呈する。

6号甕棺墓（第25図第27図K 6　図版19）

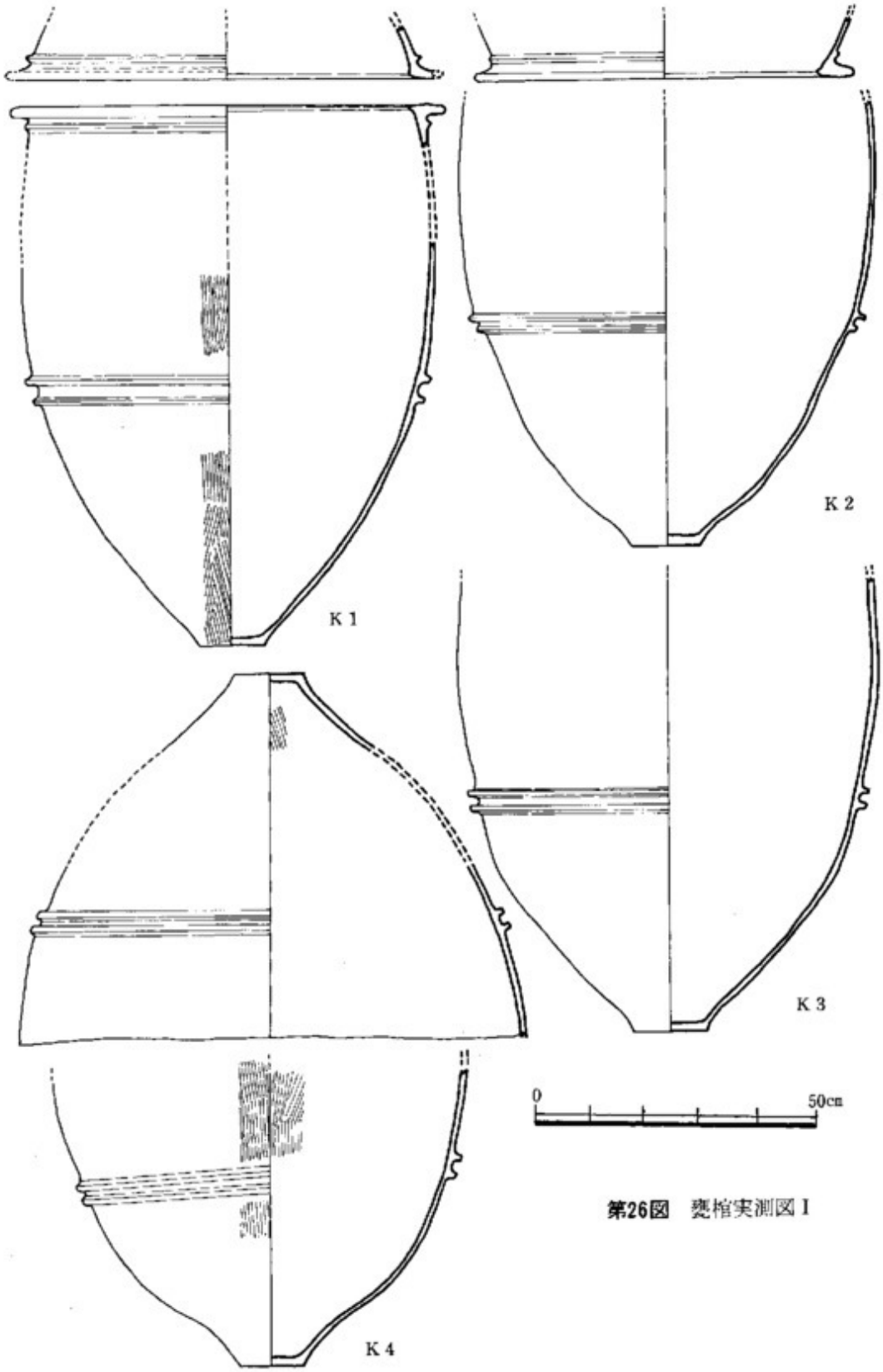
墓壙は長軸約 1.6m、短軸 1.4mの隅丸方形プランをなし、深さ80cmの竪穴の中央部から北側に36度の傾斜をもつ、奥行55cmの横穴が掘られる。甕棺はほとんど余裕がない状態で横穴に挿し入れて埋置される。

甕棺は大形の甕と同様の甕の上半部を欠いたものを蓋とした挿入式の成人用の合口甕棺で、本遺跡で最も保存のよいものである。甕棺は主軸方向をN－54度－Eに33度の傾斜をもって埋置される。

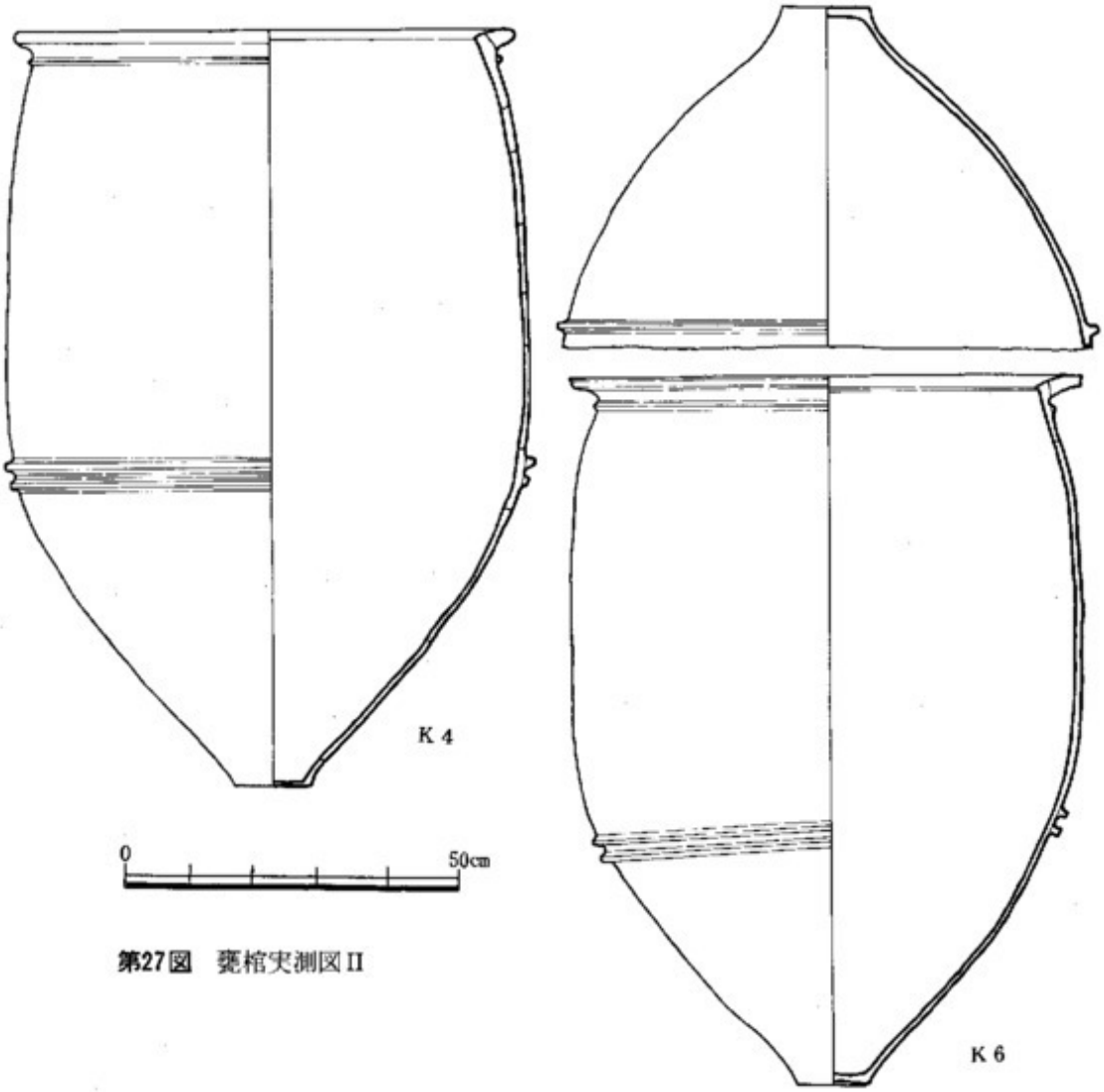
下甕は口縁部がやや立ちあがる逆L字形をなし、口縁部下に断面三角形の突帯一条を、胴腹部に二条の断面コ字形突帯をめぐらす。器高 110cm、口縁部径79.2cmを計る。器壁は全体に薄く、1cmに達しない部分がある。胎土に石英砂を含む、焼成はよくない。赤褐色を呈し、一部黒斑がみとめられる。整作法は第4号甕棺墓と同様である。上甕は下甕と同形同大の甕の突帯付近より打ち欠いたもので、器高53cm、径82cmを計る。胎土中に石英砂を含み、焼成は良好、外面は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。

以上1～6号甕棺墓は甕棺の特徴からして、すべてが中期後半に位置づけられるものである。

註　① 宝台遺跡における甕棺製作法の観察では「平均約10cm幅の粘土帯の上端に内面を下端に凹を作り、それらを9段に組み合せて作り上げるという製作法をとらえることができた。また、胴腹部のコの字形突帯は、粘土紐の上下両端をなで下して貼付けたものではなく、胴部器面に沿って粘土紐の先端を反り返して重ねさげ、粘土上端をなで上げて貼付けている。このような製作上の特殊な方法が認められた。」とされ、本例ときわめて類似するが、本例にみられる如く、上半部と下半部が別個につくる手法は用いていない。
田坂美代子　「17号甕棺墓」　『宝台遺跡』所収　日本住宅公団　1970年



第26図　甕棺実測図 I



第27図　甕棺実測図II

(2)　**土壙墓**（図版20）

1号土壙墓（第28図D 1　図版21）

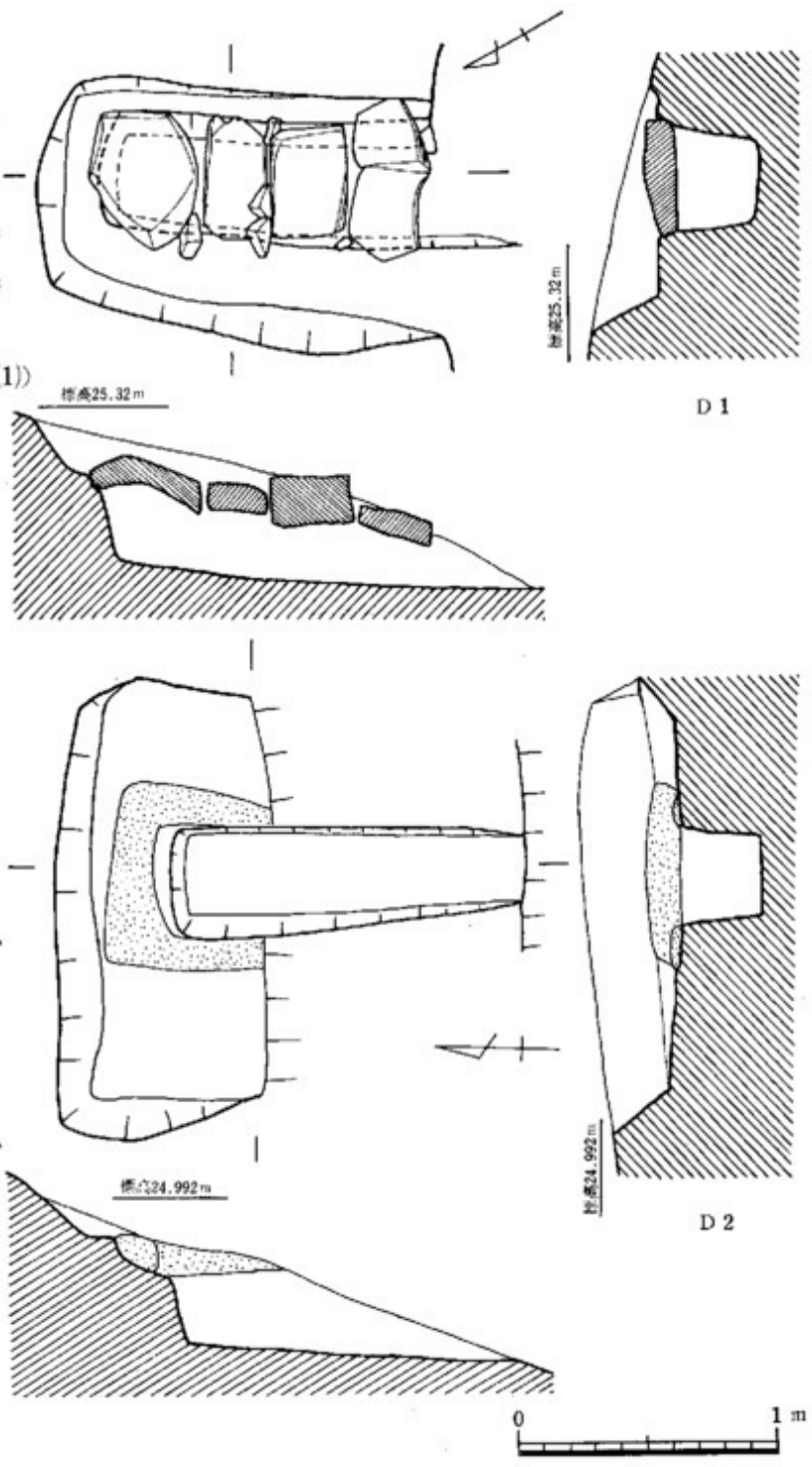
甕棺群の下方南斜面に確認した石蓋土壙墓である。2号土壙墓の一段目掘り込みを切って作られる。時間的には2号土壙墓より後出するものである。土壙は二段に掘り込まれ、一部は崖面となり破壊される。主軸方向をN－32度－Eにとる。一段目の掘り込みは、現存部で長さ156cm、幅91cmの長方形プランをなし、深さは保存のよい部分で25cmを計る。二段目の掘り込みは現存部で長さ170cm、幅47.5cmの長方形で、深さ33cmを計る。一段目と二段目の掘り込みによって生じた段を肩として蓋石をわたす。蓋石は現存するもの4枚で、接して並べ、隙間は小礫をもって埋める。石材は砂岩、花崗岩が利用される。床面は北から南にかけて傾斜し、その高低差は12cmを計る。北端の蓋石内面に一部赤色顔料の付着がみられ、頭位を北東に置いていた

ものと考える。墓内はかって盗掘をうけたものと思え蓋石内面にはススの付着がみられ、壺形土器の小破片（第43図4）1点がみられたのみである。成人用の土壙墓であろう。

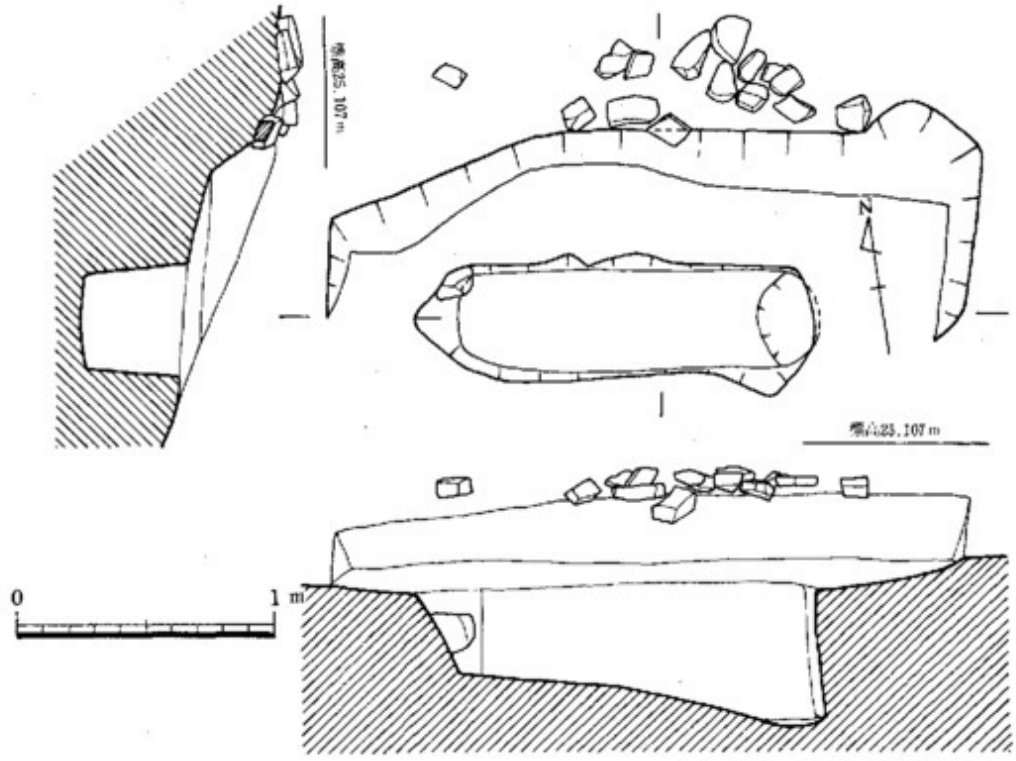
2号土壙墓

（第28図D2　図版22-(1)）

1号土壙墓によって一段目掘り込みを切られ、主軸方向をN－5度－Wにおき、二段に掘り込まれる。一段目の掘り込みはその大部分を削平される。現存長70cm、幅182cmを計り、長方形プランをなすと考えられる。深さ16cm。二段目掘り込みは現存長135cm、幅45cm、深さ30cmを計る。床面は北から南に傾斜しその高低差は8cmを有する。墓底北に赤色顔料がみられ、足位は北に置かれたものと考える。木蓋が使用されたと考えられ墓の周囲に接して幅約15cm、厚さ約13cmの白色の粘土帯をめぐらす。成人用の土壙墓であろう。



第28図　1号　2号土壙墓実測図



第29図　3号土壙墓実測図

3号土壙墓（第29図　図版22－(2)）

2号土壙墓の西に接して作られた土壙墓で二段に掘り込まれる。主軸はN－81度－Wの方向に位置する。一段目の掘り込みは約半分を削平される。平面形は長方形プランをなすものと考えられ、長さ250cmを計る。二段目の掘り込みは一段目掘り込みのほぼ中央部に長さ157cm、幅43cmの長方形プランで掘り込まれる。床面は傾斜し、頭位と考えられる部分の深さ32cm、足位部分の深さ52cmを計る。一段目掘り込み西側縁には計15個の花崗岩角礫によって構成される配石がみられる。

4号土壙墓（第30図　図版23、24、25－(1)）

1～3号土壙墓とやや距離をおいて作られる土壙墓である。二段に掘り込まれ、一段目掘り込みの西側を溝に切られ、南側の一部は削平される。一段目掘り込みは現存長202cm、幅179cm、深さ35cmを計る。二段目掘り込みは一段目掘り込みのほぼ中央部に、長軸141cm、頭位幅29cm、足位幅25cm、胴部幅41cmを計る胴ふくらみの長方形プランに掘られる。主軸方向をN－75度－Wにとり、一段目掘り込みの主軸方向N－81度－Wと若干の差をみせる。

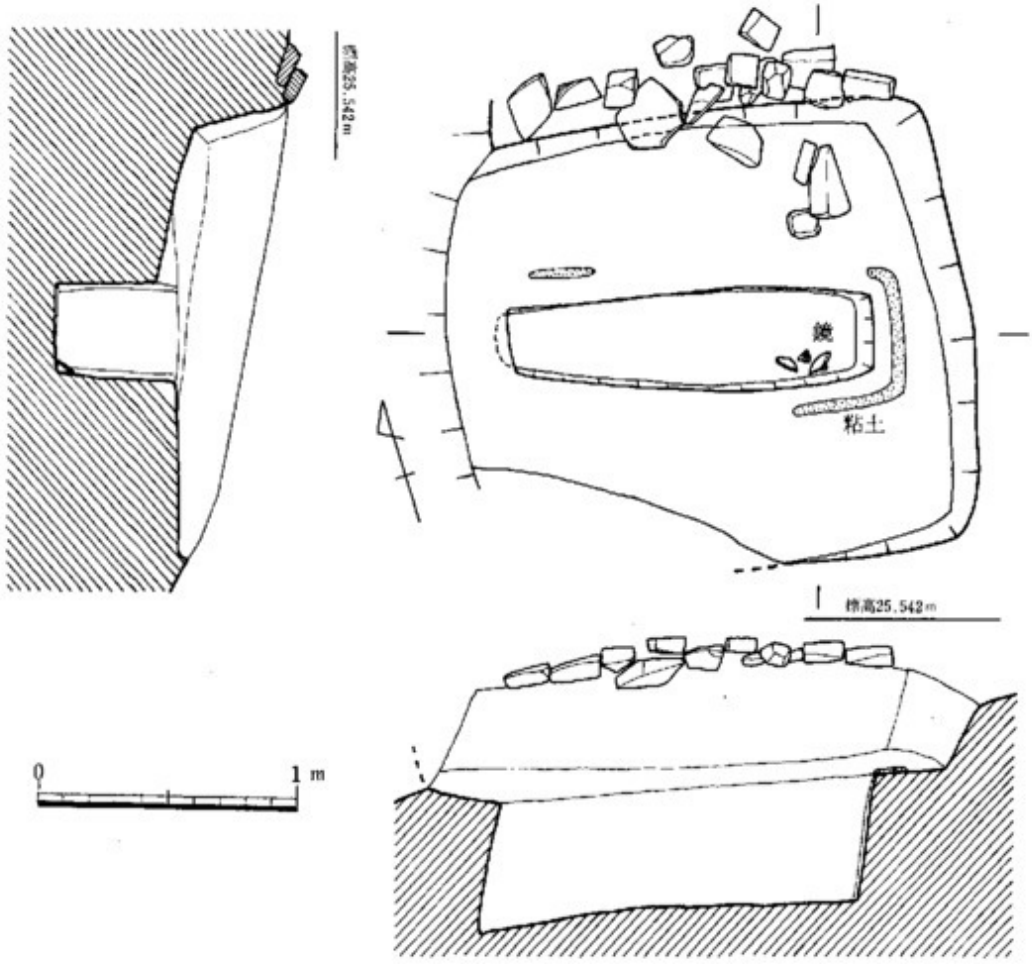
深さは頭位で47cm、足位で51cm、を計り、床面は傾斜する。足位はわずかに横に掘り込まれる。壙には木蓋が使用されたと考えられ、二段目土壙縁に幅5cmの粘土帯がみられる。頭位付近南側壁に接して四片に割れて鏡の副葬がみられた。約半分を有する鏡片は鏡面を内に側壁にた

てかけた状態を示し、元来は、鏡面を内に南壁にたてかけた状態を示し、鏡は木蓋の崩落時において割れたものであろう。鏡周辺部には若干の赤色顔料がみられた。一段目掘り込みの北側縁には、20cm×20cmの花崗岩、砂岩等の角礫18個もって配石がなされる。配石の一部は一段目掘り込み中の上にも存在し、そのレベルは側縁のものと大差ない。本土壙墓は鏡の副葬をもつにもかかわらず、第II群の土壙墓中では5号土壙墓と共に最も低い部分に存在する。成人用の土壙墓である。

5号土壙墓（第31図　図版25－(2)　26－(1)）

4号土壙墓の西に接して存在し、4号土壙墓同様溝によって一段目掘り込みを切られる。一段目掘り込みは削平され約半分を失う。

現存部で長さ 130cm、幅 132cm、を計り、長方形プランをなすと考えられる。一段目掘り込みのほぼ中央部に二段目掘り込みがみられる。長さ 125cm、幅50cmの長方形プランをなし、深さ32cmを計る。床面は水平であるが足位の部分は一段深く掘りこまれ、深さ45cmを有する。

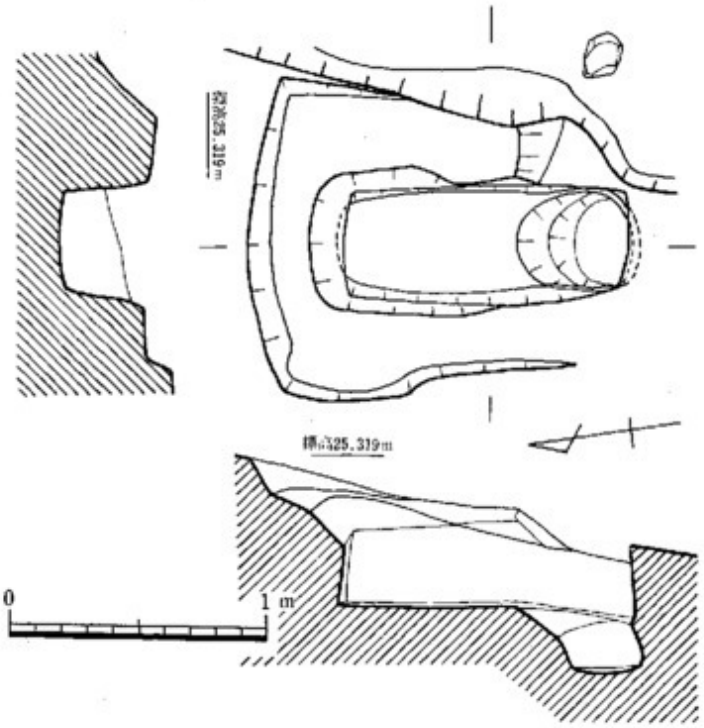


第30図　4号土壙墓実測図

長さが短いが、膝を屈曲した場合は成人の埋葬にも充分である。主軸方向はN－9度－Eに位置する。

6号土壙墓（第32図）

4号土壙墓の北に位置し、二段に掘り込まれた土壙墓である。一段目掘り込みは約半分を削平されるが、長方形プランをなすものと考えられる。現存長 215cm、幅 105cm、深さ25cmを計る。一段目掘り込みのほぼ中央部に二段目掘り込みがみられ、主軸方向をN－14度－Wにとる。長さ 140cm、幅42cmの長方形プランをなし、深さは頭位で25cm、足位で35cmを計り、床面は傾斜する。東側壁付近より鉄斧の出土があり、本土壙墓の棺外副葬品とみられる。膝を屈曲した場合は成人の埋葬も可能である。



第31図　5号土壙墓実測図

7号土壙墓（第33図　図版26－(2)　27）

二段に掘り込まれた土壙墓で、溝によって壙の中央部が破壊される。一段目掘り込みは現存長 215cm、幅75cmの隅丸長方形をなし、深さ19cmを計る。二段目掘り込みは、一段目掘り込みのほぼ中央部に掘られ、主軸方向をほぼ東西（N－89度－W）におく。長さ 158cm、幅40cm、深さは頭位で20cm、足位で50cmを計り、床面はかなりの傾斜をもち、その高低差は25cmを計る。頭位部に二段目掘り込み面より20cm浮いて38cm×30cmの隋円形の川原石を置き、さらに一段目掘り込みの北側壁縁から土壙墓を横断するようにL字形に配石がみられる。配石は花崗岩、砂岩、安山岩、珪化木等の角礫約40個をもって構成される。二段目掘り込みの上に存在する配石と置石は、蓋の崩落に伴い土壙内に落ち込んだ状態を示している。

成人用の土壙墓で、副葬品の存在はみられない。

8号土壙墓（第34図D８）

二段に掘り込まれた土壙墓で主軸方向はN－82度－Eに位置する。一段目の掘り込みは平面形は楕円形を呈すると考えられ、現存長 145cm、幅98cm、深さ14cmを計る。二段目掘り込みは一段目掘り込みの北側壁にかたよって掘られ、長さ 120cm、幅42cmを計る長方形プランをなす。

深さは頭位で20cm、足位で40cmとなり、床面は足位にむかって傾斜する。膝を屈曲して埋葬すれば成人でも無理はない。

9号土壙墓（第34図D9）

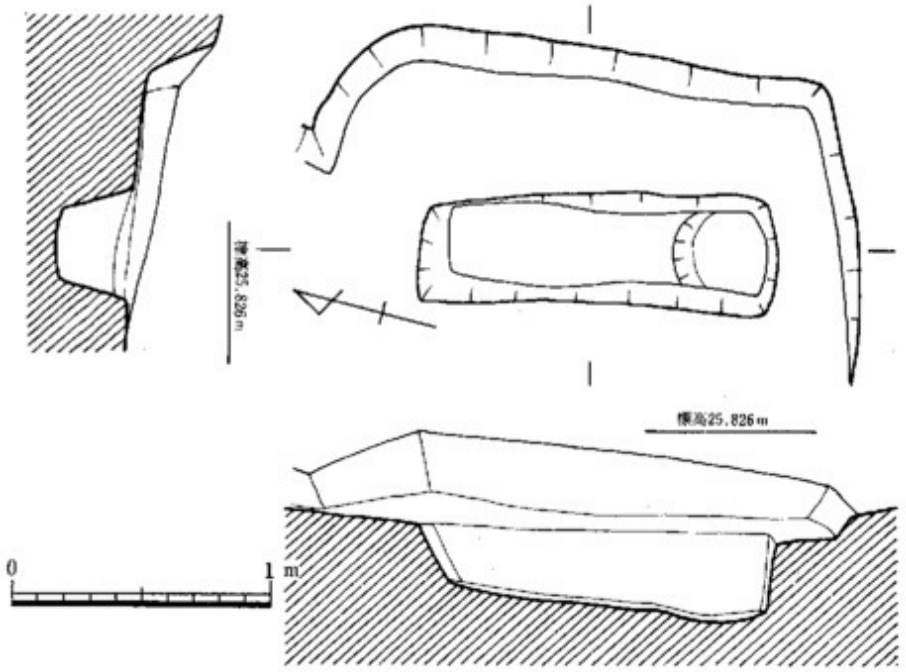
削平され土壙底を残すのみである。主軸方向をN－35.5度－Eにとる。長さ148cm、幅54cm、深さ10cmを計る。床面は傾斜する。成人用の土壙墓であると考える。

10号土壙墓（第35図D10、図版28－(2)）

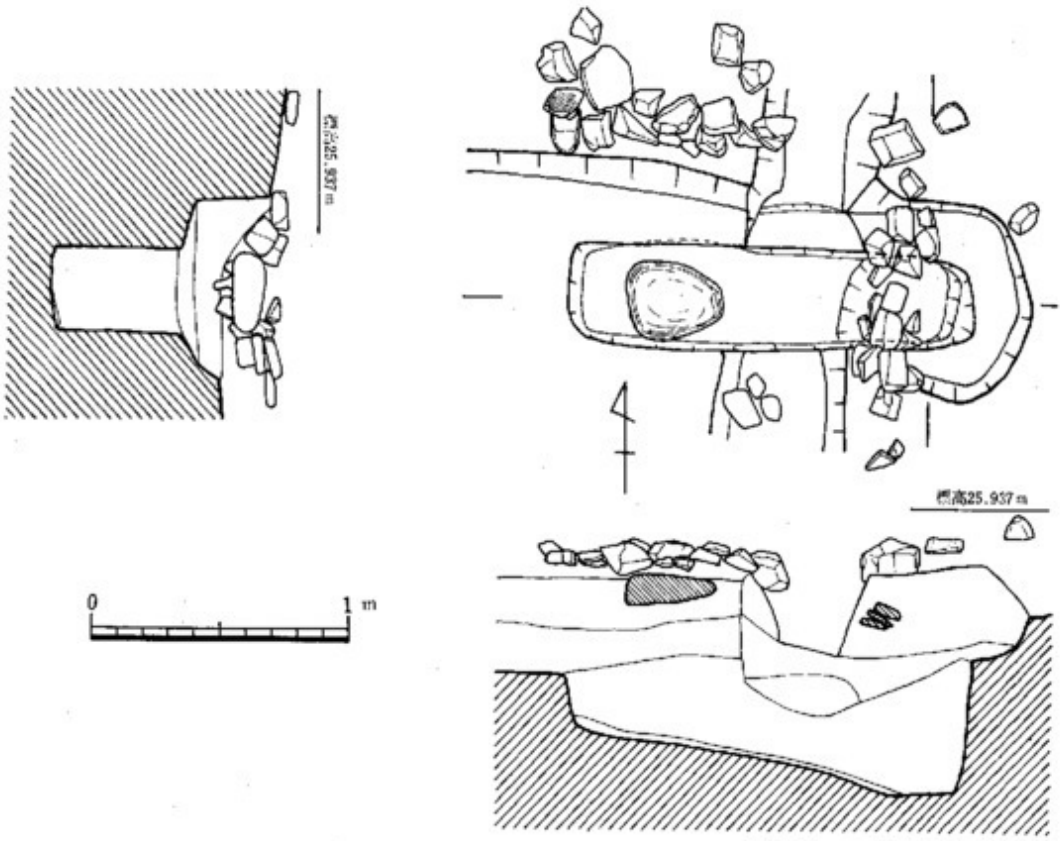
土壙墓の一段目掘り込みより5cm程度浮いて、花崗岩、砂岩の角礫20個をもって構成される円形の配石がみられる。配石は一部を溝によって切られる。円形の配石は、土壙墓を完全に囲みこむものでなく、一部壙よりずれて存在する。一段目掘り込みは平面形を長方形プランにとるものと考えるが、2辺を握むことができなかった。復原すれば長さ150cm、幅110cmになろう。深さは22cmを計る。二段目の掘り込みは一段目掘り込みの北側壁にかたより掘り込まれる。主軸方向をN－68度－Wにおく。長さ99cm、頭位幅30cm、足位幅18cmを計る長方形プランをなし、足位部は一部横穴が掘られる。深さは頭位で25cm、足位で37cmを計り、床面は足位部に傾斜する。土壙の大きさから小児用の土壙墓であろうと考える。

11号土壙墓（第35図D11　図版29－(1)）

10号土壙墓に並列して掘り込まれた土壙墓で本遺跡では最も保存状態のよいものである。二段



第32図　6号土壙墓実測図



第33図　7号土壙墓実測図

に掘り込まれる。一段目掘り込みは長さ 132cm、幅62cmの隅丸長方形プランをなし、深さ26cmに掘り込まれる。一段目掘り込みのほぼ中央部に二段目掘り込みが、長さ65cm、幅25cmの長楕円形プランをもって掘り込まれる。深さは頭位部で23cm、足位部で40cmを計る。足位部にはさらに横穴が掘り込まれる。床面は足位部に向って急な角度（16度）をもって傾斜する。主軸方向はN－76度－Wに位置する。小児用の土壙墓であると考える。

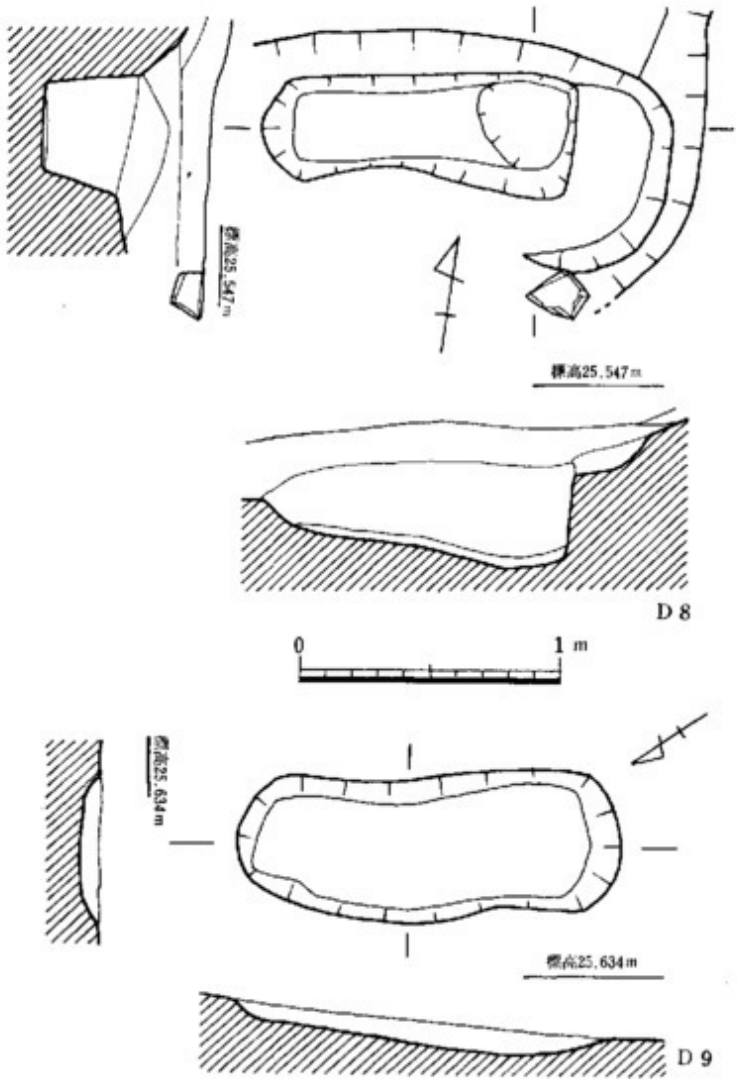
12号土壙墓（第36図　図版29－(2)　30－(1)）

B地点土壙墓群の中で最も高位置に存在する二段掘り込みの土壙墓である。一段面掘り込みは長さ 225cm、幅 136cm（＋α）の隅丸長方形プランをなすものと考えられ、深さ28cmに掘り込まれる。二段面掘り込みは長さ 128cm、幅45cm、の長方形プランに掘り込まれるが、足位部において、さらに細長い横穴が掘り込まれ、長さ 170cmを計る。深さは頭位で26cm、足位で74cmを計る。床面は頭位部から足位部にむかって急角度（13度）をもって傾斜し、その高低差は44cmを計る。土壙墓は主軸方向をN－36度－Wにおく。一段目掘り込みの底より、約20cm浮いて、二段目掘り込みを囲むコの字形の配石がみられる。配石は前述例と同様に花崗岩、砂岩の角礫28個をもって構成される。本遺跡中では最もよく残っている配石である。成人用の土壙墓であると考える。

13号土壙墓

（第37図
図版30－(2)　31－(1)）

1号石棺と並列して存在するもので本遺跡中最大の石蓋土壙墓である。石材の類似点を除いては積極的な根拠はないが、1号石棺墓と同時埋葬された可能性がある。土壙墓は主軸方向をN－71度－Eにおき、長さ211cm、幅65cmの長方形プランをなし、深さ42cmに掘り込まれる。蓋石は滑石、結晶変岩、砂岩の板石7枚を接して並べたもので、蓋石の隙間は小礫でふさぎ、白色粘土をもって目張りが施される。石蓋の南側2枚は滑石を利用し、他の蓋と比較した場合は厚く、内面に赤色顔料が付着し後述する副葬品の位置と考え合わせて、西に頭を置いたものと考える。土壙墓中、本例のみが、床面の低い部分に頭位を置いたものである。西短側壁より45cm離れて素環頭刀子一振が刃部を棺にむけて置かれ本石蓋土壙墓に伴う棺外副葬品と考えることができる。



第34図　8号、9号土壙墓実測図

14号土壙墓（第38図D14　図版33－(1)）

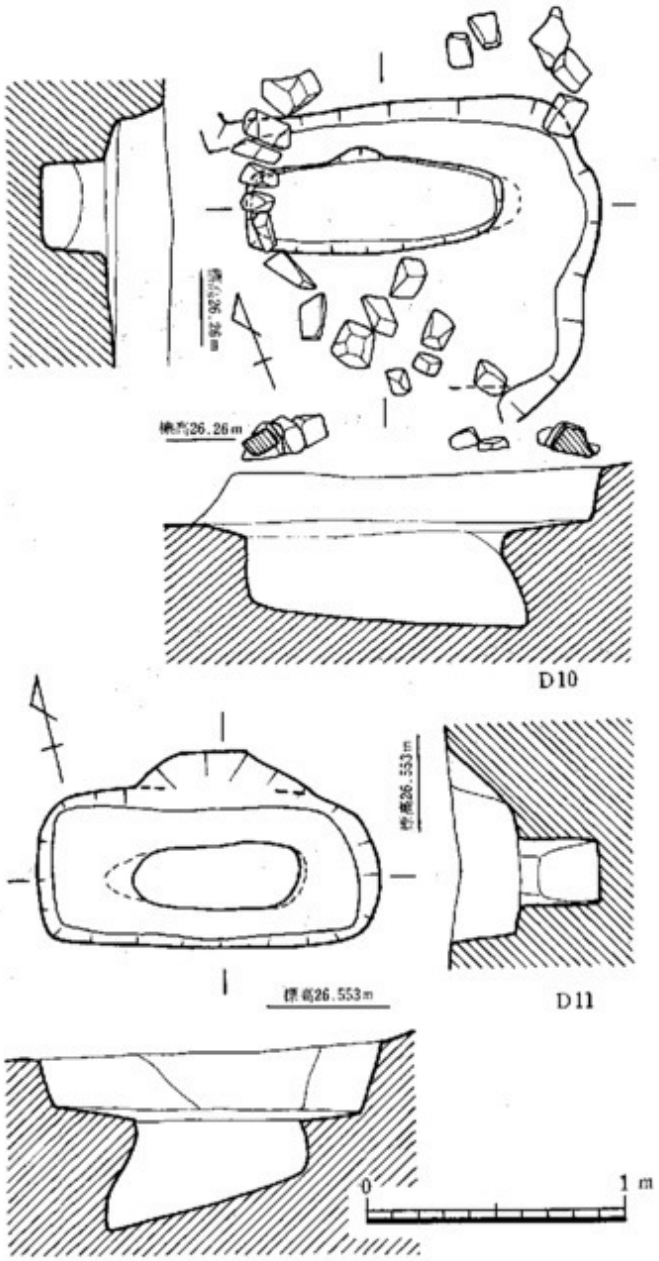
長さ154cm、幅54cmの隅丸長方形プランをなす土壙墓である。主軸方向はN－78度－Wにおき、深さは頭位で39cm、足位で40cmを計る。床面には厚さ3cmの黄色粘土を張る。頭位部には30cm×20cm×15cmの花崗岩角礫と、40cm×25cm×10cmの円礫を置く。ひざを軽く屈曲して埋葬すれば成人用の埋葬には充分の大きさである。

15号土壙墓

（第38図D15　図版33－(2)）

14号土壙墓に近接しほぼ同様の形状をなす。頭位部に30cm×25cm×18cmの花崗岩角礫1個をおく。主軸をN－87度－Wにおき、長さ122cm幅49cmの隅丸長方形プランを有し、深さは頭位で29cm、足位で36cmに掘り込まれる。床面は14号土壙墓と同様に、赤色顔料を混入した黄色粘土を床面に張る。頭位部にガラス小玉540個を副葬する。ガラス小玉は、埋葬時は首にかけた状態であったと思われ、一部三重に並ぶ部分があるが、大部分は頭位30cm×30cmの範囲に散って出土した。

ひざを屈曲して埋葬すれば成人の、埋葬も充分可能である。



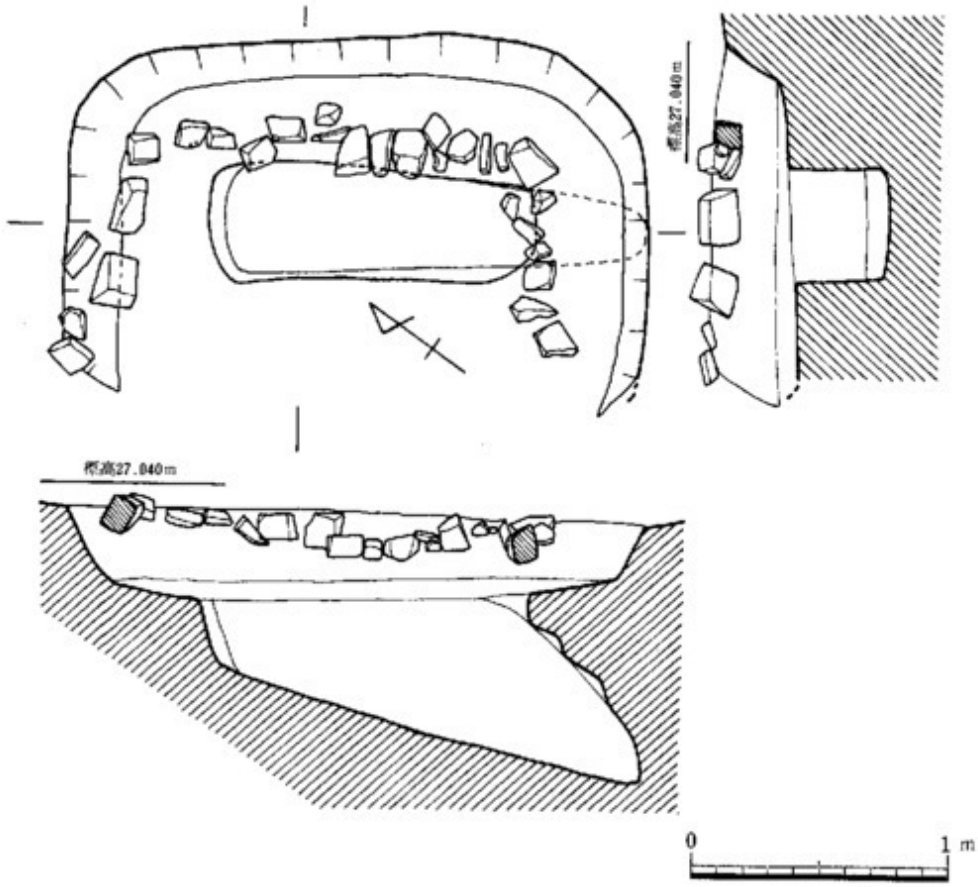
第35図　10号　11号土壙墓実測図

1号石棺墓

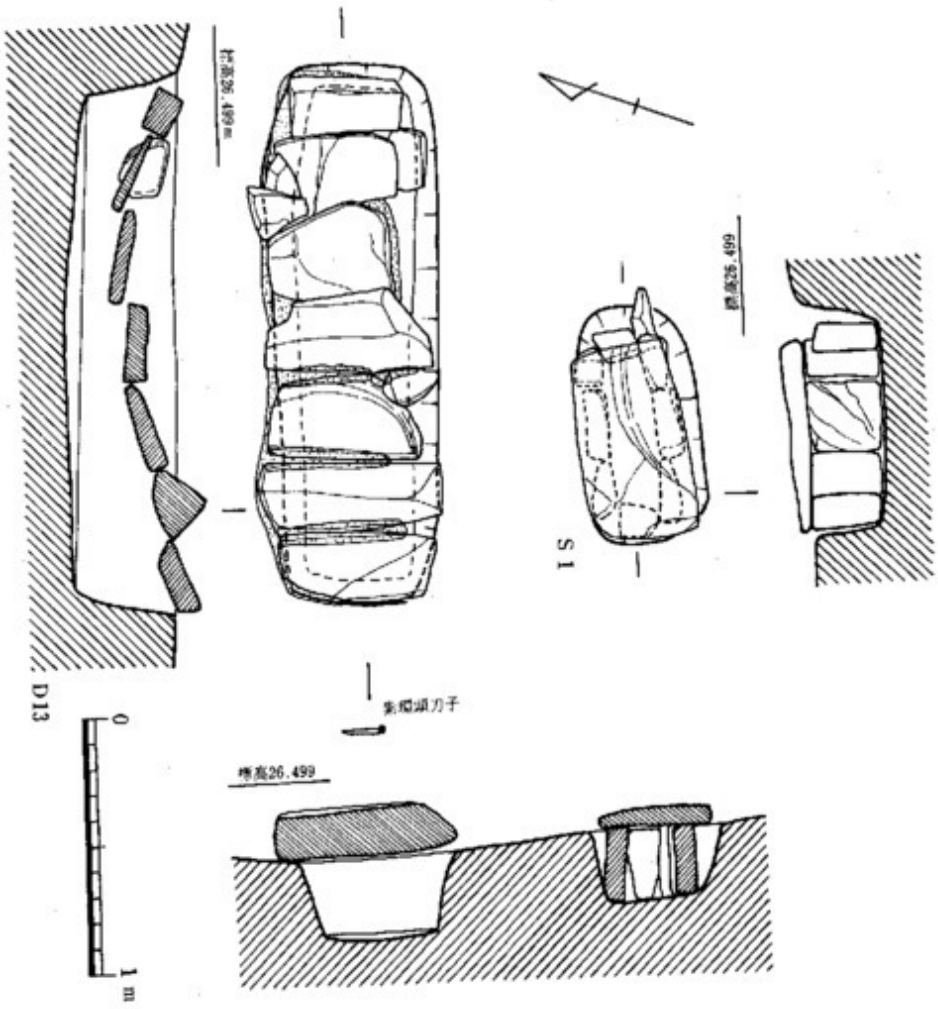
（37図　図版31－(2)　32）

13号土壙墓と同時埋葬の可能性のある小児用の石棺墓である。長軸92cm、短軸46cmの隅丸長方形プランの墓壙内に花崗岩角礫8枚を組み合せにし箱式石棺を作る。棺蓋は長さ75cm、幅41cm、厚さ8cmの滑石の板石を使用し、発掘時においては棺内には土砂の流入はなかった。石棺は主軸方向をN－65度－Eにおく。棺は内部において長さ56cm、幅18cm、深さ26cmを計る。

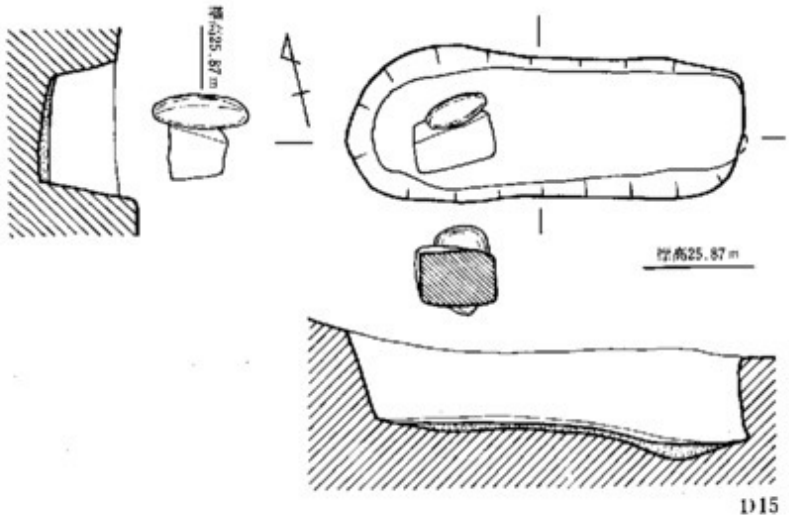
註　① 頭位の判定には副葬品その他で頭位を明らかにできるもの以外は、床面の傾斜によって高い部分を頭位とした。頭位の明らかなものも、13号土壙墓を除いては頭位を床面の高い方においている。

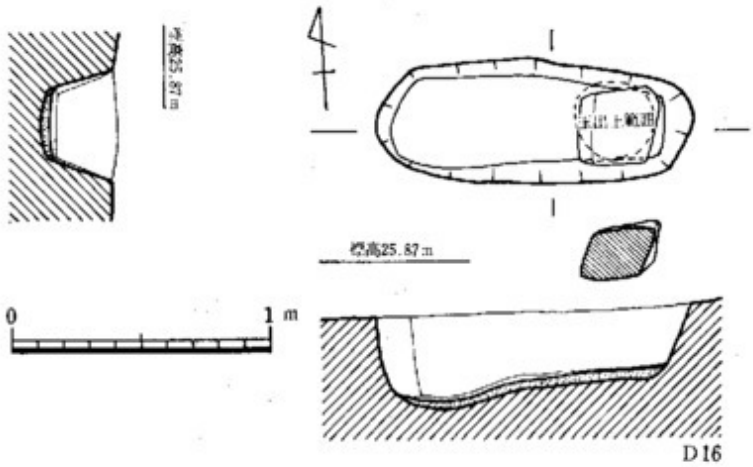


第36図　12号土壙墓実測図



第37図　1号石棺．13号土壙墓実測図



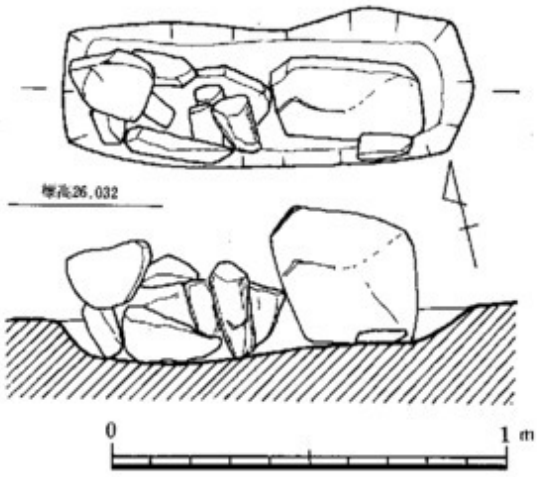


第38図　14号　15号土壙墓実測図

(3) **石組遺構**（第39図　図版36－(2)）

第II群の土壙墓群のほぼ中央部に存在する遺構で、発掘途中においては石棺墓、あるいは石蓋土壙墓の破壊されたものと考えたが、発掘後において、石組みの遺構であることを知った。石組みは、38cm×41cm×7cmと48cm×23cm×13cmの砂岩の板石2枚を中心に30cm×10cm程度の扁平礫11個をもって作られる。石組みは主軸をN－75度－Wの方向においた長軸105cm、短軸35cm、深さ10cmの長方形プランを有する土壙の中に前述の二枚の板石をたて、礫片を根固め状に置き、さらに数個の扁平礫は立てられた板石上にも積まれている。現存状態では板石はかなりの傾斜をもって立つが、元来は直立していたものと考えられる。石組遺構は土壙墓に伴う墓標的存在を示すと考える配石と比較した場合、当時の地表面にその大部分を露出している公算は大きいと思われる。なお、石組の遺構中あるいはその周辺部からの遺物の出土は皆無であ

った。この石組遺構の意味するところは種々考えられると思うが、位置する地点等からして、個別の土壙墓に伴う配石とは別の意味における群を示す墓標的存在と考える。



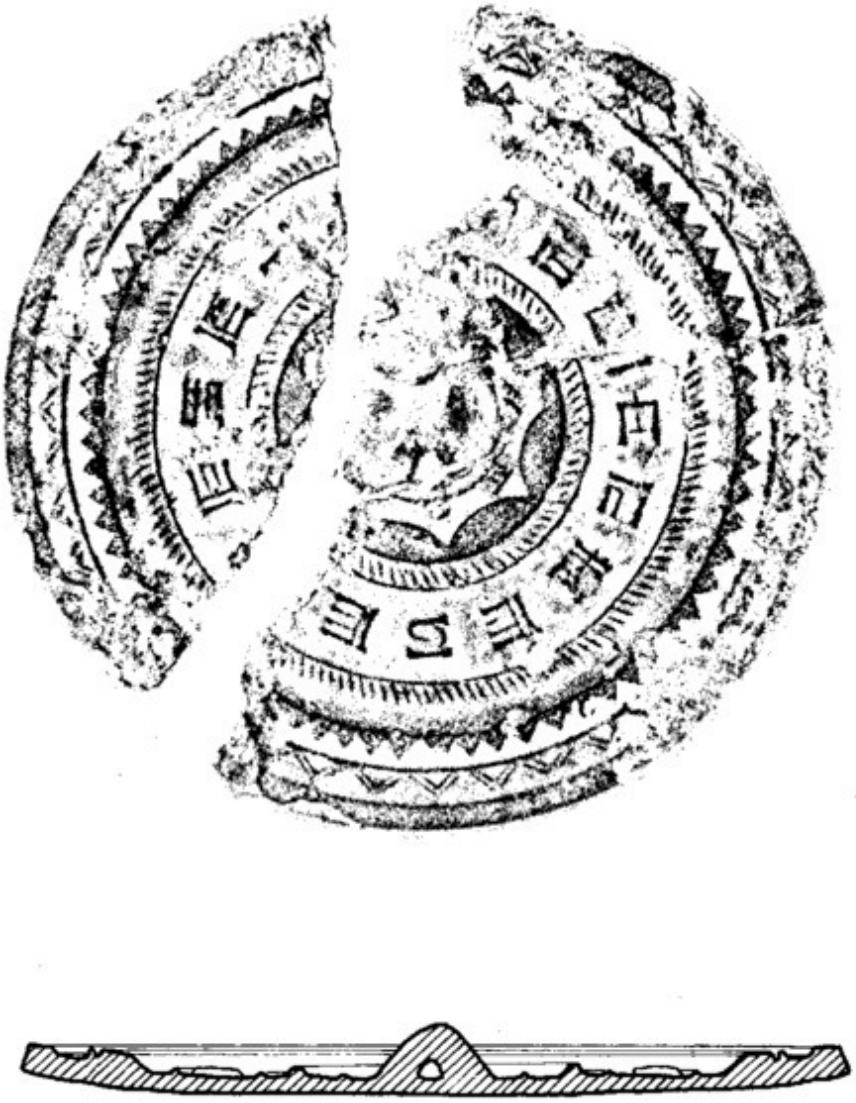
第39図　石組遺構実測図

(4)　溝状遺構（第22図）

土壙墓の分布する地域内に溝状遺構3本を確認した。

溝状遺構Ⅰは4、5号土壙墓の近くで屈曲し北方向に真すぐにのび10号土壙墓まで達する。4、5号土壙墓の一段目掘り込み、7号土壙墓の配石と土壙、10号土壙墓の配石を切断破壊する。溝幅80cm、深さ30cm、で埋土中より須恵器小片1点を検出した以外には遺物はない。溝状遺構Ⅱは、3号土壙墓の西から北方向に長さ5mのび、6号土壙墓に達する。溝幅60cm、深さ30cmを計る。遺物の出土はない。溝状遺構Ⅲは、6号土壙墓を一部切断し、北東方向に5mのびる溝で、幅30cm、深さ20cmを計る。溝状遺構Ⅰとつながる可能性もある。

いずれの溝状遺構についても、その性格を把握することはできなかった。



第40図　4 号土坑墓出土鏡拓影(実大)

5　遺物各説

(1) 鏡（第40図　図版1．38）

4号土壙墓の頭位付近の南側壁に鏡面を内にしてたてかけられた状態を示し、土壙蓋の崩落のために4片に割れる。一部欠落部があるが、ほぼ完形を保つ。

計測値は、面径10.6cm、鈕径 1.5cm、鈕高 0.7cm、縁の厚さ 0.4cm、縁幅 0.3cm、ソリ 0.3cmを示す。円座紐で紐頭はやや尖る。内区は内行花文帯（八花文）。斜行櫛歯文帯（ 0.3cm）、銘帯（1.15cm）、斜行櫛歯文帯（ 0.3cm）外区が鋸歯文帯（0.45cm）、複線山形文帯（0.45cm）平縁（ 0.3cm）に至る。

銘帯は一部欠落した部分があるが、各字間に「而」という字を入れ、

一内而青而以而□而明而光□□而日

の文が記される。内行花文明光鏡である。銘文は三津永田例とほぼ同様と考えられ、欠落部の文字はそれぞれ、召、而、夫にあたるものと考えられる。

鏡は両面共に錆化しているが、白銅質の漆黒色を呈して、鋳上り保存も良好な鏡である。重厚さを有している。

九州における明光鏡には次の諸例がある。

1 福岡県朝倉郡夜須町東小田字峰①

甕棺内よりの出土で、棺外に鉄矛一本を副葬する。面径 9.0cmを計る。

2 佐賀県神埼郡東背振村三津永田②

昭和27年、開墾に際し、三津永山田式土器とされる後期の石蓋単棺より採集されたもので面径 9.0cm。銘文は十六字よりなり

一内而青而以而召而明而光而夫而日

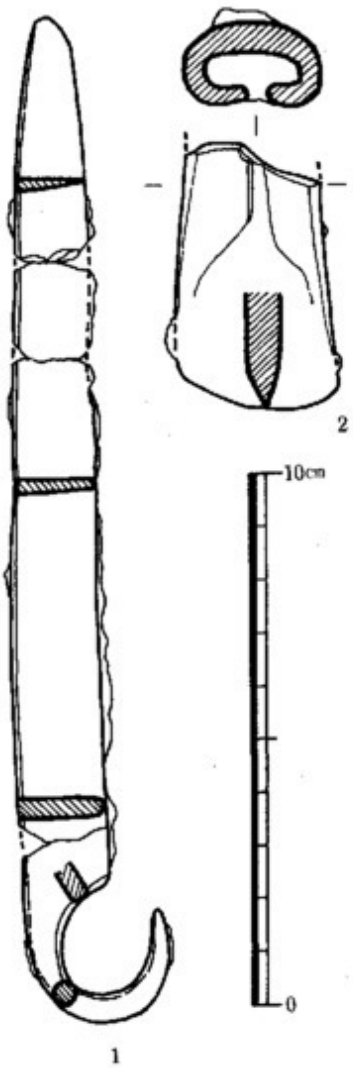
と判読される。

3 佐賀県神埼郡東背振村三津永田北方1km箱式石棺内よりの出土で、面径10.3cmを計る。銘文は次のとうりである。

内而青而以日明光而象夫而日之月而不□

4 佐賀県竹島郡北方町芦原字樺島③

箱式石棺内より、硬玉製勾玉3、碧玉製管玉36、素環頭刀子1振と共に出土した。面径10.3cmを計る。銘文は



第41図　鉄器実測図

次のとおりである。

内而清而以而□而昭而明而光而日而月而夫而

5 長崎県（対馬）櫛遺跡④

面径12.5cmを計る。銅剣、銅鉾各1を伴うとされるが、明きらかでない。

以上、九州における諸例は、時期決定のできる三津田例等からして後期に伴うものと考えられ、その分布は伊都、奴と目される中心地域をはずれた周辺地域において顕著である。

註　① 中山平次郎　「クリス形鉄剣及前漢式鏡の新資料」『考古学雑誌』第17巻第7号　1927年
② 七田忠志　「東背振村三津の石蓋甕棺と内行花文明光鏡」『佐賀県文化財調査報告書』第2集　1953年
金関丈夫　坪井清足、金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年
③ 小田富士雄　「佐賀県櫟島山石棺の出土遺物」『古代学研究』第51号　1968年
④ 水野清一　樋口隆康、岡崎敬「櫛住吉神社」『対馬』1953年

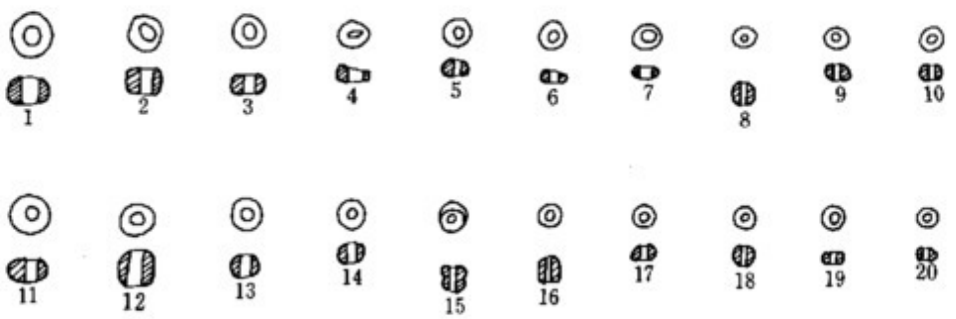
(2)素環頭刀子（第41図　図版38）

13号（石蓋）土壙墓の頭位部分より約45cmを離れた位置より出土したもので、同土壙墓の棺外副葬品とみられる。

全体にさびが著しいが、一部を欠失するのみでほぼ完形を保つ。刃と柄は共作りで、関は判然としない。やや内湾する傾向を示している。環頭は右廻りに造り出されるが尻と密接せず完全な環状をなさない。断面円形をなす。角棟を有し平造りである。切先はゆるやかに尖りメス状を呈する。

全長19.1cm、柄部9cm、刃部 7.3cm、刃幅 1.4cm、柄部幅 1.7cmを示す。環頭外径 2.8cm、内径 1.7cmをはかる。舶載品であろう。

素環頭刀子の出土例は多くなくその時期はかなり限定される。管見にふれた諸例を次にあげる。



第42図　15号土壙墓出土玉実測図

第4表　第15号土壙墓出土ガラス小玉計測表

単位 mm

No.	径	長	孔径	色彩	No.	径	長	孔径	色彩
1	3.65	3.75	0.9	コバルトブルー	47	4.20	3.30	1.8	コバルトブルー
2	3.90	3.10	0.8	〃	48	4.40	2.95	1.4	〃
3	3.95	3.45	1.2	〃	49	4.10	3.00	1.3	〃
4	3.50	3.20	1.3	〃	50	4.20	2.80	1.7	〃
5	3.65	2.15	1.1	〃	51	2.45	3.15	1.1	〃
6	3.80	2.40	1.1	〃	52	3.80	2.65	1.2	〃
7	3.40	3.10	0.9	〃	53	5.50	4.00	1.4	〃
8	3.50	2.60	1.4	〃	54	4.40	3.15	1.2	〃
9	3.65	3.10	0.9	〃	55	3.70	3.80	1.7	〃
10	3.85	2.70	0.8	〃	56	4.05	3.35	1.1	〃
11	3.60	2.60	0.9	〃	57	4.85	3.10	1.9	〃
12	4.40	3.00	1.4	〃	58	4.45	4.00	1.0	〃
13	3.20	2.00	0.9	〃	59	4.20	3.75	0.6	〃
14	3.80	2.20	1.1	〃	60	4.30	3.00	1.6	〃
15	3.85	3.35	0.6	〃	61	4.30	3.10	1.5	〃
16	4.00	2.20	1.0	〃	62	3.60	3.80	0.7	〃
17	3.80	2.20	0.9	〃	63	3.50	2.65	1.3	〃
18	3.00	1.70	0.8	〃	64	4.15	3.05	1.4	〃
19	3.80	3.35	1.2	〃	65	4.00	3.15	1.0	〃
20	4.00	2.65	1.1	〃	66	3.35	3.10	0.9	〃
21	3.85	3.20	0.9	〃	67	3.95	3.35	1.4	〃
22	3.50	2.25	1.0	〃	68	3.60	3.35	1.0	〃
23	3.60	2.90	0.9	〃	69	4.00	2.55	1.5	〃
24	3.95	3.35	0.9	〃	70	3.85	3.60	0.7	〃
25	3.50	1.55	0.9	〃	71	4.10	3.50	1.9	〃
26	4.15	3.20	1.1	〃	72	3.85	3.10	0.9	〃
27	3.50	2.15	1.0	〃	73	3.95	3.60	1.2	〃
28	3.90	2.65	0.7	〃	74	4.00	2.55	1.2	〃
29	3.60	2.20	1.0	〃	75	3.45	2.80	1.1	〃
30	2.50	2.10	1.1	〃	76	3.90	3.15	0.9	〃
31	4.20	3.10	1.6	〃	77	4.50	3.10	1.4	〃
32	4.55	4.20	1.3	〃	78	3.95	2.75	1.4	〃
33	4.40	3.25	1.0	〃	79	4.00	3.25	1.1	〃
34	4.05	3.55	1.6	〃	80	3.85	3.35	1.5	〃
35	4.35	3.15	1.3	〃	81	4.10	2.55	1.2	〃
36	3.85	3.10	1.4	〃	82	4.25	3.20	0.9	〃
37	4.00	2.45	1.3	〃	83	3.85	2.65	0.7	〃
38	4.15	3.00	0.9	〃	84	3.75	2.55	1.0	〃
39	3.80	2.50	1.4	〃	85	3.85	2.65	1.4	〃
40	3.55	2.70	0.6	〃	86	3.60	3.00	1.1	〃
41	3.95	2.45	0.9	〃	87	3.85	2.65	1.4	〃
42	4.15	3.30	0.8	〃	88	4.00	3.20	1.5	〃
43	3.90	2.00	1.1	〃	89	3.80	3.20	1.6	〃
44	3.90	3.95	1.5	〃	90	4.20	3.00	1.5	〃
45	4.20	2.90	1.3	〃	91	3.85	2.90	0.9	〃
46	3.15	3.30	1.3	〃	92	4.25	3.25	1.4	〃

No.	径	長	孔径	色彩	No.	径	長	孔径	色彩
93	4.05	3.00	1.4	コバルトブルー	141	3.70	2.30	1.7	コバルトブルー
94	3.05	3.35	1.2	〃	142	4.05	1.95	1.6	〃
95	4.00	3.05	1.4	〃	143	3.60	2.15	1.5	〃
96	3.85	2.90	1.6	〃	144	3.15	3.05	0.7	〃
97	3.90	3.10	1.1	〃	145	4.00	2.80	1.3	〃
98	3.60	3.95	1.0	〃	146	4.15	4.00	1.5	〃
99	3.55	3.20	1.4	〃	147	4.00	4.10	1.5	〃
100	3.95	3.35	1.1	〃	148	3.45	3.00	0.9	〃
101	4.35	3.00	1.5	〃	149	3.85	3.95	0.9	〃
102	4.00	2.70	1.9	〃	150	4.10	3.20	1.4	〃
103	3.75	2.85	1.3	〃	151	3.60	2.40	0.9	〃
104	4.55	3.35	2.1	〃	152	3.65	2.85	1.5	〃
105	4.20	2.55	1.8	〃	153	3.00	2.45	1.2	〃
106	3.25	2.95	0.9	〃	154	3.85	2.90	1.0	〃
107	3.75	2.95	1.4	〃	155	3.35	2.35	1.1	〃
108	4.15	2.65	1.9	〃	156	3.35	4.35	1.1	〃
109	3.65	2.95	1.1	〃	157	4.55	3.05	1.5	〃
110	3.95	3.00	0.8	〃	158	4.15	3.35	0.9	〃
111	3.75	2.55	1.1	〃	159	3.35	3.90	1.4	〃
112	3.95	3.15	2.1	〃	160	4.35	2.95	1.6	〃
113	2.85	2.80	0.8	〃	161	3.40	2.75	1.5	〃
114	3.50	3.60	1.0	〃	162	4.05	3.00	1.4	〃
115	3.85	2.25	1.7	〃	163	4.15	3.35	1.5	〃
116	4.00	2.15	1.6	〃	164	3.30	3.45	1.0	〃
117	4.10	3.20	1.4	〃	165	3.75	2.85	0.9	〃
118	3.95	2.70	1.8	〃	166	3.65	2.90	1.1	〃
119	4.40	2.75	1.5	〃	167	3.35	2.60	0.6	〃
120	4.35	2.45	1.9	〃	168	3.35	1.95	1.1	〃
121	3.45	1.85	1.8	〃	169	4.05	2.45	1.4	〃
122	4.10	2.70	2.0	〃	170	3.95	3.20	0.9	〃
123	4.00	2.40	1.5	〃	171	3.30	2.85	0.9	〃
124	3.35	2.15	1.0	〃	172	4.00	3.35	1.3	〃
125	4.50	3.10	1.9	〃	173	3.25	1.95	0.9	〃
126	3.15	2.15	0.9	〃	174	2.95	2.55	0.9	〃
127	2.95	2.45	1.0	〃	175	3.35	1.65	0.9	〃
128	3.80	2.40	1.3	〃	176	3.60	2.85	0.8	〃
129	3.85	2.55	1.5	〃	177	4.00	2.45	1.4	〃
130	3.45	2.60	0.9	〃	178	3.35	2.40	0.9	〃
131	3.75	2.65	1.6	〃	179	3.65	1.55	1.5	〃
132	3.20	3.35	0.9	〃	180	4.55	2.55	1.6	〃
133	3.60	2.85	1.0	〃	181	4.00	3.70	1.5	〃
134	3.75	2.40	1.4	〃	182	3.85	3.00	0.9	〃
135	3.85	3.50	1.0	〃	183	3.65	2.65	0.9	〃
136	3.90	2.35	1.4	〃	184	4.00	2.50	1.3	〃
137	3.80	2.45	1.8	〃	185	3.45	2.40	1.1	〃
138	3.35	2.50	1.5	〃	186	3.00	1.95	1.0	〃
139	3.85	2.20	1.2	〃	187	3.95	2.60	0.9	〃
140	3.55	2.15	0.9	〃	188	4.00	2.95	1.5	〃

No.	径	長	孔径	色彩	No.	径	長	孔径	色彩
189	3.90	3.00	1.3	コバルトブルー	237	4.15	3.00	1.8	コバルトブルー
190	4.00	2.95	1.2	〃	238	3.95	2.75	1.5	〃
191	3.65	2.30	1.4	〃	239	3.95	2.80	1.6	〃
192	3.75	2.35	1.4	〃	240	3.75	2.95	1.9	〃
193	3.35	2.35	1.2	〃	241	3.25	1.95	1.0	〃
194	4.55	3.90	1.8	〃	242	3.65	1.85	1.7	〃
195	4.10	3.35	1.4	〃	243	4.35	3.80	1.5	〃
196	3.25	1.95	1.4	〃	244	4.00	2.75	2.0	〃
197	3.75	2.65	0.9	〃	245	3.65	4.00	1.2	〃
198	4.20	3.25	1.5	〃	246	4.00	4.70	1.8	〃
199	4.25	3.35	1.4	〃	247	4.25	3.25	1.0	〃
200	4.45	3.55	1.6	〃	248	3.60	3.30	1.3	〃
201	4.45	3.85	1.0	〃	249	3.50	3.55	1.5	〃
202	4.30	3.25	1.4	〃	250	4.55	3.25	2.4	〃
203	5.25	3.30	2.0	〃	251	3.15	2.40	2.0	〃
204	3.35	2.35	1.2	〃	252	3.05	3.10	1.7	〃
205	3.95	2.85	1.1	〃	253	4.05	2.05	1.9	〃
206	4.85	3.75	1.6	〃	254	4.20	2.90	2.0	〃
207	4.70	3.50	1.7	〃	255	3.45	3.55	1.0	〃
208	4.40	3.00	2.2	〃	256	3.35	2.70	1.8	〃
209	4.45	4.35	1.6	〃	257	4.30	3.85	1.9	〃
210	3.45	1.60	1.3	〃	258	4.55	2.10	2.3	〃
211	4.25	3.65	1.9	〃	259	3.85	2.20	1.8	〃
212	4.00	3.85	1.8	〃	260	3.85	2.25	1.9	〃
213	4.45	3.35	1.5	〃	261	3.85	2.45	1.9	〃
214	4.55	3.85	2.3	〃	262	3.75	1.95	1.7	〃
215	4.00	3.90	1.6	〃	263	3.55	1.60	2.0	〃
216	5.35	4.35	2.0	〃	264	3.80	2.90	1.5	〃
217	4.45	3.05	1.4	〃	265	3.85	2.15	1.7	〃
218	4.35	2.95	1.6	〃	266	4.05	3.15	1.6	〃
219	3.95	3.65	1.5	〃	267	3.75	2.50	1.6	〃
220	4.60	3.85	1.9	〃	268	3.85	2.95	0.9	〃
221	4.00	3.95	1.8	〃	269	3.75	2.65	1.5	〃
222	4.30	3.85	1.9	〃	270	4.55	3.90	1.8	〃
223	4.00	3.25	1.0	〃	271	4.65	3.65	2.2	〃
224	3.75	2.65	1.5	〃	272	3.90	2.15	1.4	〃
225	4.35	3.85	1.6	〃	273	3.85	1.95	1.9	〃
226	4.00	2.90	1.6	〃	274	3.20	1.75	1.5	〃
227	3.90	2.85	1.5	〃	275	3.50	2.65	0.9	〃
228	3.95	2.90	1.8	〃	276	4.00	2.10	1.8	〃
229	3.75	2.65	1.5	〃	277	4.00	2.45	1.4	〃
230	4.45	3.35	2.0	〃	278	3.45	2.90	1.3	〃
231	4.35	2.85	1.5	〃	279	3.75	2.65	2.0	〃
232	4.00	2.95	1.7	〃	280	3.20	1.85	1.5	〃
233	4.00	2.85	1.8	〃	281	3.80	1.85	2.0	〃
234	3.95	2.65	1.5	〃	282	3.85	2.45	1.8	〃
235	3.65	3.00	1.9	〃	283	3.95	2.35	3.0	〃
236	4.00	2.45	1.7	〃	284	4.30	3.65	2.0	〃

No.	径	長	孔 径	色 彩	No.	径	長	孔 径	色 彩
285	5.40	3.45	2.3	コバルトブルー	333	3.65	3.00	0.9	コバルトブルー
286	3.95	3.55	1.8	〃	334	4.00	3.45	1.0	〃
287	3.65	1.90	1.7	〃	335	3.15	3.10	1.4	〃
288	3.55	2.10	1.6	〃	336	3.70	3.40	0.9	〃
289	4.00	2.75	1.9	〃	337	3.35	3.35	0.9	〃
290	3.55	2.65	1.6	〃	338	3.30	2.45	1.0	〃
291	3.75	2.30	1.8	〃	339	3.85	2.65	1.6	〃
292	4.55	3.50	1.9	〃	340	4.05	2.25	1.4	〃
293	4.15	2.15	1.9	〃	341	3.35	3.00	1.0	〃
294	4.40	3.60	1.7	〃	342	3.55	2.75	0.8	〃
295	3.70	2.15	1.4	〃	343	3.60	2.75	0.9	〃
296	3.55	1.55	1.9	〃	344	3.70	2.55	1.1	〃
297	3.85	3.00	1.3	〃	345	3.35	2.05	1.4	〃
298	4.30	3.35	1.6	〃	346	3.65	3.15	0.9	〃
299	3.85	2.90	1.6	〃	347	3.95	3.15	0.8	〃
300	4.00	3.10	1.2	〃	348	3.65	2.65	1.4	〃
301	4.30	3.35	1.2	〃	349	4.05	4.10	1.0	〃
302	3.85	3.00	2.1	〃	350	4.00	3.30	1.8	〃
303	4.30	3.15	1.6	〃	351	3.90	3.55	1.4	〃
304	3.90	3.45	1.7	〃	352	3.40	3.55	0.9	〃
305	3.95	2.85	1.0	〃	353	3.65	3.00	1.8	〃
306	3.85	3.10	1.1	〃	354	3.85	2.65	1.4	〃
307	3.35	3.25	1.1	〃	355	3.60	3.00	0.7	〃
308	4.15	2.75	1.9	〃	356	3.55	2.65	1.4	〃
309	4.25	3.10	0.8	〃	357	3.65	3.15	1.9	〃
310	3.85	2.65	1.6	〃	358	3.75	3.20	1.2	〃
311	3.80	3.00	0.9	〃	359	3.05	3.05	1.3	〃
312	3.90	2.45	1.0	〃	360	3.40	2.90	1.1	〃
313	3.35	2.35	0.9	〃	361	3.35	2.55	1.2	〃
314	3.75	2.90	1.0	〃	362	3.60	2.45	0.9	〃
315	3.60	2.30	1.6	〃	363	4.30	2.90	1.6	〃
316	3.75	2.65	1.9	〃	364	3.65	2.65	1.3	〃
317	4.00	3.35	1.6	〃	365	3.85	3.00	1.8	〃
318	3.35	2.80	1.6	〃	366	3.75	2.15	1.4	〃
319	3.80	2.65	1.7	〃	367	3.90	2.90	0.8	〃
320	3.55	3.65	1.0	〃	368	3.65	3.35	1.0	〃
321	4.30	3.80	0.9	〃	369	3.35	3.05	0.9	〃
322	3.75	2.55	0.8	〃	370	3.25	3.40	1.4	〃
323	4.00	3.00	1.6	〃	371	3.55	4.15	0.6	〃
324	3.35	2.40	0.9	〃	372	4.00	3.15	1.6	〃
325	3.35	2.40	1.3	〃	373	3.10	2.15	0.7	〃
326	3.35	3.05	1.4	〃	374	3.90	3.10	1.5	〃
327	4.05	2.95	1.4	〃	375	4.35	4.05	1.6	〃
328	4.00	3.00	1.6	〃	376	3.55	3.00	0.7	〃
329	4.05	3.35	0.7	〃	377	3.65	3.10	0.9	〃
330	3.55	2.55	0.8	〃	378	3.25	3.05	0.9	〃
331	3.65	3.05	0.9	〃	379	3.35	2.80	1.2	〃
332	3.75	3.00	1.6	〃	380	3.15	3.30	0.9	〃

No.	径	長	孔径	色彩	No.	径	長	孔径	色彩
381	3.45	3.00	1.0	コバルトブルー	429	3.65	2.35	1.4	コバルトブルー
382	3.25	3.05	1.4	〃	430	3.50	2.00	1.1	〃
383	3.25	3.15	0.9	〃	431	3.65	2.55	1.2	〃
384	3.60	2.25	1.4	〃	432	3.15	2.00	1.3	〃
385	3.65	3.20	1.0	〃	433	3.45	2.65	1.3	〃
386	3.35	2.60	1.1	〃	434	3.55	1.65	1.3	〃
387	3.85	2.20	1.9	〃	435	3.50	1.60	1.2	〃
388	3.65	3.15	0.7	〃	436	3.35	1.45	1.2	〃
389	3.35	2.45	1.0	〃	437	3.85	3.65	1.2	〃
390	3.25	2.35	0.4	〃	438	3.50	2.50	1.2	〃
391	3.40	2.55	1.0	〃	439	3.35	2.00	1.0	〃
392	3.60	3.30	0.7	〃	440	3.15	2.45	1.0	〃
393	3.25	1.85	0.9	〃	441	3.55	2.25	1.4	〃
394	3.45	4.05	1.0	〃	442	3.10	2.00	0.9	〃
395	4.00	2.05	1.8	〃	443	3.35	2.10	1.1	〃
396	3.00	2.35	0.6	〃	444	3.45	2.45	1.2	〃
397	4.50	2.40	1.3	〃	445	4.00	2.65	1.3	〃
398	3.35	3.95	0.9	〃	446	3.95	3.25	1.3	〃
399	3.65	2.40	1.4	〃	447	4.00	3.90	1.2	〃
400	3.35	1.65	1.1	〃	448	3.35	2.05	1.1	〃
401	3.85	2.95	1.1	〃	449	3.45	2.70	1.1	〃
402	3.85	3.60	1.0	〃	450	3.25	2.40	1.0	〃
403	3.50	2.10	1.3	〃	451	3.35	1.75	1.0	〃
404	3.10	1.50	0.9	〃	452	3.55	2.45	1.1	〃
405	3.45	2.25	1.0	〃	453	3.85	3.30	0.9	〃
406	3.55	2.20	1.4	〃	454	3.55	2.55	1.2	〃
407	3.55	2.40	1.2	〃	455	3.60	2.95	1.2	〃
408	3.45	2.60	1.2	〃	456	3.60	3.85	1.1	〃
409	3.55	2.05	1.2	〃	457	3.20	2.35	1.2	〃
410	2.85	2.35	1.1	〃	458	3.30	2.15	1.1	〃
411	3.45	2.00	1.0	〃	459	3.35	2.65	1.2	〃
412	3.50	2.35	1.4	〃	460	3.15	1.95	0.8	〃
413	3.25	2.90	1.2	〃	461	3.60	2.90	0.9	〃
414	3.50	2.65	1.4	〃	462	3.20	2.30	1.0	〃
415	3.35	2.85	0.7	〃	463	3.20	3.20	1.1	〃
416	3.35	3.45	1.0	〃	464	3.35	2.20	1.0	〃
417	3.35	2.65	0.9	〃	465	3.25	2.35	1.0	〃
418	3.55	2.50	1.1	〃	466	3.60	2.40	0.9	〃
419	3.75	2.55	1.4	〃	467	3.15	2.40	1.5	〃
420	3.45	1.75	1.3	〃	468	3.35	2.40	1.2	〃
421	3.10	2.00	0.9	〃	469	3.35	2.35	1.2	〃
422	4.30	2.40	1.5	〃	470	3.55	2.45	0.9	〃
423	3.85	2.75	1.4	〃	471	2.95	3.45	0.9	〃
424	4.15	3.15	2.2	〃	472	3.45	2.40	1.0	〃
425	3.70	2.40	1.0	〃	473	3.20	2.55	1.4	〃
426	3.65	2.40	1.1	〃	474	3.35	1.95	1.3	〃
427	3.90	3.35	0.7	〃	475	2.90	2.40	0.9	〃
428	3.75	3.45	0.8	〃	476	3.20	2.20	1.0	〃

No.	径	長	孔径	色彩	No.	径	長	孔径	色彩
477	3.35	3.20	1.2	コバルトブルー	508	3.00	2.75	0.7	コバルトブルー
478	2.75	2.60	0.8	〃	509	3.05	2.20	0.8	〃
479	3.65	3.35	1.0	〃	510	3.15	2.15	1.1	〃
480	3.25	2.85	1.1	〃	511	2.85	2.80	1.0	〃
481	3.45	2.85	1.1	〃	512	3.35	2.20	1.0	〃
482	3.35	2.20	0.9	〃	513	3.00	2.35	1.0	〃
483	3.45	2.45	0.9	〃	514	3.10	2.40	0.9	〃
484	3.15	2.00	0.7	〃	515	3.00	2.45	1.1	〃
485	3.15	2.80	1.1	〃	516	3.10	2.25	1.3	〃
486	3.25	2.55	1.1	〃	517	3.10	2.85	1.0	〃
487	3.05	2.70	1.5	〃	518	3.35	2.05	0.8	〃
488	3.20	2.65	0.9	〃	519	3.10	2.35	0.7	〃
489	2.95	3.35	0.9	〃	520	3.05	2.60	1.0	〃
490	3.55	2.75	1.2	〃	521	3.20	2.25	1.0	〃
491	3.35	2.70	1.0	〃	522	3.45	2.00	0.9	〃
492	3.35	2.20	1.1	〃	523	2.95	2.90	1.1	〃
493	2.95	2.35	1.0	〃	524	3.00	1.95	0.8	〃
494	3.00	3.25	1.0	〃	525	3.00	2.35	0.9	〃
495	3.00	1.95	1.0	〃	526	3.10	2.35	1.1	〃
496	3.10	3.00	0.9	〃	527	2.95	2.55	1.1	〃
497	3.45	3.35	0.8	〃	528	2.70	2.65	0.6	〃
498	3.20	1.80	1.1	〃	529	4.80	3.80	1.8	グリーン
499	3.15	1.50	1.2	〃	530	4.05	4.00	1.2	〃
500	3.20	2.30	1.3	〃	531	4.35	3.05	1.6	〃
501	3.25	2.00	1.0	〃	532	4.40	3.65	2.2	〃
502	3.25	2.35	1.1	〃	533	4.35	3.20	1.9	〃
503	3.00	2.45	0.9	〃	534	3.40	3.60	0.9	コバルトブルー
504	3.10	2.55	0.9	〃	535	5.20	3.95	1.6	〃
505	3.45	3.35	0.9	〃	536	3.45	3.55	0.5	〃
506	3.50	2.45	0.8	〃					
507	3.25	2.65	1.2	〃	平均値	3.72	2.82	1.3	

1 福岡県飯塚市立岩遺跡①

弥生中期後半の第28号甕棺に前漢鏡1、ガラス管玉 570、ガラス塞杆5、棗玉と共に素環頭子1の出土がある。同例は全長17.9cm、刃長 8.8cmをはかる。

2 福岡県中間市上り立遺跡②

6号石棺の副葬遺物である。女性成人（30才代）の腰部と考えられる部位よりの出土である。刀子は全長21cm、刃部約11.5cmをはかる。報告書は同墳墓群を弥生時代中期後半から後期中葉に及ぶ時期に比定している。

3 佐賀県杵島郡北方町芦原樺島③

弥生時代後期初頭と考えられる箱式石棺より内行花文明光鏡1、硬玉製勾玉3、管玉36と共

に副葬されていたもので、全長16.7cm、刃長12cmをはかる。

註　① 児島隆人、森貞次郎、渡辺正気、岡崎敬、藤田等「七面の前漢鏡を出した飯塚市立岩鼻横穴遺跡調査概報」『日本考古学協会昭和38年度大会発表要旨』 1963年
② 永井昌文、小田富士雄、橋口達也「福岡県中間市上り立墳墓群調査報告」『九州考古学』33、34号 1968年
③ 木下之治『勇猛山古墳群一付樺島山遺跡』佐賀県教育委員会 1967年
小田富士雄「佐賀県樺島山石棺の出土遺物」『古代学研究』51号 1963年

(3) **鉄斧**（第41図　図版38）

6号土壙墓付近より出土したもので、6号土壙墓の棺外副葬品としての可能性が強い。発掘時において一部を欠損した。さびが著しかったが、保存状態は極めて良好であった。斧の刃部は幅 3.1cm、厚さ 0.7cmを計り、使いべりによるものか斜刃を呈している、刃部から袋部にかけて幅は狭くなり現存の袋部幅は 2.5cmを計る、袋部の厚さは刃部よりやや薄く鉄板の両端を折り返して袋部をつくったものである。現存長 5.0cm。形態、大きさなどは弥生時代遺跡出土の鉄斧と共通する。

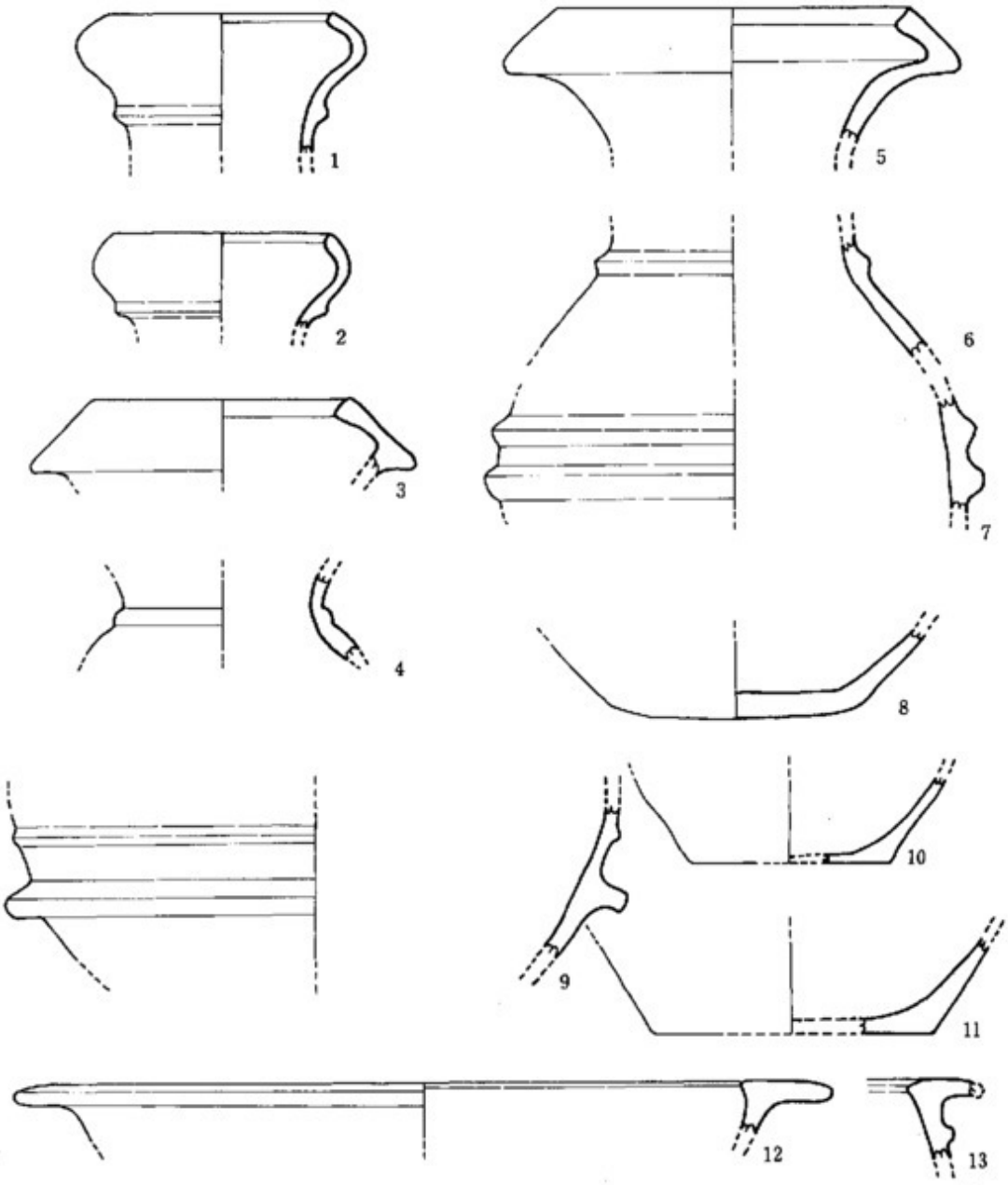
(4) **ガラス小玉**（第42図　図版2－(2)）

15号土壙墓の頭位部分に出土したもので、本来は埋葬者の首に三重にまわしてかけられていたものであろう。総数 540点を数える。ガラス小玉はグリーンを呈するもの5個を除いて他はすべてがコバルトブルーを呈する。形態、大きさは不揃いで、種々のものが認められる。径は5.40mmを最大とし、最小は2.45mmをはかる。長さは最大4.70mm、最小1.45mmをはかる。 536個の平均値は、3.72mm×2.82mmを示す。形は第42図の15に示すものを除いて他は普通のものである。グリーンの5個は共に粒がそろい大き目のものである。各々の計測値については第4表に示した。

(5) **弥生式土器**（43、44図、図版39）

弥生式土器は主に土壙墓周辺の堆積土中より発見したもので、一部、土壙内の埋土中より検出したものもある。

第43図の1、2は共に袋状口縁をなす壺形土器の口縁部破片である。口縁部直下に断面三角形をなすはりつけ突帯一条をめぐらす。保存状態が悪く表面の剥離が多い。胎土には若干の石英砂を含むが精良である。焼成良好、1は赤褐色、2は黄褐色を呈する。本来は丹塗りされていた可能性が大きい。1は口径9cm、2は9cmを計る。13号土壙墓付近の暗褐色土層（下より2番目）よりの出土である。第43図3、5～8は後期前半に比定される壺形土器である。5～8は同一個体と思われる。3、5の口縁部は袋状口縁がさらに著しく変化、発展したもので、明瞭な稜線を有する。器形は5～8でみられる如く、頸部に断面三角形のはりつけ突帯一条、胴部に断面三角形の突帯二条をめぐらす。胴部の張りはあまりない。底部は、丸底に近くなった



第43図　B地点出土弥生式土器実測図Ⅰ

平底をなす。胎土は若干の石英砂を混入するが良好である。焼成はよいが、保存状態が悪く表面の剝離が著しい。黄褐色を呈する。3は口径14cm、5は口径14.5cmを計る。15号土壙墓付近の地山に密着して出土した。同一個体と考えられる破片は多いが、接着は困難である。

第43図4は1号（石蓋）土壙墓の埋土中より出土した壺形土器の頸部小破片である。頸部に断面カマボコ状の突帯一条をめぐらす。胎土に石英砂を含む。焼成良好、白黄色を呈する。頸部径8cmを計る。

第43図9も1、2と近接して出土した、同一個体と考えられるものは多いが、保存状態が悪

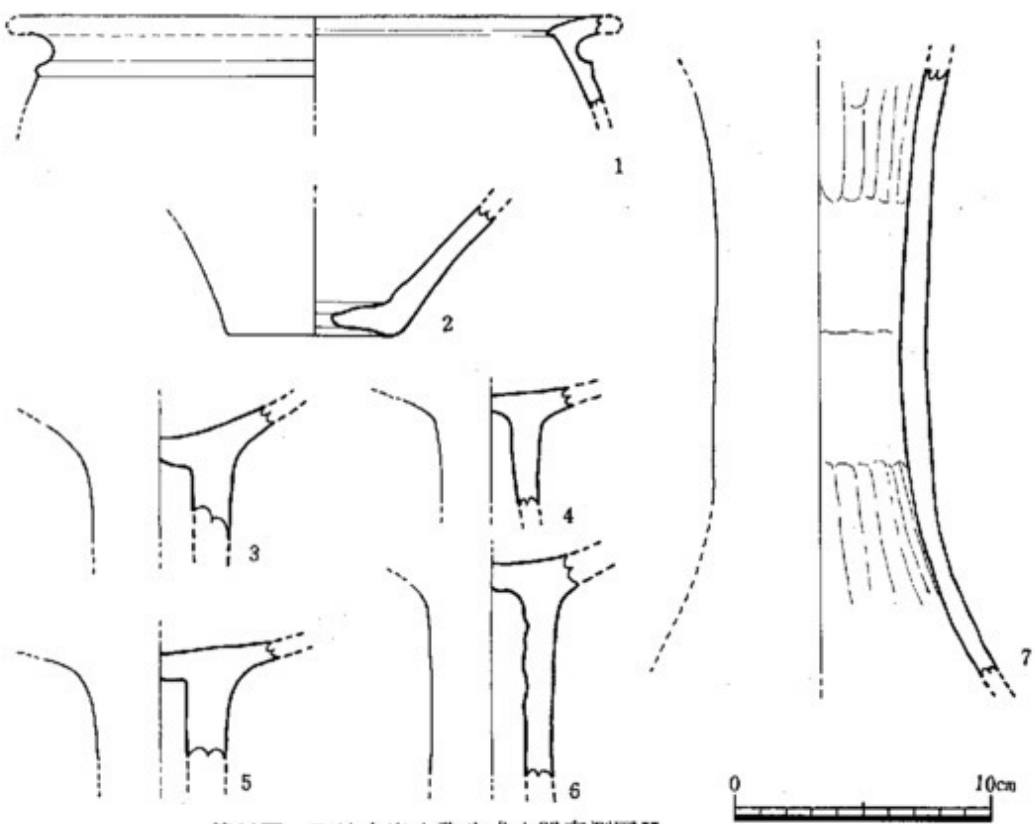
く接合復原は困難である。胎土は極めて精良で、一部丹塗りの痕跡が認められる。壺形土器の胴部下半部の破片と考えられ、断面三角形の低い突帯と断面コの字形をなす突帯の二条をめぐらす。赤褐色を呈する。焼成はよくない。

第43図10、11は共に底部破片で、甕棺墓に近い西斜面の堆積土中より出土したものである。保存状態は悪く、表面の剥離が著しい。胎土中に若干の石英砂を含む。色調は褐色を呈する。10は底径 8.4cm、11は底径11.8cmを計る。

第43図12は10号土壙墓の二段目掘り込みの埋土中より検出した高坏形土器の口縁部小破片である。口縁部は水平になり口径34cmを計る。胎土には若干の石英砂を含むが極めて精良で、本来は丹塗りがなされたのではないかと考えられる。赤褐色を呈する。中期末の土器であろう。

第43図13は3号甕棺墓の棺内より検出したもので他からの流入と考えられる。小形の甕形土器の口縁部小片で、口縁直下に断面M字状の突帯一条をめぐらす。胎土、焼成は良好で、外面には丹塗りが認められる。完形品としては第2図の甕棺の如くなるものであろう。周辺に埋置された小児用甕棺墓か、祭祀用の土器とみることができる。

第44図1、2は同一個体の破片と考えられる口縁部と底部である。14号土壙墓の置石によっ



第44図　B地点出土弥生式土器実測図II

て流れをとめられたような状態で置石の横から出土した。1は口縁部がやや立ちあがる逆L字形をなし口縁直下に断面M字形（？）の突帯一条をめぐらす。胴はかなり張るものと考えられるが、下半を欠失する。2の底部はややあげ底状をなし、焼成後外より穿孔される。胎土は精良で丹塗りをした土器の可能性が強いが保存状態が不良で表面の剥離が著しいために判別は不可能である。本来は甕棺墓周辺に存在した小児用の甕棺墓か祭祀用の土器とみられる。推定口径24cm、底径 6.7cmを計る。

第44図3～6は高坏形土器の脚部から坏部にかけた破片である。共にその保存状態は悪く表面の剥離が著しい。胎土には若干の石英砂を混入するが精良で丹塗りがなされていた可能性が強い。13号土壙墓周辺の地山に密着した状態で出土した。

第44図7は暗褐色土層内よりの出土で、第43図1、2とあまり離れない位置よりの出土である。比較的よく形を残しているが、下端部と上半部を欠失している。大きさなどより筒形土器の脚部に相当する部分であろうと思われる。現存高23.8cm、胴径 8.4cmを計る。胎土には若干の石英砂を含むが、きわめて精良で一部丹塗りの痕跡をとどめる。

筒形土器は現在26遺跡に出土例が知られ、その分布範囲は北部九州の甕棺地帯と一致し、筒形土器のつくられ用いられた時期は中期後半に限定されるという。その使用は出土地との関連で祭祀用土器の一角を構成していたとされる。①

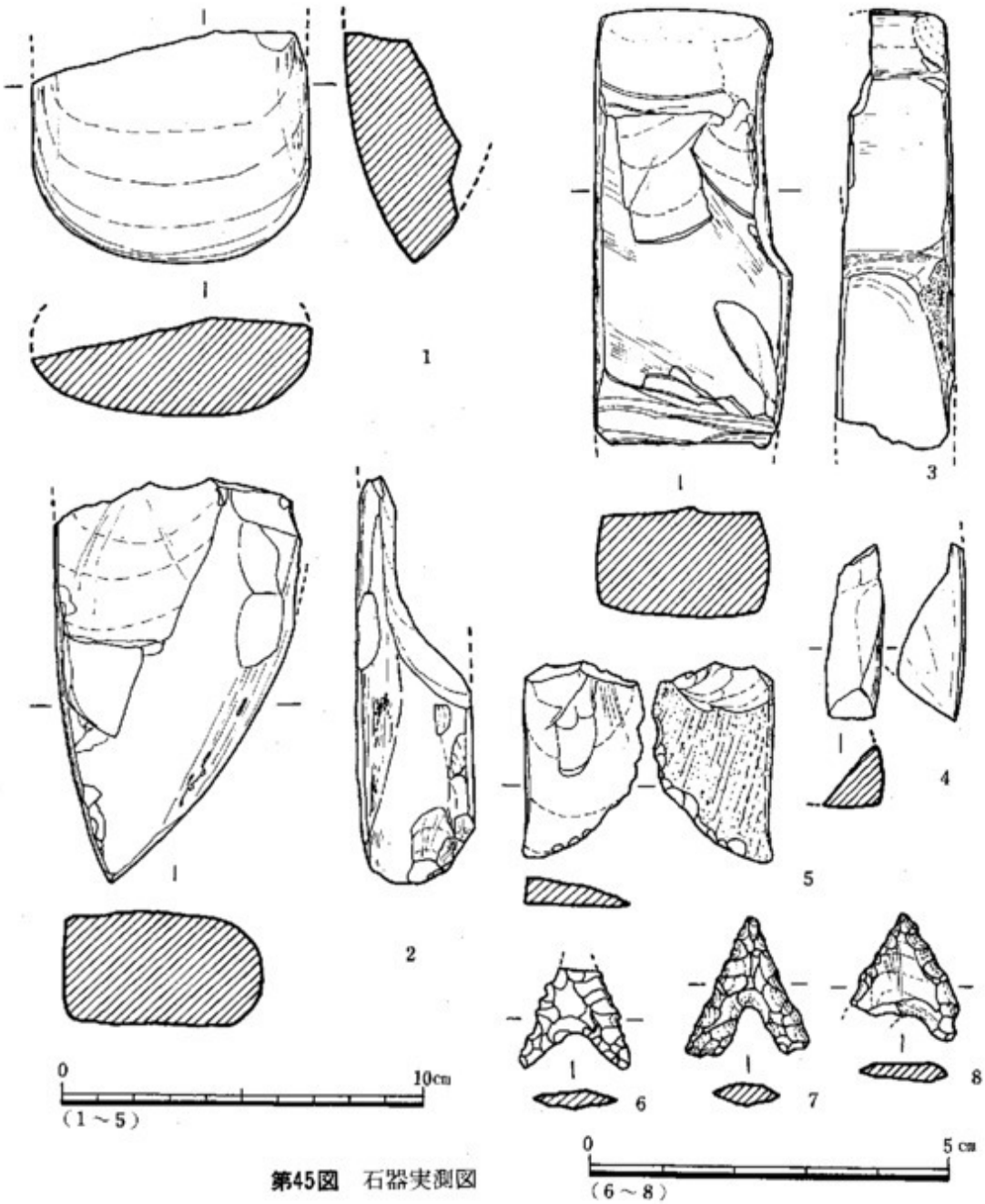
註　① 高倉洋彰「弥生時代祭祀の一形態－甕棺墓地における土器祭祀を中心として－」『古代文化』第25巻第1号　1973年

(6) 石器（第45図　図版40図）

土器と同様に土壙墓上に堆積する暗褐色土層中より出土したものであるが、その範囲は広く散在的であった。多くは甕棺墓北西部の斜面からの出土である。石鏃等の小さいものは斜面の下方に多く6号土壙墓付近から出土している。土器との関係で把握することはできなかったが、甕棺墓より連なる丘陵上より流入してきたものと思われる。出土石器は石斧3点、柱状片刃石斧3点、石鏃2点でその数は少ない。

1は蛤刃を有する磨製石斧の刃部破片である。表面は風化が著しく、製作痕、使用痕の観察はできない。刃部は弧状を呈し鋭い。現存長 6.6cm、幅7.7cmを計る。玄武岩質の石材を素材とするが、今山産のものとはやや石材に相違がみられる。他に刃部のみを残す破片2点がある。1点は玄武岩、他の1点は頁岩を素材とする。使用によって破損した破片と考えられる。製作にあたっては敲打の後に研磨されたことがわかる。

2は頁岩を素材として作られた柱状片刃石斧の刃部破片である。現存長11.4cm、幅7cm、厚さ3.2cmを計る。断面形は長方形をなす。推定復原すれば30cm程度の大形品となる。全体に風化が著しいが保存状態はよく製作過程を明らかにできる。整形のため剥離後、敲打し研磨したも



第45図　石器実測図

ので全体に研磨される。刃部は使用のためについたと考えられる刃つぶれがある。

3も2と同様に大形の柱状片刃石斧の頭部破片である。頁岩を素材とし、全体によく研磨される。頭部に抉入が施される。現存長12.3cm、幅 55 cm、厚 3.1cmを計り断面形は長方形をなす。推定復原すればかなりの大形品となる。2、3共に柱状片刃石斧の中では最も大形品の部類にはいる。現在までの出土例は少く、今後注意されなければなるまい。

4は頁岩を素材として作られた柱状片刃石斧の刃部破片である。全体に風化が著しく表面の剝

離がみられるが、本来は美しく研磨されていたことがうかがえる。刃部は鋭い。現存長5㎝、現存幅 1.6㎝を計る。

1～4のいずれの石斧も完形を保つことなく3を除いてはすべてが刃部破片である。2の刃部に認められる使用痕からすれば、ほとんどが使用に際しての破損と考えられる。出土土器もかなりあるが、前述した如く、そのほとんどが胎土が精良で、一部丹塗りの認められるものもあり、祭祀用の土器と考え、石器との関係は把握できなかった。しかし、収穫具である石庖丁等の出土がなく、工具類であることは、甕棺墓ないしは土壙墓の木蓋製作にあたって遺存した可能性もある。今後の研究をまちたい。

6はサヌカイトを素材とした石鏃で先端部を欠く。刃部は剝離によって一部鋸歯状をなすが製作にあたっては粗雑である。主要剝離面を残す。現存長 1.4㎝をはかる。

8は黒曜石を素材とした石鏃で、主要剝離面を大きく残し、刃部と基部に細部加工を加えたものである。長さ 1.8㎝を計る。

第Ⅵ章　まとめ――B地点土壙墓の年代――

(1) 配石について

B地点の土壙墓群、石棺墓16基のうち、3号、4号、7号、10号、12号、14号、16号の土壙墓に配石および置石の存在が認められる。配石には円形、コの字形、L字形、一の字形に置かれるもの等、配石の状態にバラエティーがみられるが、土壙墓の現状位置が斜面を形成し、一段目掘り込みの低い部分をほとんど削平されていることを考えれば、本来は、12号、10号土壙墓の如く、円形あるいはコの字もしくは方形に囲まれていたものと考えることができる。

本遺跡における土壙墓の形成過程について、一般的な例をとれば、①1段目掘り込み部の設定および掘り込み作業。②2段目掘り込みの設定と掘り込み作業、③遺体安置、④木蓋その他の蓋による閉塞および粘土目張り。⑤1段目掘り込みの埋めもどし、⑥配石および置石。という順序をたどることができる。⑤の段階においては、掘り起した土と埋めもどしの関係によって埋葬当時においては小さなマウンドを形成していたことは予想できる。また⑤、⑥の関係を示す例として、4号土壙墓の配石の一部が一段目掘り込み内部に存在することや、7号土壙墓の配石の一辺が棺上を横断し、棺蓋の崩落に伴い沈下すること、12号土壙墓の配石が1段目掘り込み内にありわずかに沈下していることからして容易に肯首できる。前述した如く、配石は本来の姿をたもっていないと考えることができるが、置石、配石、置石と配石を併用したもの等に分類することが可能である。その違いは家族その他の相違を示すと考えることもできるが、確証はない。土壙墓も分布の違いによりその作り方の相違が認められる。

なお、配石の在り方は、3号、4号の如く1段目掘り込みの土壙縁に位置するものもあるが、7号、13号の如く掘り方と関係なく配石がなされ、置石の存在は、7号、14号、15号は例外なく埋葬遺体の頭位と考えられる部分に存在する。墓域の設定、個人墳墓の誇示よりはむしろ墓標としての存在意識が強く感じられる。土壙墓は相互に切り合うことはない。(1、2号土壙墓は切り合うが、1段目掘り込みの切りあい関係である。) 4、5号土壙墓の近接関係（溝によって両者の関係は明らかにできないが現状よりの復原では、接する状態を示す。）は配石、置石の存在が墓標的役割を果し、当時においては地表面に露出していたと考えることができる。

現在までに、このような墓標的な存在を示す例としては支石墓等の存在が指摘されていたが、近年土壙墓に伴う配石例も増加しつつある。福岡県内における諸例には次のものがある。

①飯塚市川島柑木山遺跡[1]

発見された土壙墓は9基でそのうちの3基に配石が認められる。1号土壙墓は墓壙の西側に4個の石を並べ、壙の中央やや東よりに40cm角の石一個を置く。2号土壙墓は1.5×1mのほぼ方形に石を配し、その中央部にやや大きめの石一個をおいている。3号土壙墓は中央より南よりに石を1個置いたものである。これらの土壙墓は溝と重複して作られ、溝縁に24個の花崗岩角

礫を配し、報告者は墓域を示すものと考えている。墓坑墓に伴う遺物の発見はないが、弥生時代中期中葉まで遡らせることができるとしている。

②嘉穂郡穂波町大字椿日上遺跡②

8基の土坑墓が調査され、うち第Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ号土坑墓に角礫が配置される。Ⅰ、Ⅱ号土坑墓の配石は旧地表中にあり標識としての機能を持っていたと認められている。他に2ヶ所の列石の存在が確認され、下に土坑墓の存在があることは想像するに難くないとされる。土坑中より副葬品等の出土はないが、報告書は中期初頭をそれほど降らない時期のものと考えている。なお、Ⅱ号土坑墓は木棺墓である。

③筑紫郡太宰府町大字太宰府江辻田所在遺跡③

地上標式のある土坑墓が検出されているという。

なお、弥生時代の配石墓については藤田等氏の分類がある。氏の分類に従えば、宝満尾B地点における配石を伴う土坑墓は、4号、7号、10号、12号土坑墓が列石墓、14、15号土坑墓が置石墓となる。

註 ① 浜田信也 「甘木山遺跡」『嘉穂地方史—先史編—』 1973年
② 酒井仁夫 「上坑墓」『口上遺跡』福岡県文化財調査報告書第48集 1971年
③ 註②に同じ
④ 藤田 等「弥生時代の配石墓について」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念論文集 1968年

(2) 鏡について

4号土坑墓内より出土した内行花文明光鏡は、その製作年代を把握することによって土坑墓の上限を限定し、土坑墓の時期比定に大きな指針を与えるものと思う。九州地方における内行花文明光鏡は前にあげたが、いずれも内区は内行花文帯、斜行櫛歯文帯、銘帯、斜行櫛歯文帯となり、幅広い平縁へと続く。内区の構成は本例と同様であるが本例が他例と相異する点は外区（鋸歯文帯、複線山形文帯）の構成である。鏡式としては前漢鏡であるが、背文構成は後漢鏡にきわめて類似する。本例と類似するものとして次の諸例が存在する。

①平壌府石巌里付近の楽浪古墳出土例①

径13.1cmを計り、背文は内区は四葉座鈕を中心に、一圏をめぐらし、内行花文帯、斜行櫛歯文帯、銘帯、斜行櫛歯文帯となり、外区は鋸歯文帯、複線山形文帯、平縁へと続く。銘文は「居摂元年自有真、家當大富羅常有陳、口之治吏為貴人、夫妻相喜日益親善」と判読される。紀年の居摂元年はA.D.6年に相当する。

②大阪市立博物館蔵の鋸歯文縁明光鏡②

背文の構成は宝満尾例とほぼ同一である。銘文は「内而青而以而昭而明而□而」と判読できる。出土地不詳。

③洛阳西郊汉墓３０３１号墓出土例③

昭明鏡で、背文は内区が円座鈕を中心に、一圏をめぐら斜行櫛歯文帯、銘帯、斜行櫛歯文帯となり、外区は一圏をめぐらし、複線山形文帯、平縁へと続く。銘文は「内而清而以而□而明而光而夫而日而月而」と判読される。面径 9.7cm、貨泉12枚、大泉五十の王莽銭等と共に出土している。本例は内行花文をもっていない。

以上、背文の類似した諸例をあげたが、①例における紀年銘の居摂元年（A．D．6年）や③例のように貨泉、大泉五十等の王莽時代の貨幣を伴うことは、宝満尾第4号土壙墓出土の内行花文明光鏡の製作年代を王莽を前後する年代においてよいものと考える。

註　① 『漢三国六朝紀年鏡図説』
② 大阪市立博物館『大阪市立博物館蔵品目録』 1970年
③ 中国科学院考古研究所洛阳发掘队「洛阳西郊汉墓发掘报告」『考古学報』2 1963年

(3) ガラス小玉

15号土壙墓において発見したもので、その総数は 540個を数える。本来は埋葬者の首に三重にまわした状態で埋葬されたものと考えられ一部にその痕跡を示していた。連結した玉の長さは 139.7cmをはかり、色は5個のグリーンの小玉を除いて、他はすべてコバルトブルーを呈する。

弥生時代のガラス製小玉の出土は散発的な発見例はあるが、一括した副葬品としての発見は極めて少い。以下その例をあげてみよう。

①長崎県上県郡上対馬町古里塔ノ首遺跡①
②長崎県下県郡豊玉村佐保黒橡鼻①
③福岡県糸島郡前原平原②

いずれも、墳墓の副葬品で、色はコバルトブルーを呈し、宝満尾例と類似している。特に②の黒橡鼻例は4～5個のグリーンの玉を混じえ、大きさその他もきわめて近似している。石棺内よりの出土で、馬鐸、鍑先金具、銅釧、銅管、後期初頭の土器を伴う。

註　① 九州大学考古学研究室編『対馬』長崎県文化財調査報告書第　集　1974年
② 原田大六『実在した神話』学生社　1966年

(4) 土器出土状態

1号（石蓋）土壙墓埋土中より壺形土器頸部小片（第43図4）、10号土壙墓埋土中より高坏口縁部小片（第43図12）の出土があり、また、土壙墓を覆う堆積土中より若干の土器、石器の出土がある。それらは即、土壙墓の年代を示すものとして把握できなかったが、分析することによって土壙墓の年代を知る手がかりとなるものと思われる。土壙墓上の堆積土は厚く、土器はその下半部において多く検出した。

第44図1、2は、第14号土壙墓の置石横よりの出土で石によって流れを留められたような状態を示す。2の底部には焼成後の穿孔が認められ、上の甕棺墓地より流れ込んだものと思われる。第44図の7、第43図の1、2、9、10、11は13号土壙墓周辺から甕棺にかけ出土するが多くは谷あいの最も低い部分に堆積した暗褐色土層中に含まれる。第44図7は筒形土器脚部と考えられ、また第43図9には丹塗りが一部認められる。出土土器は保存状態が悪く表面を剥離しているが胎土はきわめて精良で、本来は丹塗り土器ではないかと考えられ、共に甕棺墓に伴う祭祀土器と考えることができよう。筒形土器の出土例の多くが、甕棺墓地に伴うこともその傍証となろう。なお、3号甕棺内よりも丹塗りの甕形土器口縁部片1点（第44図13）も出土している。①

第43図3、5～8、第44図3～6は前述土器よりも下層にあり、地山に密着する。分布範囲もあまり広くなく、13号土壙墓周辺に限られる。高坏、壺が認められるが、甕形土器の存在はない。中期後半の祭祀用土器と考える土器よりも下層にあり、その分布は現位置をあまり動いていないものと考えられる。同一破片はかなり存在するが、保存状態が悪く接合はできない。表面が剥離するために観察はできないが、胎土は精良なものである。土壙墓に伴う祭祀用の土器と考えることも可能である。後期前半の土器が主体である。

後期の墳墓に伴う祭祀用土器の調査例は少いが、福岡市西区大字下長尾字隈に所在する小笹遺跡では、6基の石蓋土壙墓と一基の土壙墓が調査され、土壙墓横より楕円形ピットに壺2、器台2、甕11よりなる祭祀遺構の調査がある。②

註　① 高倉洋彰「弥生時代祭祀の一形態―甕棺墓地における土器祭祀を中心として―」『古代文化』第25巻第1号　1973年

② 柳田純孝　柳沢一男『小笹遺跡発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集　1973年

(5) 土壙墓群の年代

以上、土壙墓における配石、副葬品、土器出土状態について類例をもって検討を加えた。4号土壙墓の鏡はその製作年代は王莽前後を遡らず、九州における内行花文明光鏡は後期前半の副葬例が一般的である。素環頭刀子も中期後半から後期前半に限定され、ガラス小玉の例も後期前半のものに類似する。土壙墓周辺出土の祭祀土器と考えられる土器も後期前半であり、本土壙墓群は後期前半に比定できるものと考える。なお土壙墓については木棺ではないかと精査したがその痕跡は認められなかった。

第5表　B地点墳墓一覧表

甕棺墓

No.	方　向	傾斜	形　状	墓　壙	時期	備　考
1	N-35°-E	41 度	接口(甕+鉢)		中期後半	棺内より勾玉
2	N-39°-E	31.5度	挿入(甕+甕)		中期後半	
3	N-49.5°-E	25 度	挿入(甕+甕)		中期後半	棺内より丹塗土器口縁部小片1
4	N-55°-E	46 度	単（甕）	隅丸方形	中期後半	口縁部粘土帯（木蓋?）5号より古い
5		85 度	挿入(甕+甕)	楕円形	中期後半	4号より新しい
6	N-54°-E	33 度	挿入(甕+甕)	隅丸方形	中期後半	

土壙墓

（単位 cm）

No.	一段目堀り込み 長×幅×深	二段目堀り込み 長×幅×深	方　向	副葬品	備　考
1	156×※91×25	170×※47.5×33	N-32°-E		石蓋。2号より新しい 地内より土器片
2	70×※182×16	135×45×※30	N-5°-W		1号より古い 粘土帯（木蓋）。頭位に赤色顔料
3	250×※	157×43×52	N-81°-W		
4	202×※179×35	141×41×51	N-75°-W	鏡 1	列石
5	130×※132×	125×50×32	N-9°-E		
6	215×※105×25	140×42×35	N-14°-W	鉄斧1	列石，粘土帯（木蓋）
7	215×※75×15	158×40×50	N-89°-W		L字形に列石
8	145×※98×14	120×42×40	N-82°-E		
9		148×※54×10	N-35.5°-E		
10	150×110×22	99×30×37	N-68°-W		円形の列石
11	132×62×26	65×25×40	N-76°-W		
12	225×136×28	170×45×74	N-36°-W		∩の字形に列石
13		211×65×42	N-71°-E	素環頭刀子	（石蓋）粘土目張り
14		154×54×40	N-78°-W		頭位に2個蓋石，粘土床
15		122×49×36	N-87°-W	ガラス小玉	頭位に礫石，粘土床
S.1	92×46×34	56×18×25	N-65°-E		石棺

※は一部破損する

図

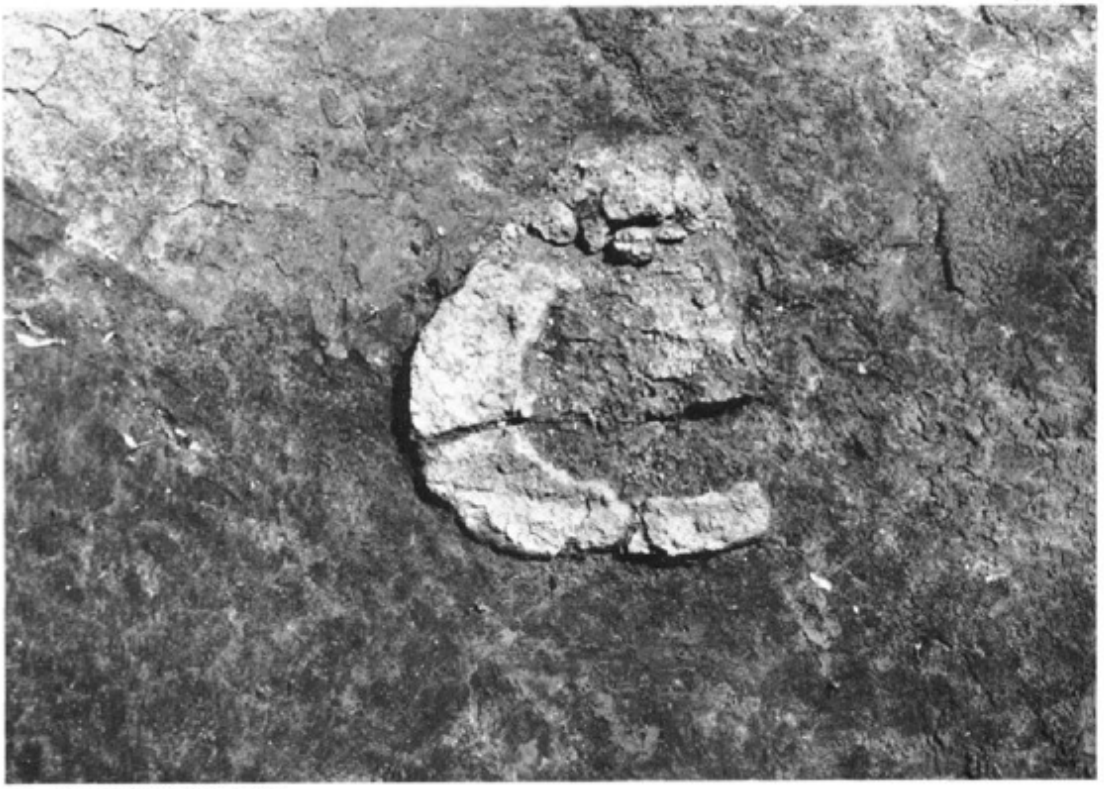
版

(1) 遺跡遠景（南西方向より）

(2) 遺跡遠景（東より）

(1) 墳丘断面（Aトレンチ北側）

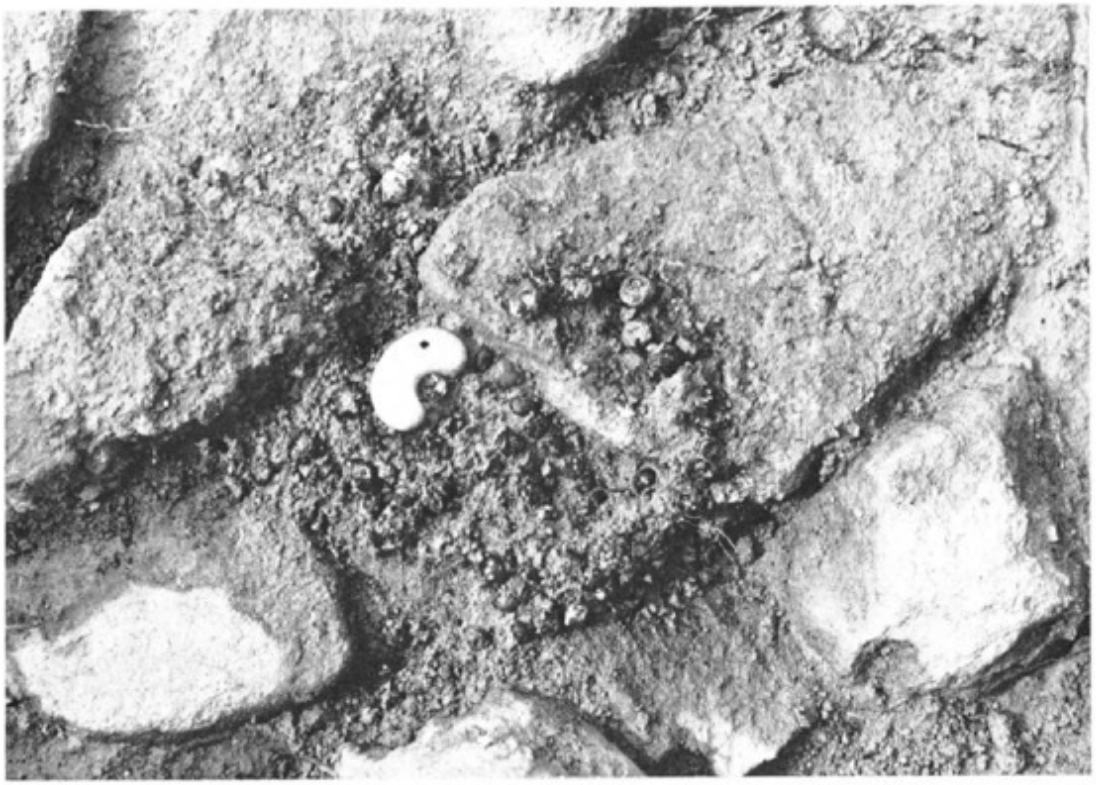
(2) 墳丘断面（Bトレンチ東側）



(1)　墳丘下出土鉄製鋤先

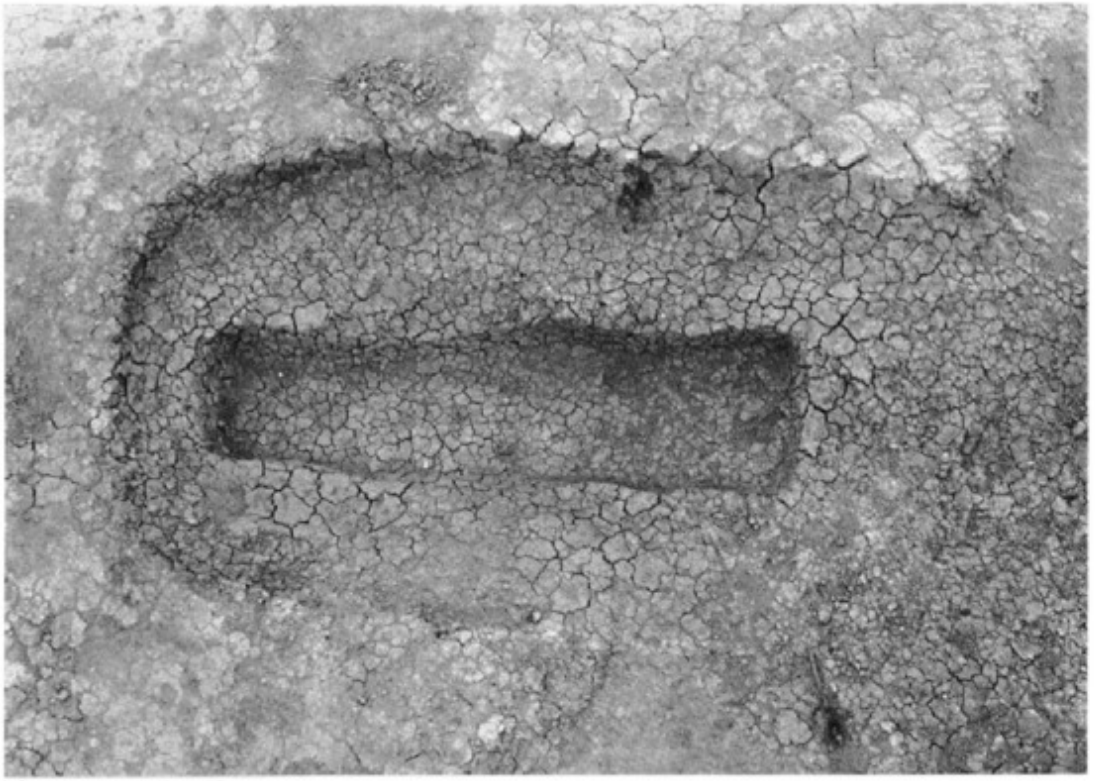
(2)　墳丘出土土師器

(1)　石室全景

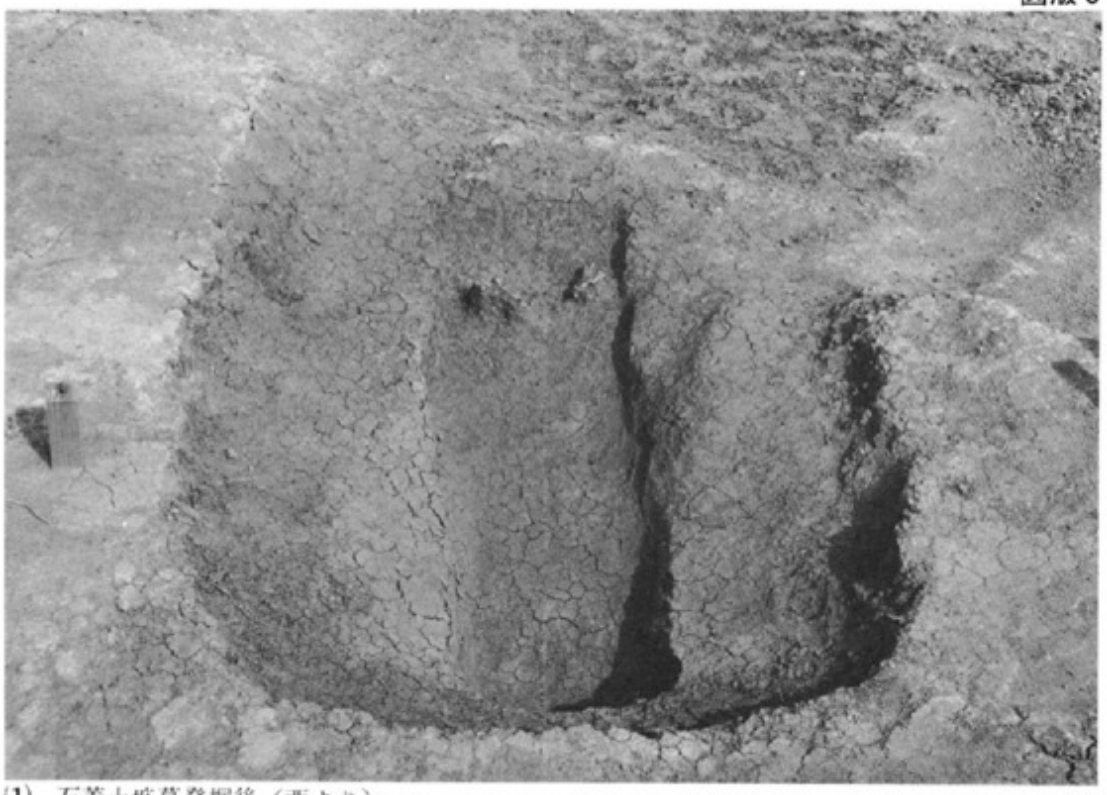


(2)　玉類出土状況

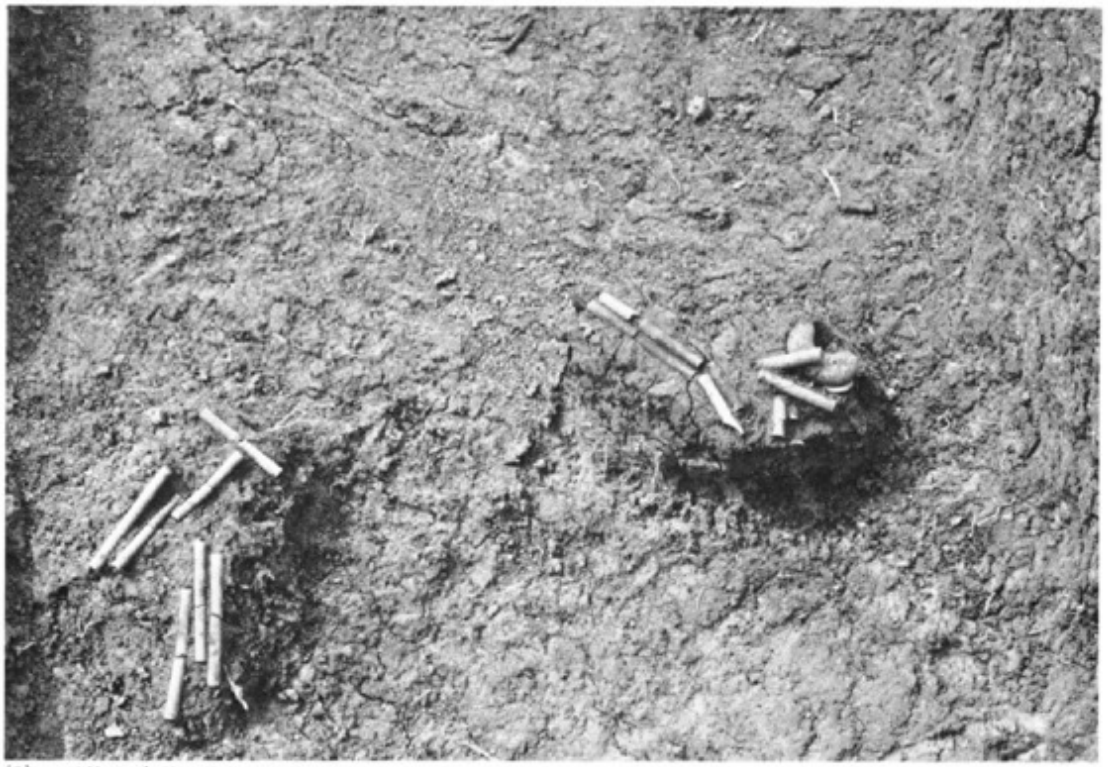
(1) 墳丘下発見の石蓋土壙墓



(2) 石蓋土壙墓全景



(1)　石蓋土壙墓発掘後（西より）

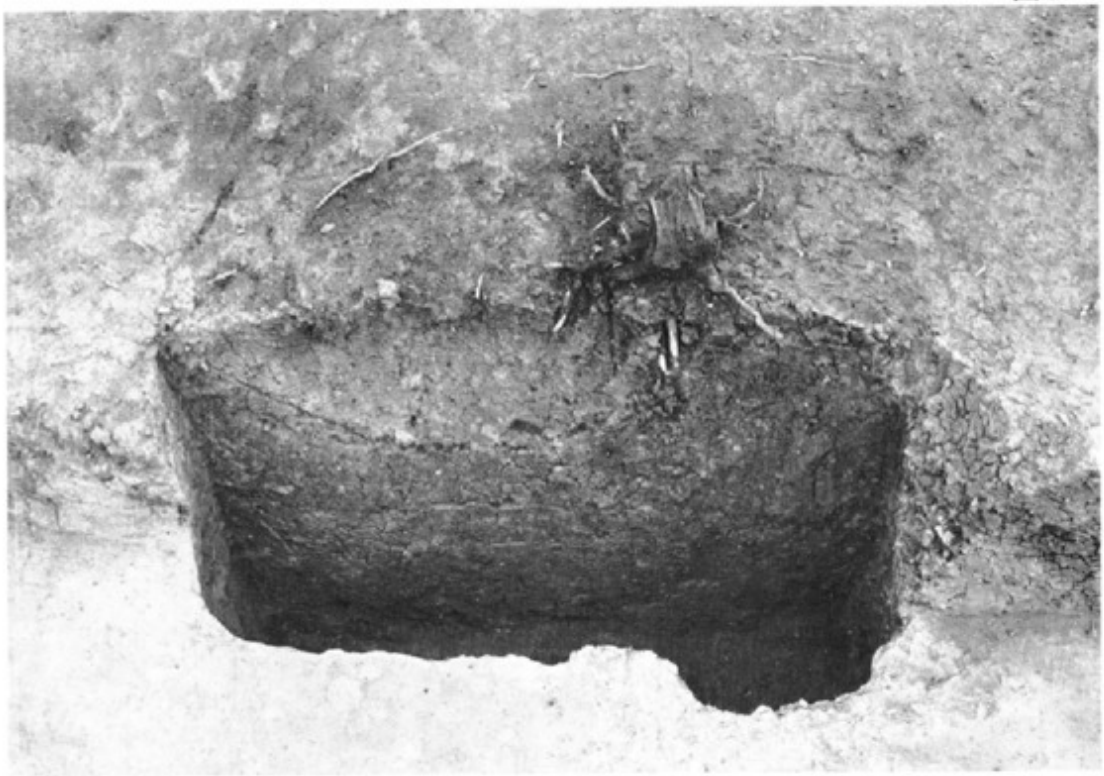


(2)　石蓋土壙墓玉類出土状況

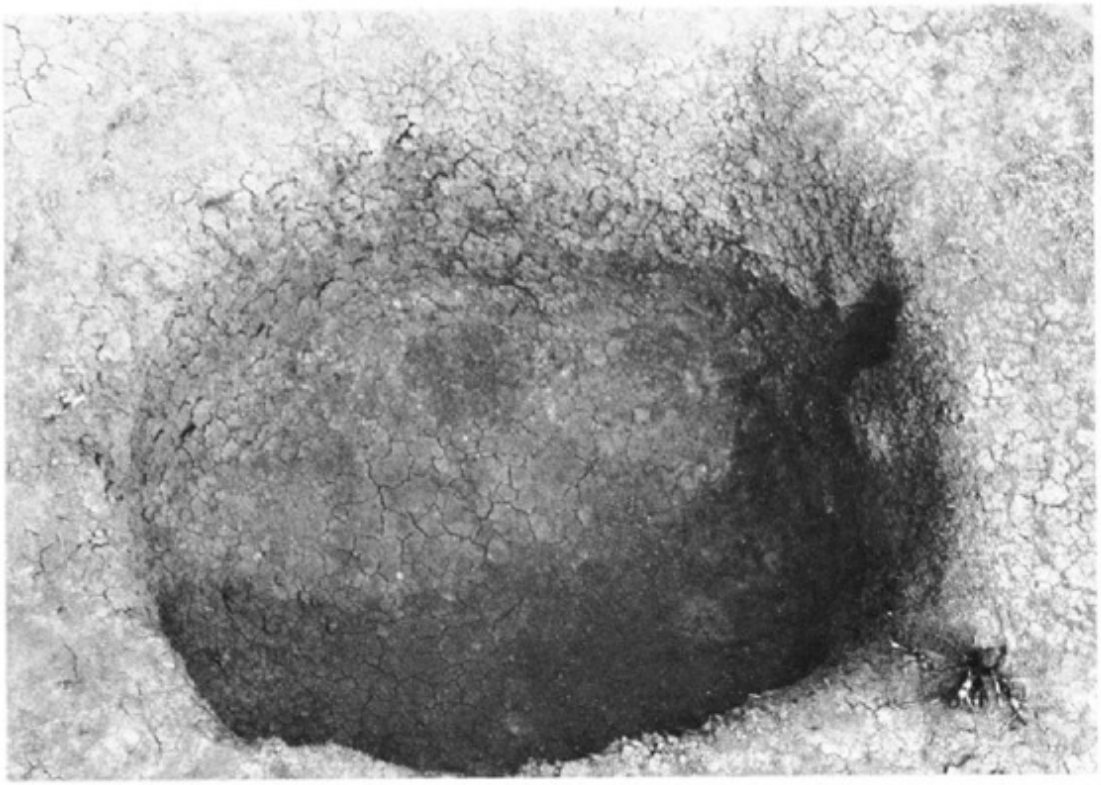
A地点全景

(1)　1号袋状竪穴

(2)　2号袋状竪穴

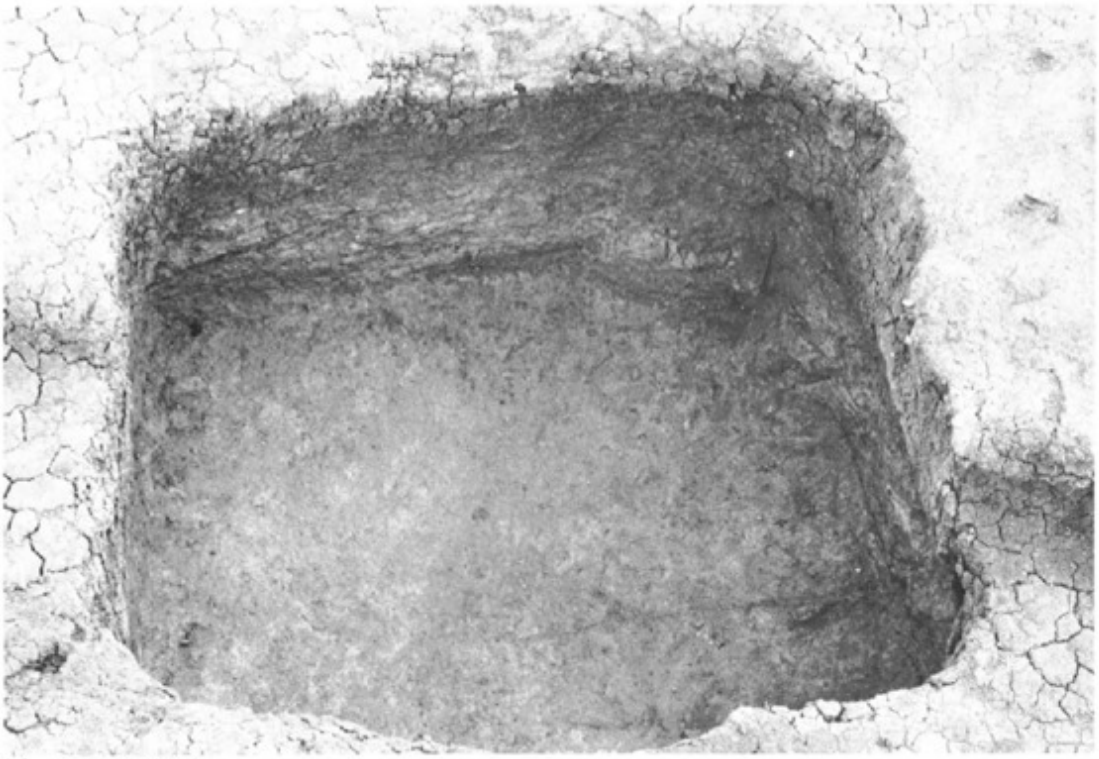


(1)　2号袋状竪穴断面



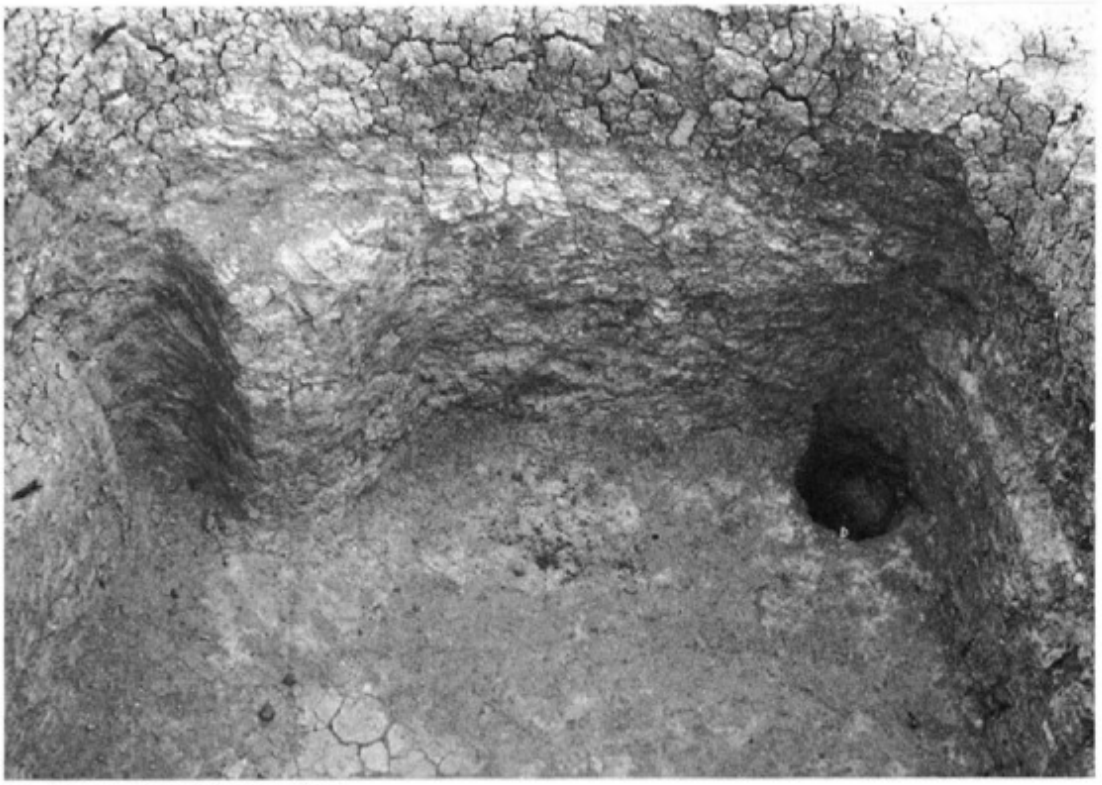
(2)　3号袋状竪穴

(1)　4 号袋状竪穴

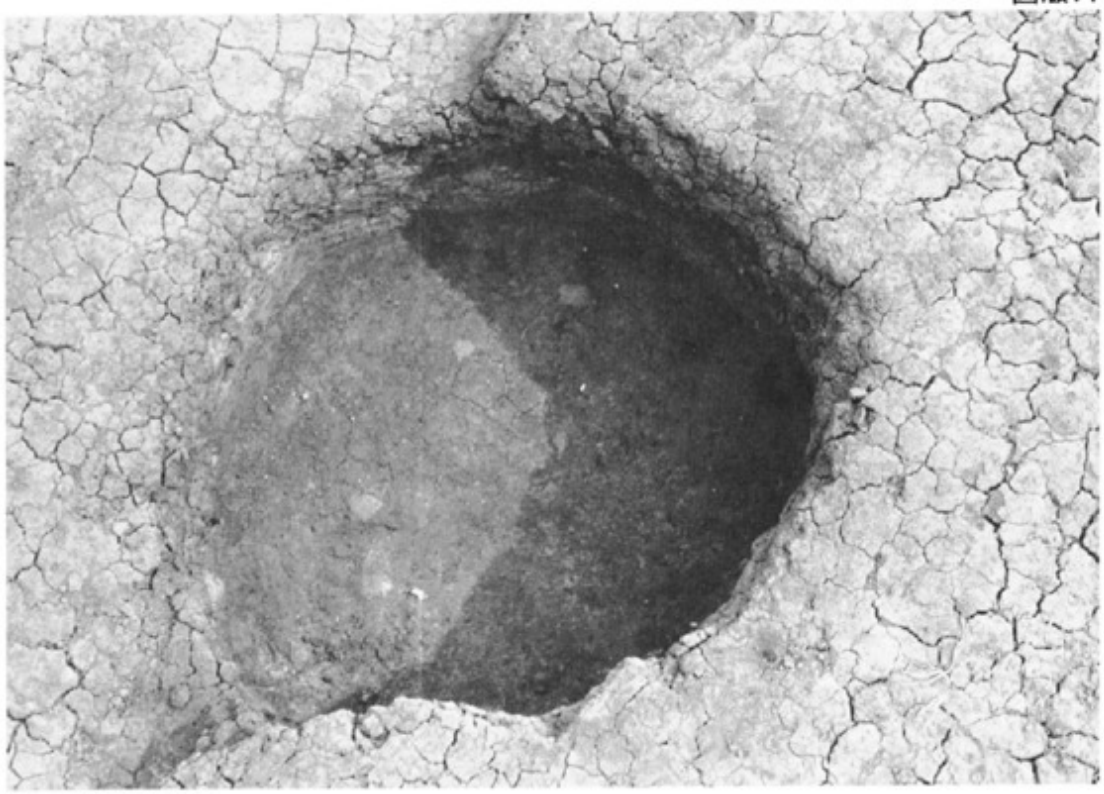


(2)　5 号袋状竪穴

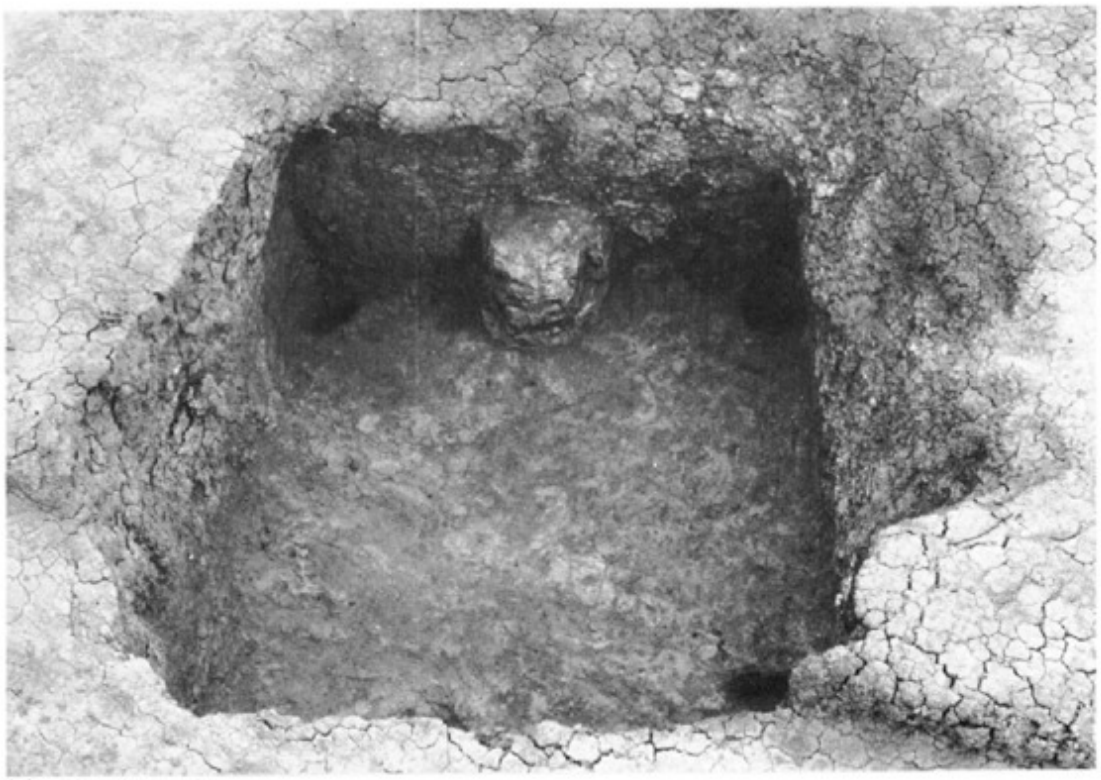
(1)　6号袋状竪穴



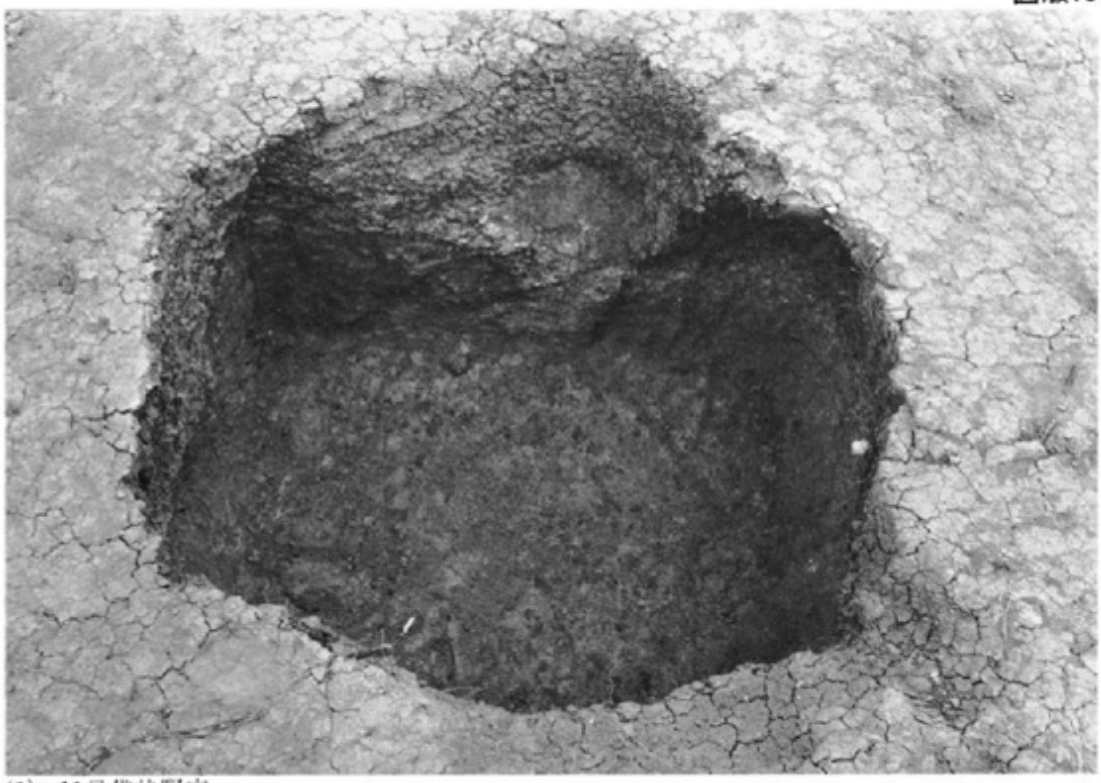
(2)　6号袋状竪穴踏み台近景



(1)　7号袋状竪穴

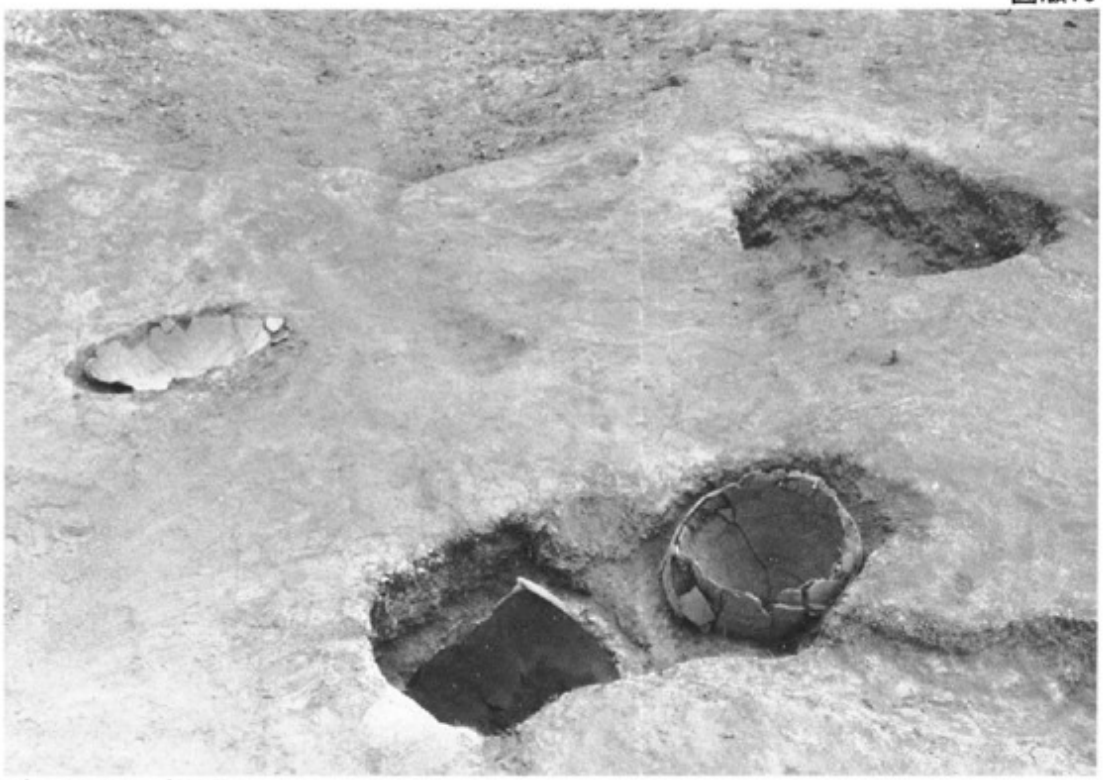


(2)　10号袋状竪穴



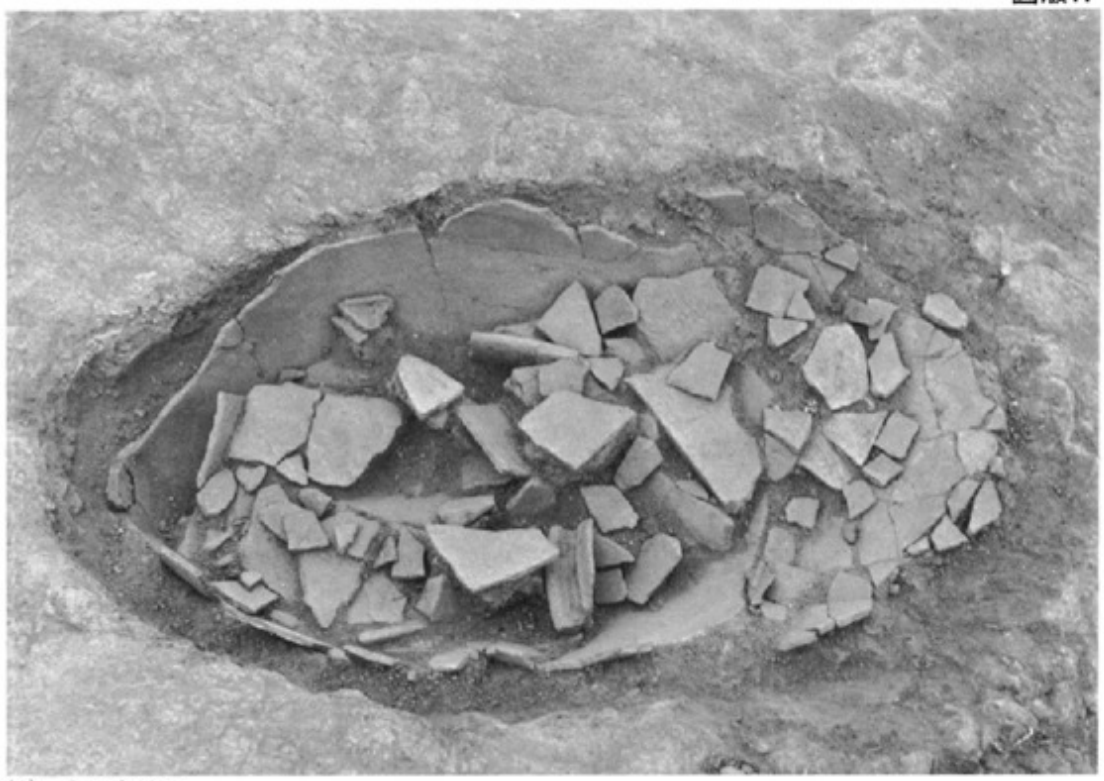
(1)　11号袋状竪穴

(2)　1～3号甕棺墓

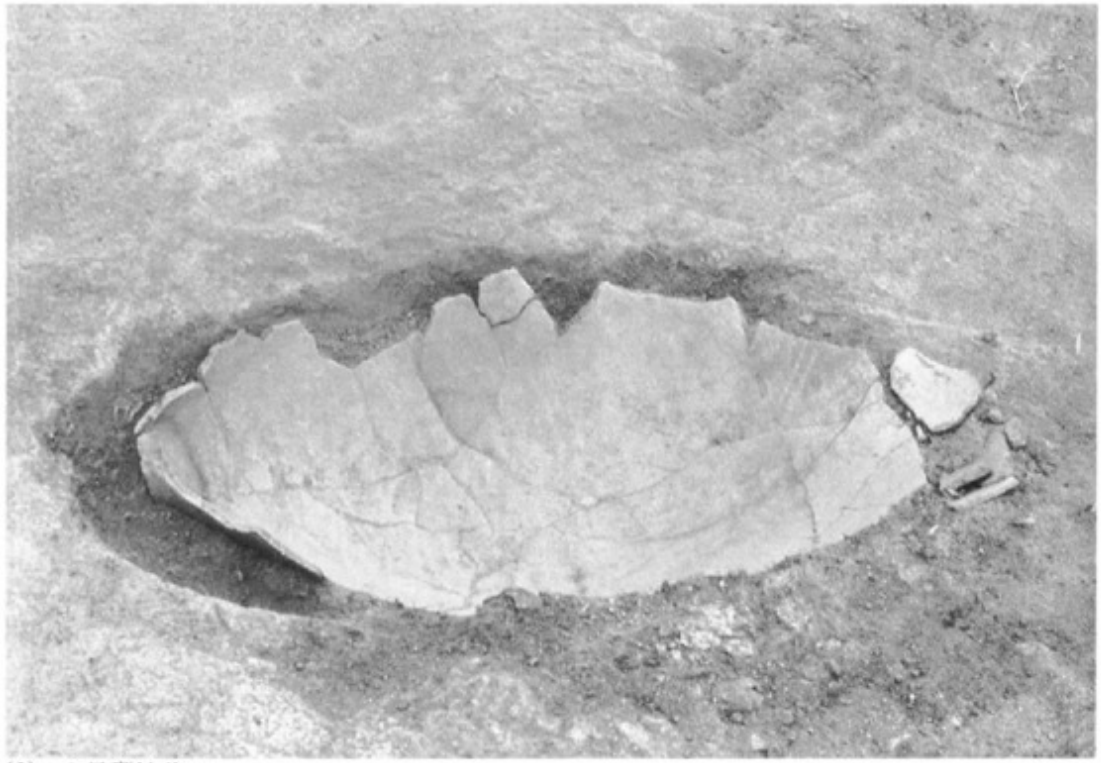


(1)　3～6号甕棺墓

(2)　1号甕棺墓

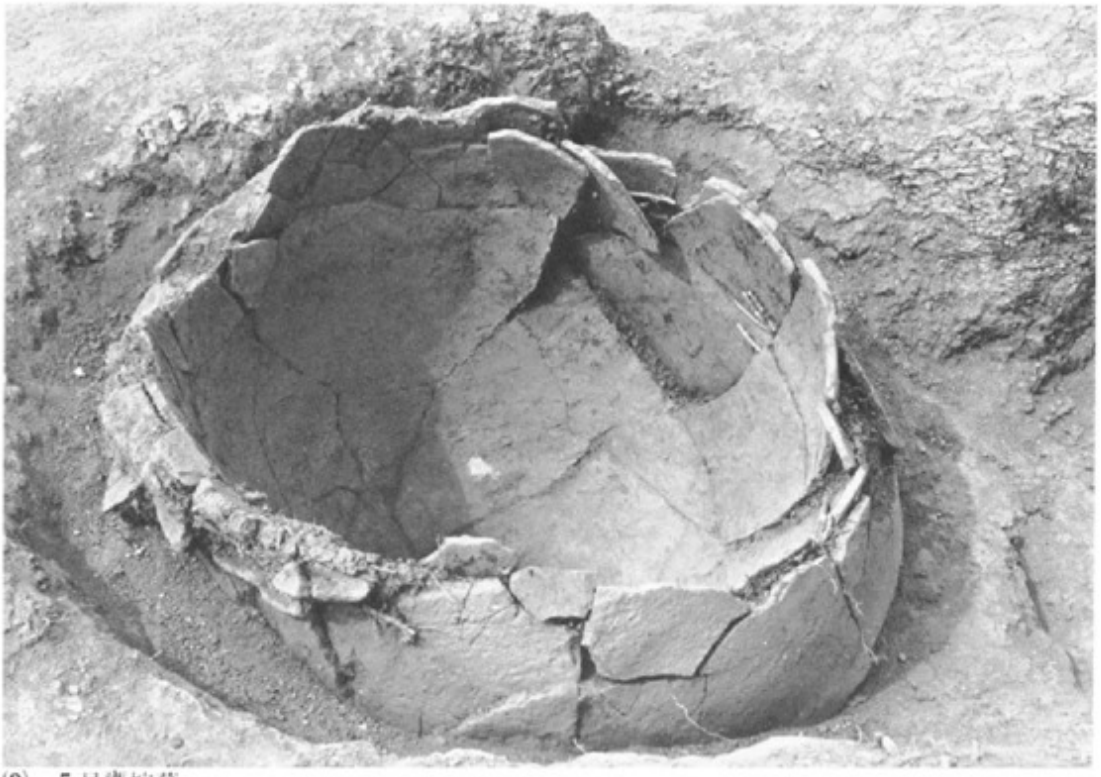


(1)　2号甕棺墓



(2)　3号甕棺墓

(1)　4 号甕棺墓



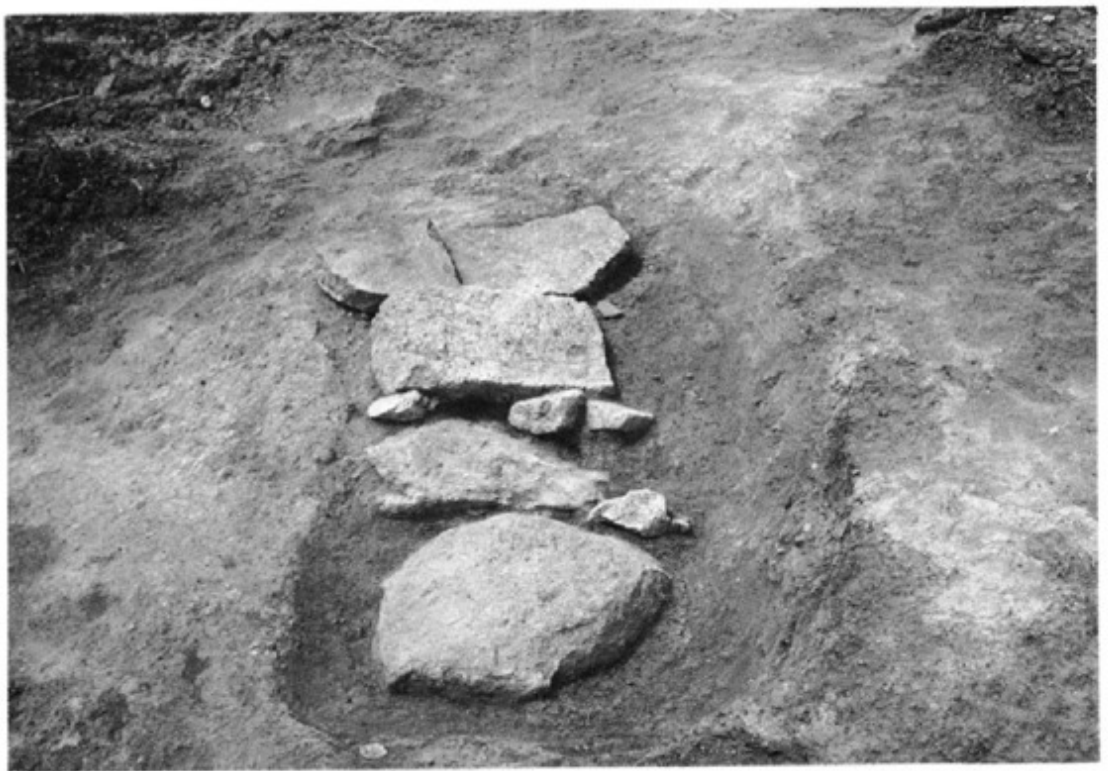
(2)　5 号甕棺墓

(1)　6号甕棺墓

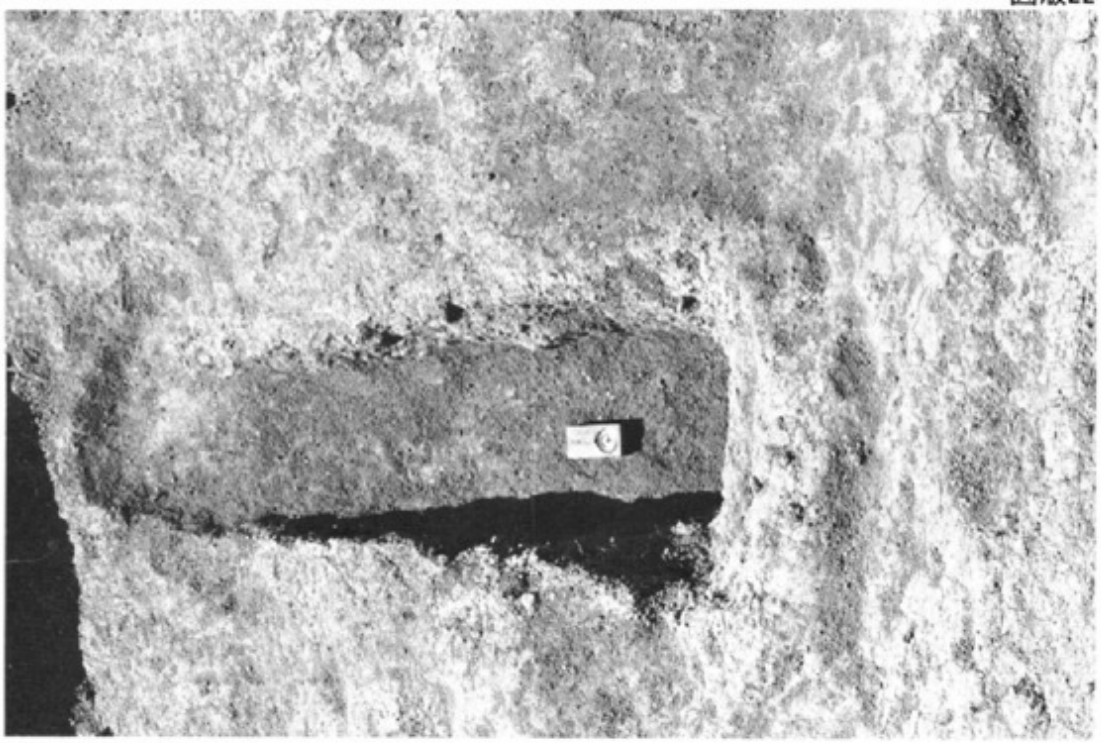
(2)　6号甕棺墓

B地点土坑墓全景

(1)　1号（石蓋）土壙墓（西より）

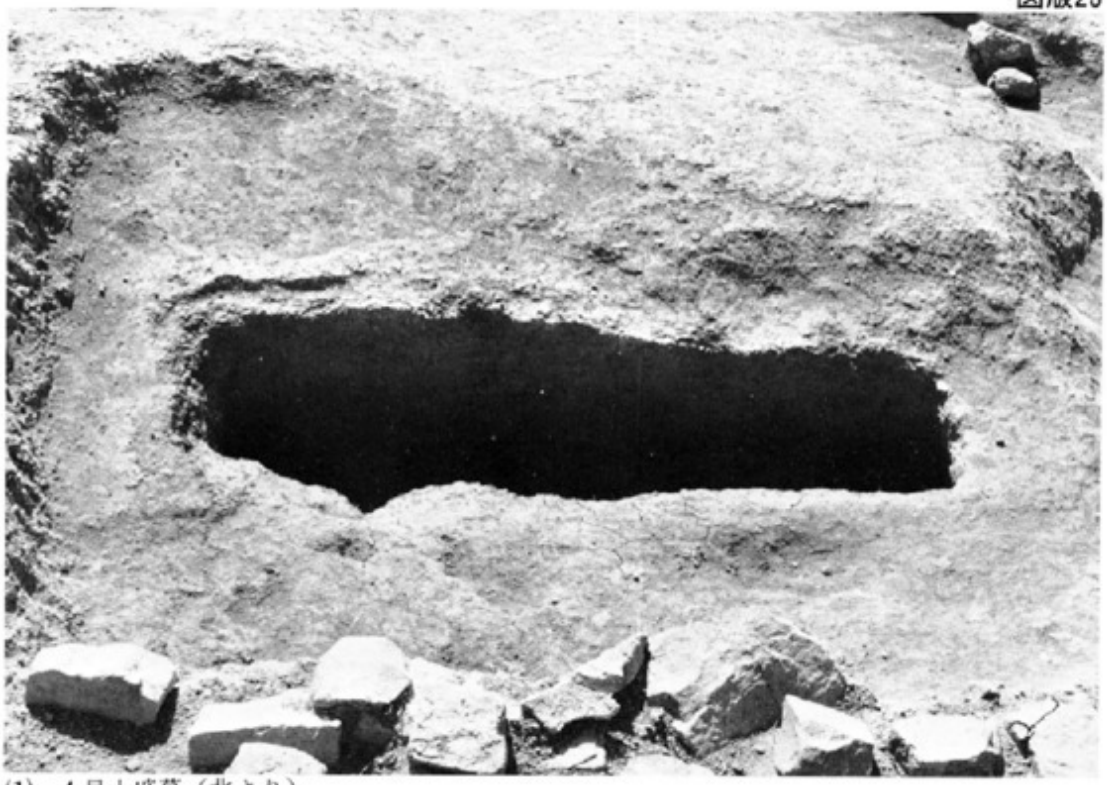


(2)　1号（石蓋）土壙墓（北より）

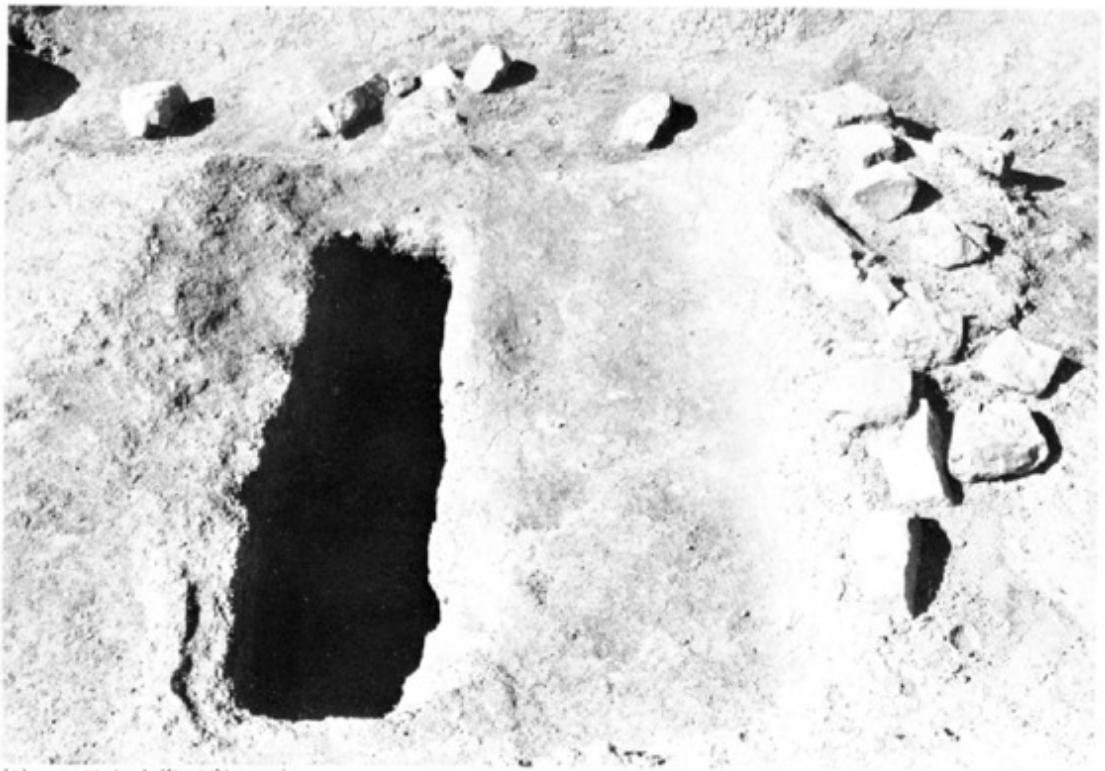


(1)　2号土壙墓

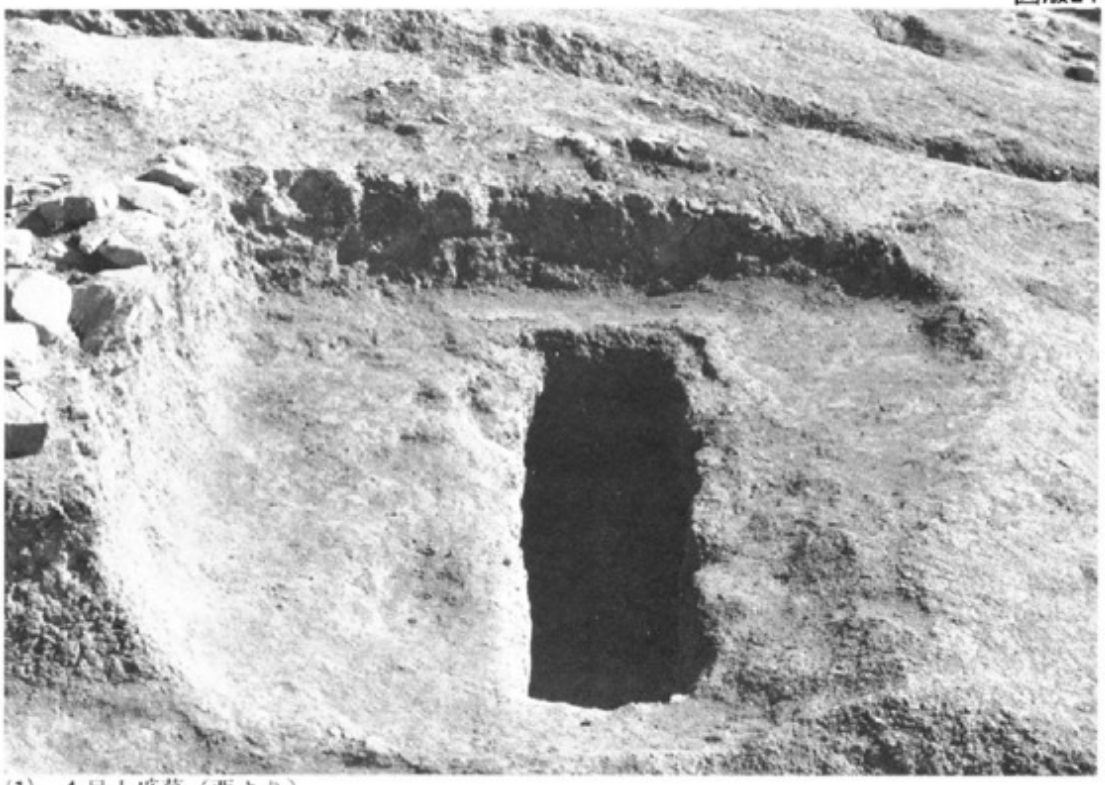
(2)　3号土壙墓



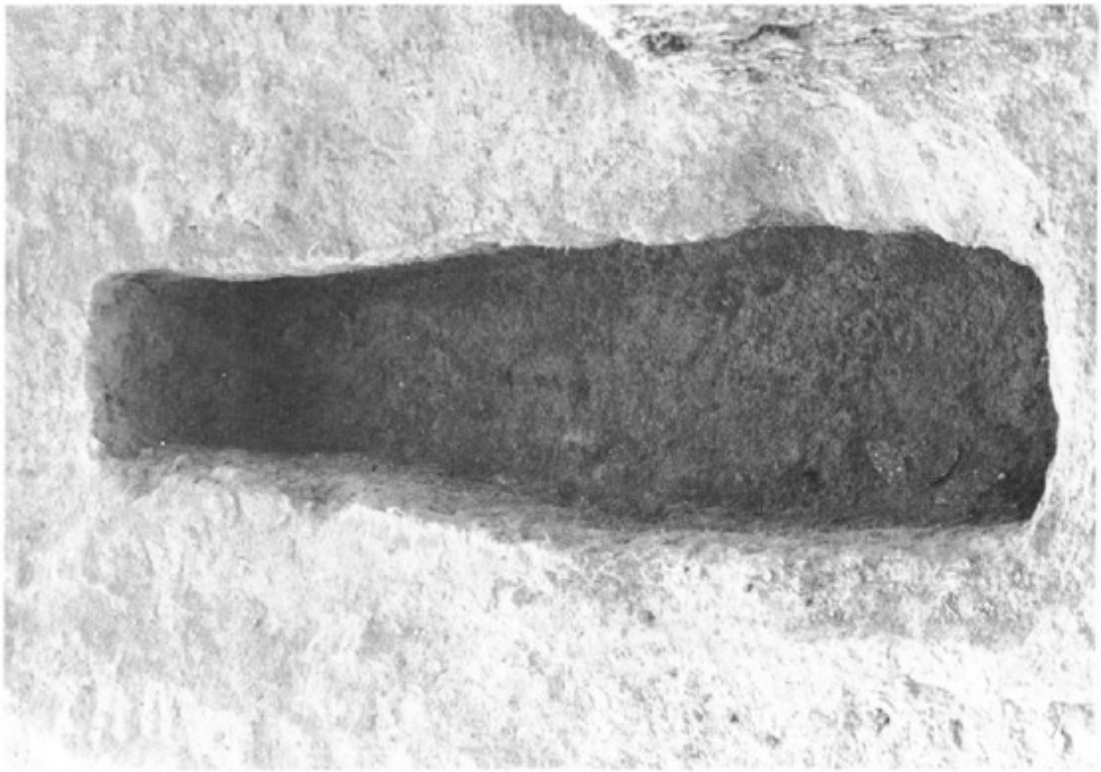
(1)　4号土壙墓（北より）



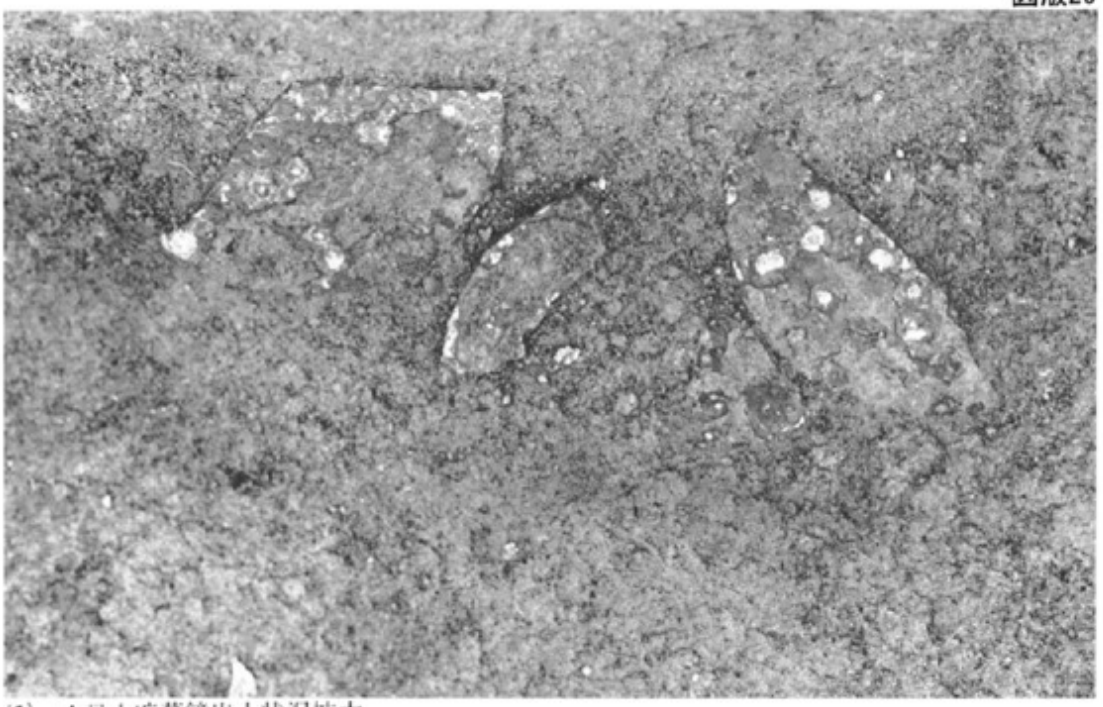
(2)　4号土壙墓（東より）



(1)　4号土壙墓（西より）

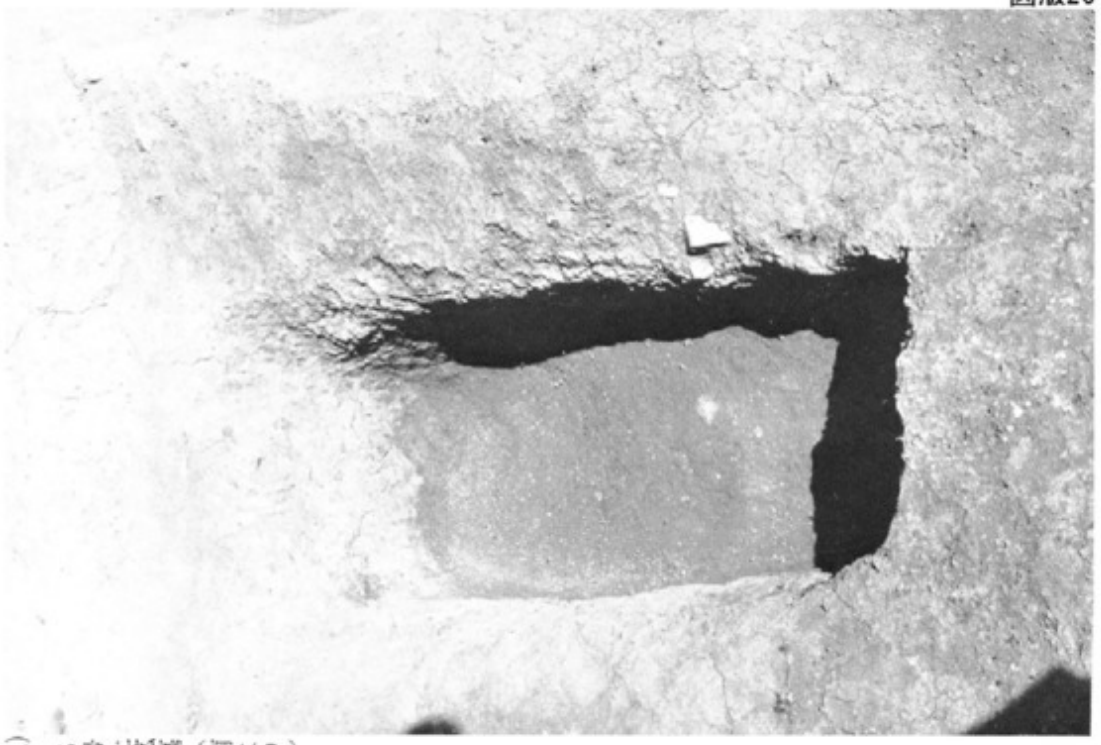


(2)　4号土壙墓2段目掘り込みと鏡出土状況

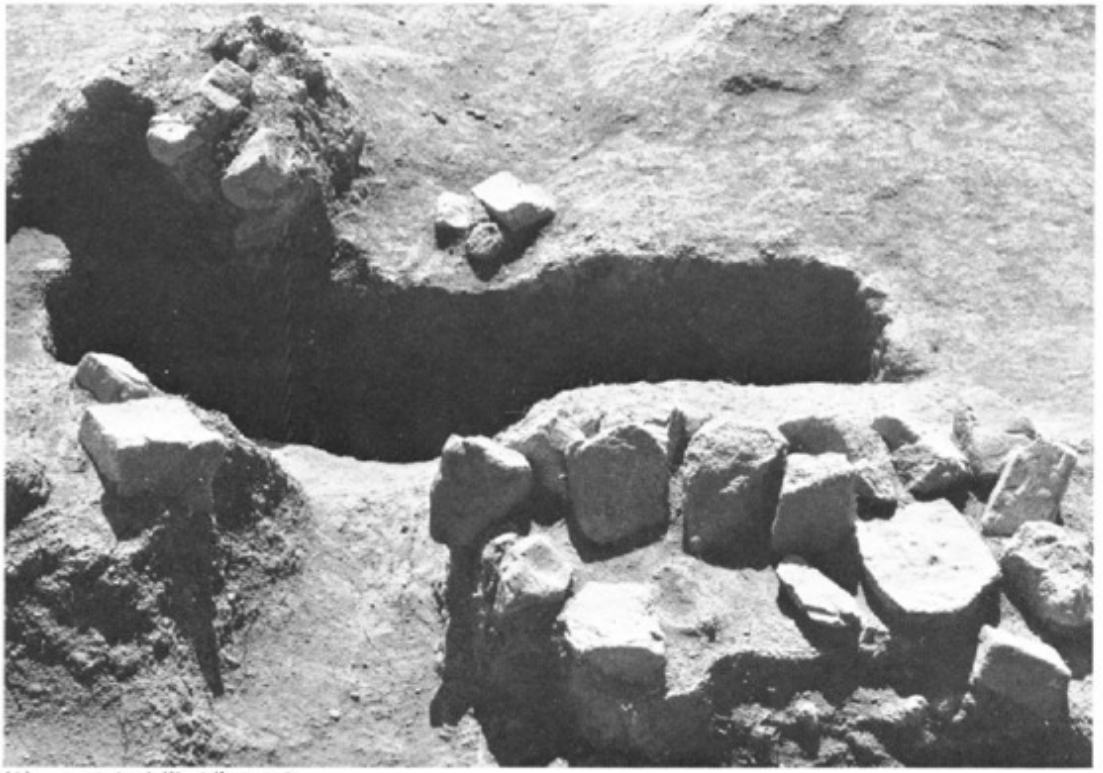


(1)　4 号土壙墓鏡出土状況拡大

(2)　5 号土壙墓（西より）



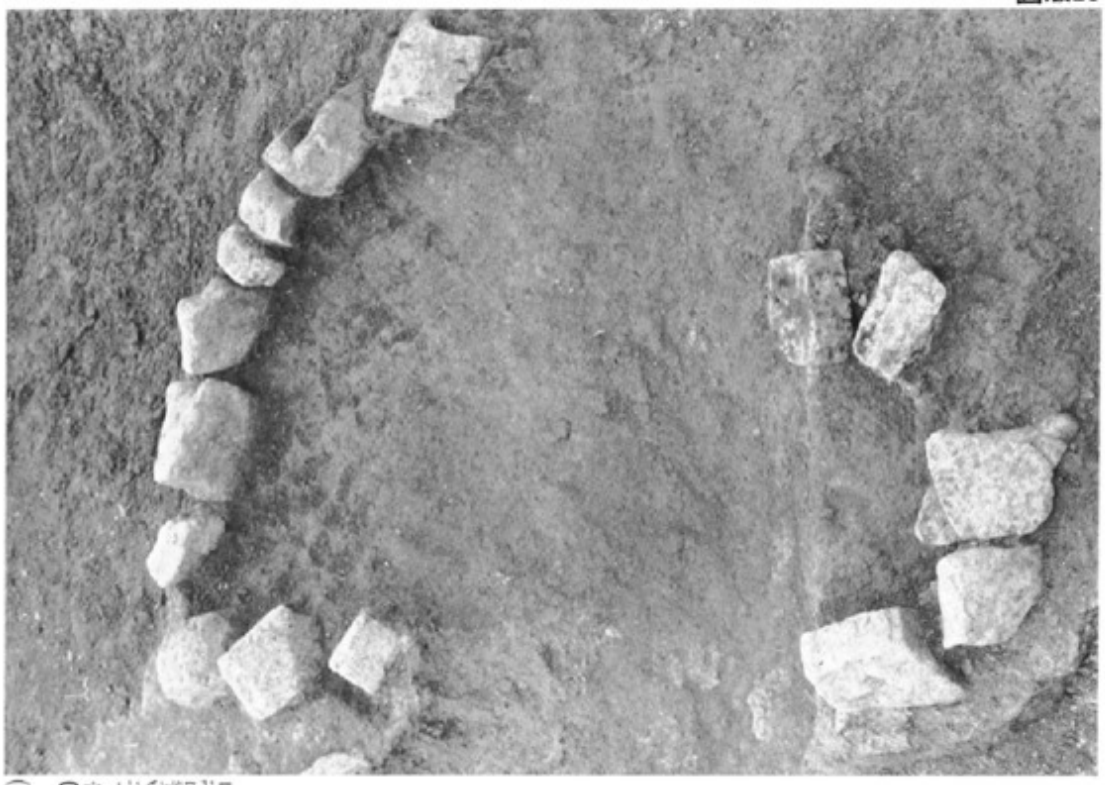
(1)　5号土壙墓（東より）



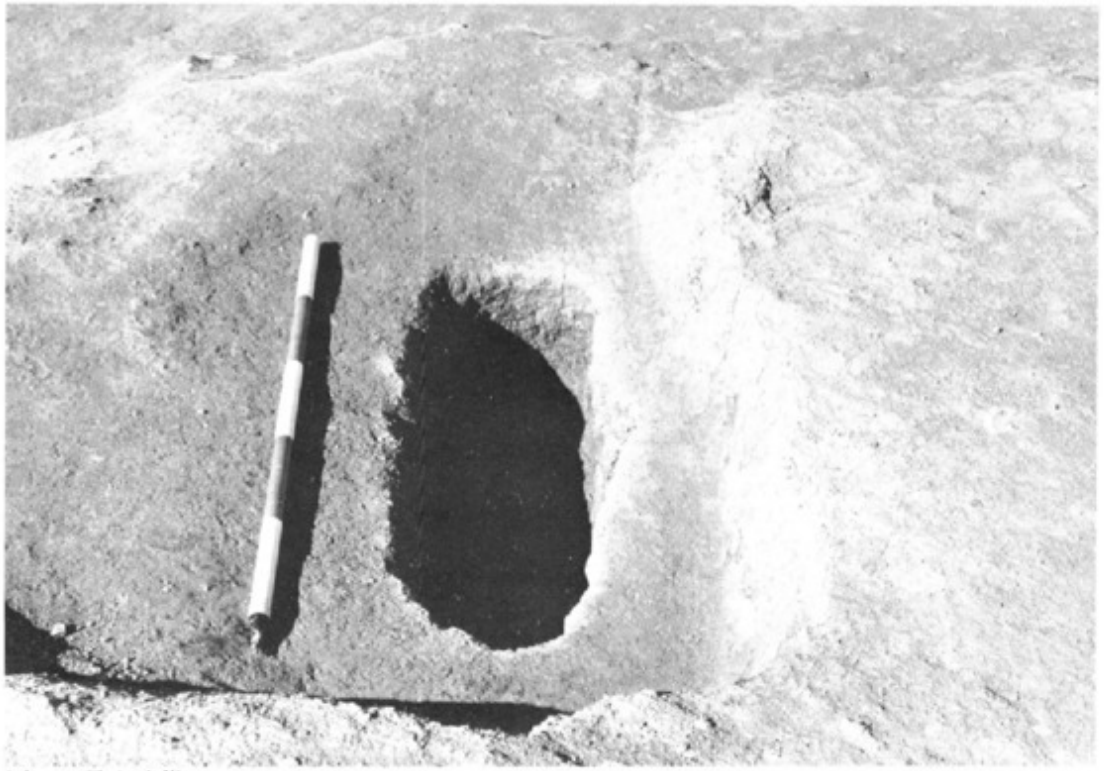
(2)　7号土壙墓（北より）

(1)　7号土壙墓（東より）

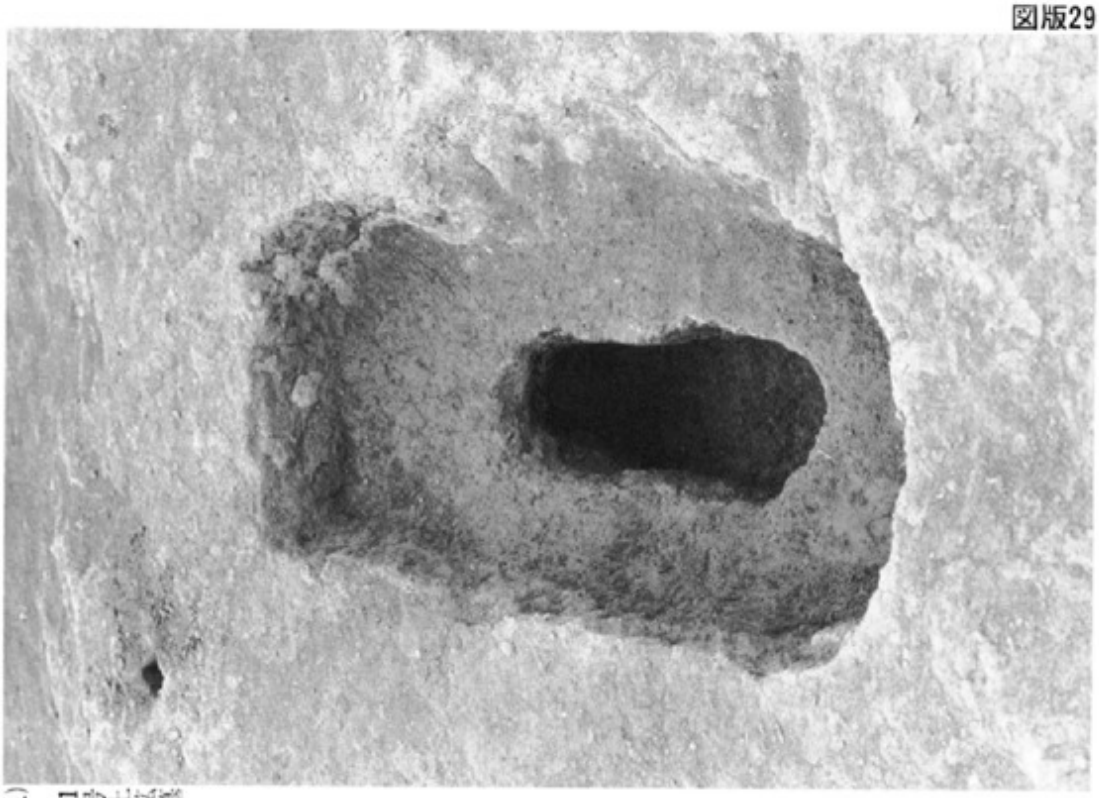
(2)　7号土壙墓（西より）



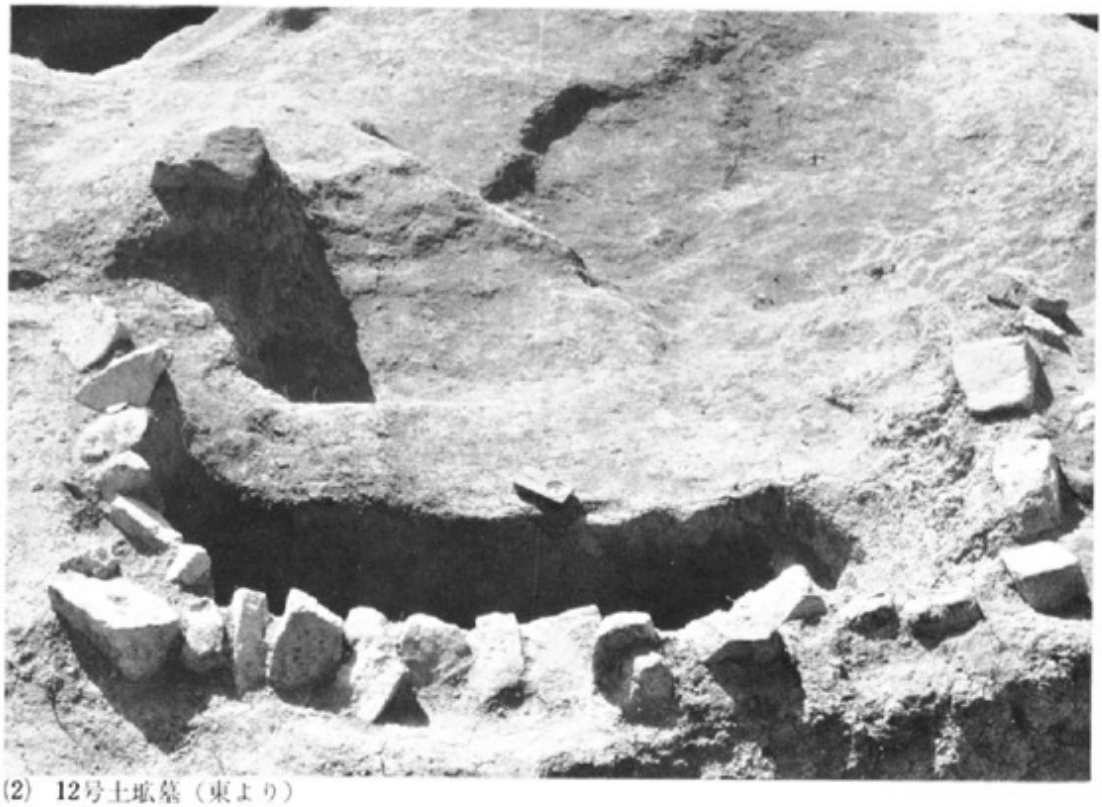
(1)　10号土壙検出状況



(2)　10号土壙墓



(1)　11号土壙墓

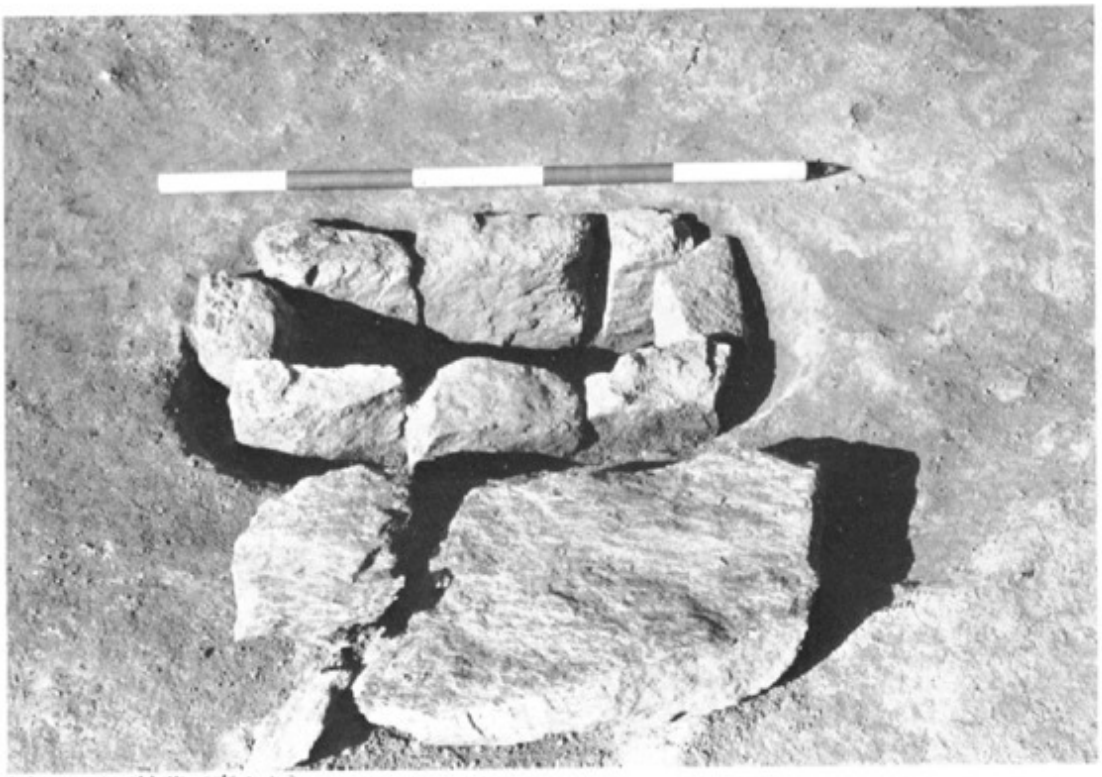


(2)　12号土壙墓（東より）

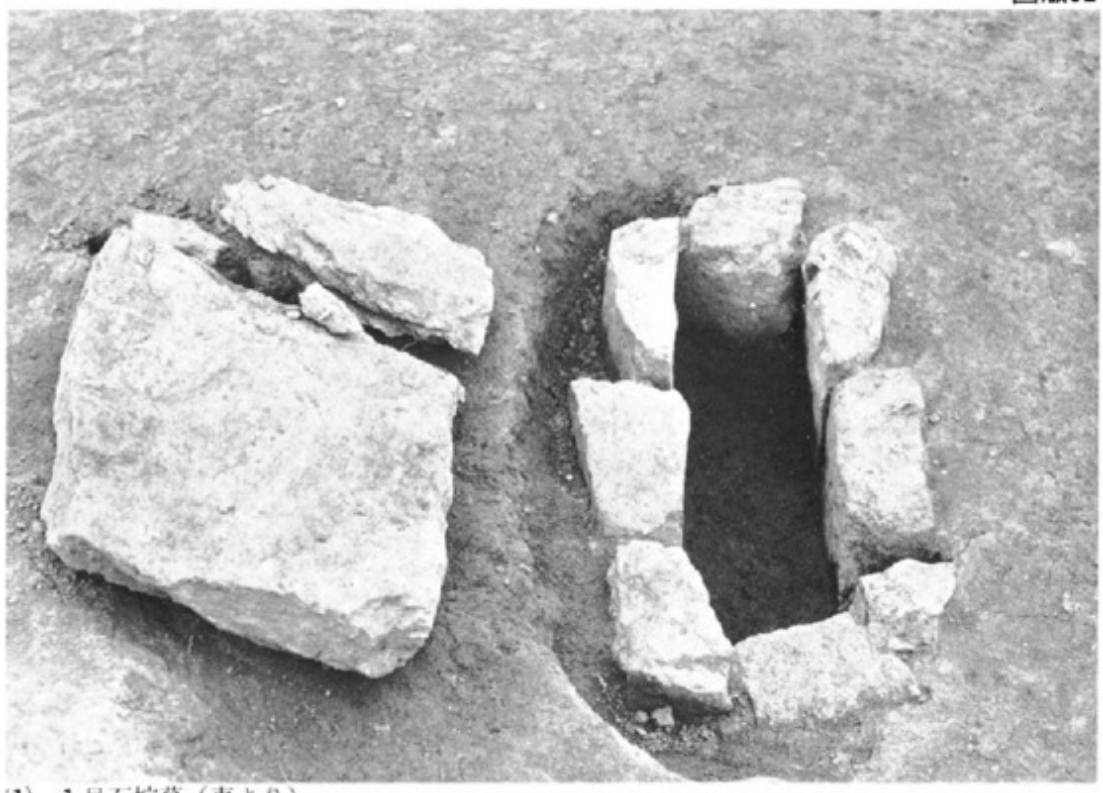
(1)　12号土壙墓（南より）

(2)　13号（石蓋）土壙墓（南より）

(1)　13号（石蓋）土壙墓（東より）



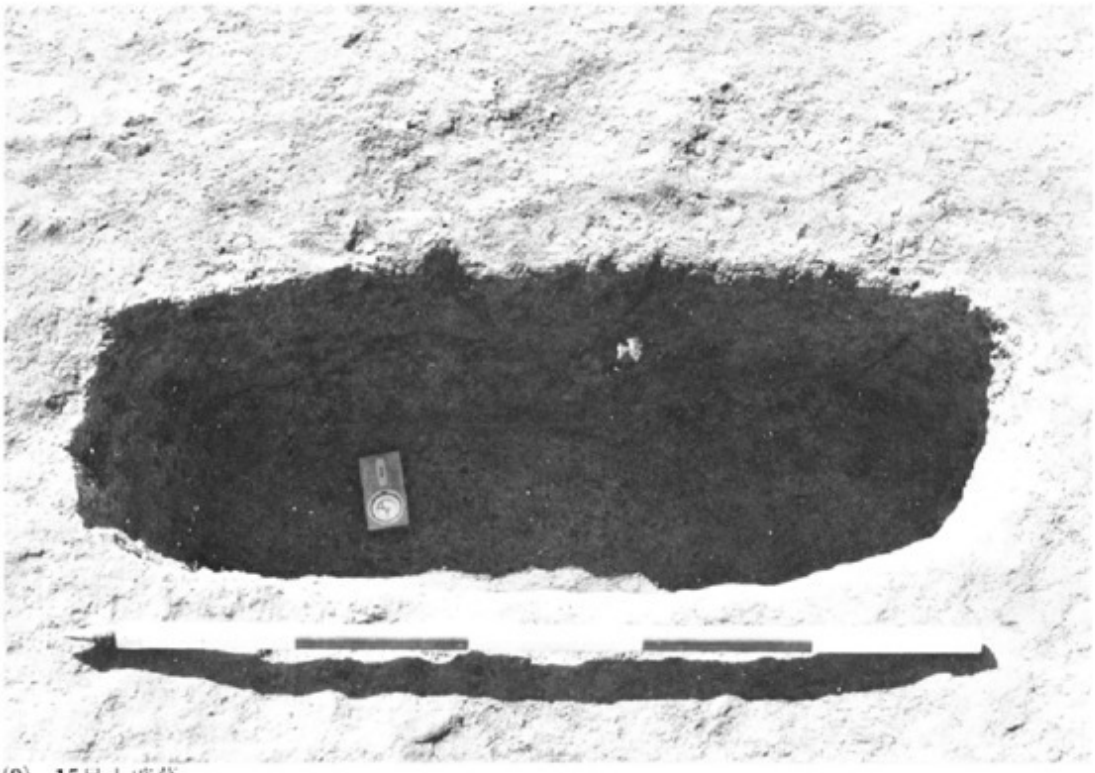
(2)　1号石棺墓（南より）



(1)　1号石棺墓（東より）

(2)　1号石棺墓　13号（石蓋）土壙墓

(1) 14号土壙墓

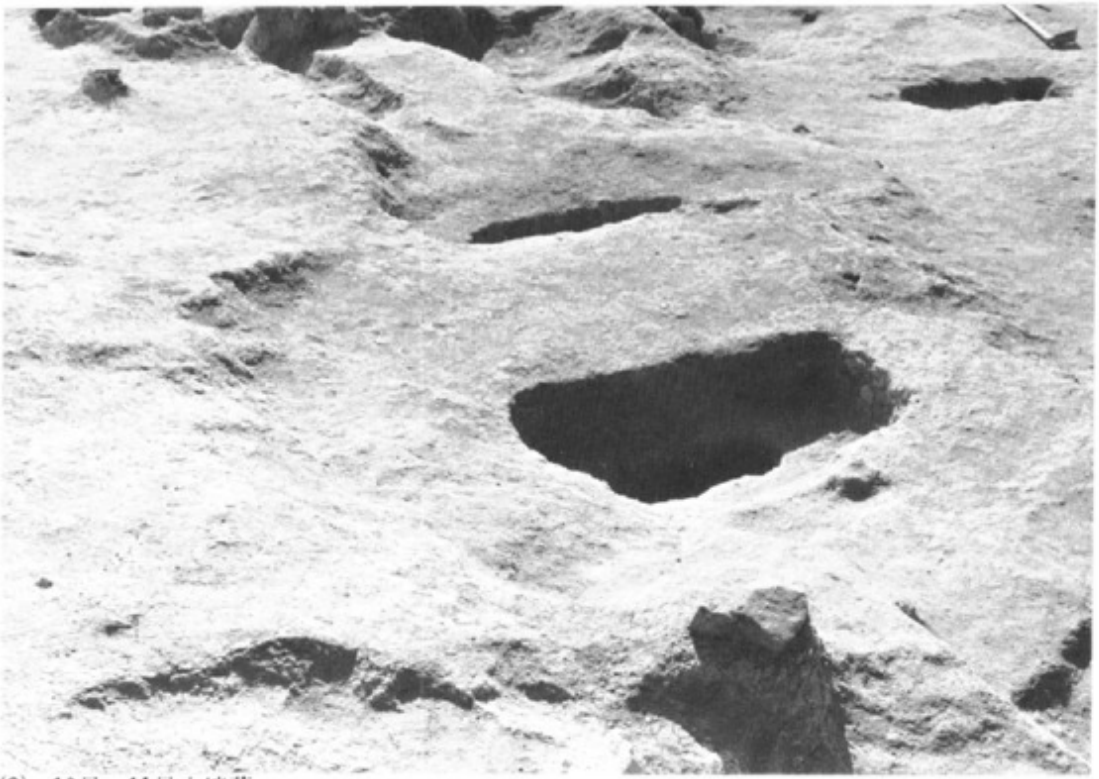


(2) 15号土壙墓

(1)　B地点土壙墓と土層

(2)　B地点土壙墓群

(1)　B地点土壙墓群



(2)　10号　11号土壙墓

(1)　4号　5号土壙墓

(2)　石組遺構

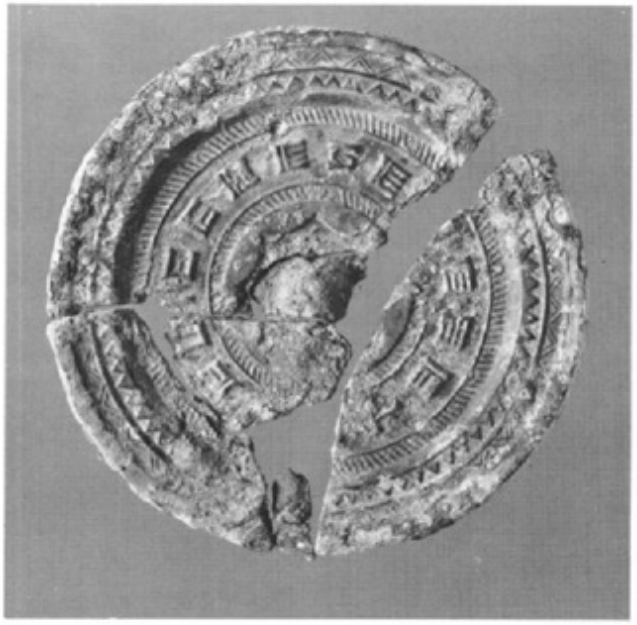
①

②

③

④

宝満尾古墳出土遺物　①　鉄鏃　②　玉類　③　不明鉄器　④　鋤先



①

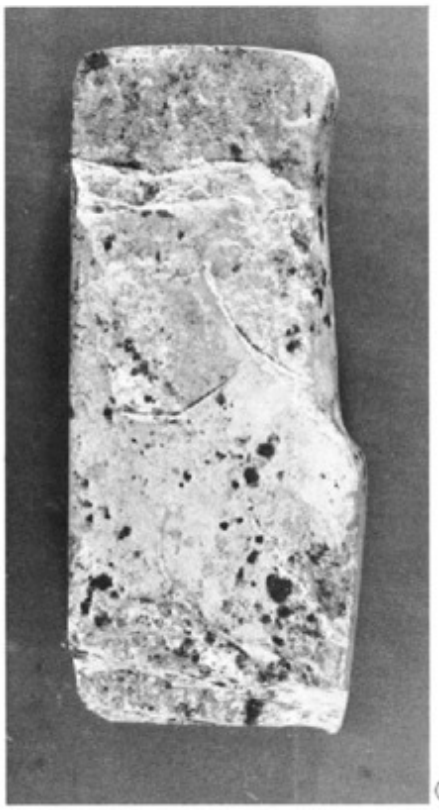
③

②

④

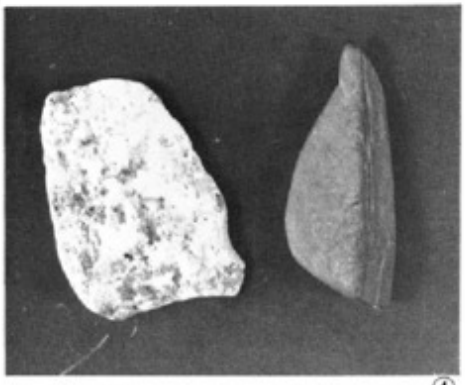
B地点土壙墓出土遺物　① 4号土壙墓出土鏡　② 15号土壙墓出土玉類
③ 6号土壙墓出土鉄斧　④ 13号土壙墓出土素環頭刀子

B地点弥生式土器



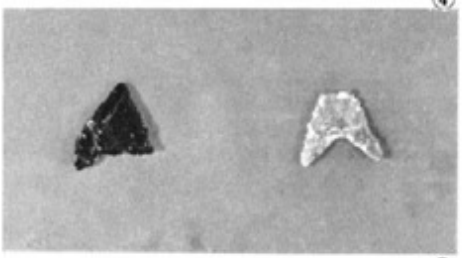
①

③

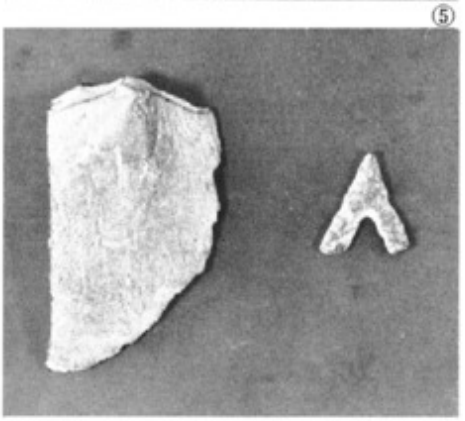


④

②



⑤



⑥

石器　①~④ 石斧　⑤ 石錐　⑥ A地点袋状竪穴出土石器

宝満尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集

昭和49年3月30日発行

編集
発行　福岡市教育委員会

印刷　株式会社 チューエツ

宝満尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第二六集

福岡市教育委員会